
サンタクロースの恋人

池本いつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンタクローズの恋人

【Nコード】

N7701U

【作者名】

池本いつき

【あらすじ】

12月23日に来たのは、見習いのサンタクローズさん。さて、この人、若くて細くてなかなかイケメン。だけどサンタさんとは似ても似つかない格好。この人、本当にサンタさんなんだろうか。そんな出会いから始まった、月に一度の逢瀬。短編連載から始まった『サンタさんシリーズ』を移動させました。

あわてんぼうの(前書き)

『サンタさんシリーズ』移動させました。

あわてんぼうの

雪の全くちらつく様子のない本日、十二月二十三日の深夜。そろそろ寝ようとしていたわたしの目の前に一人の男が現れた。

……いや、窓から普通に入ってきた。あまりにも自然すぎて、何も言うことができない。まるで自分の家に帰ってきたかのような自然さだ。

間違いなく不審者であるにもかかわらず、悲鳴を上げようと思えなかった。

何と言うか、今にも『ただいまー』と口に出しそうで、そうされてしまえば思わず、『おかえり』と返してしまいそうだ。

「あー」

「こんばんは。お嬢さん」

真っ白な髪に、明るい蒼い眼。そしてサンタクロースの目に痛いほど派手な赤い服。ふわふわのファーがついていて、絵本から抜け出してきたみたい。

ご丁寧に大きな白い袋まで担いでいる。どこからどう見ても、サンタクロースの格好。

が、サンタクロースには見えない。ふわふわの白い髭もないし、なんせ彼は若い。ついでに言うと、恰幅もよろしくない。

細い、というかまあ、標準。だけど絶対サンタさんに相応しくない容姿だ。もつとふつくらしてこそそのサンタクロースじゃないだろうか。

「まさにクリスマス日和ですね」

日和？ クリスマス日和って具体的にどんな日を指すんだろう。

ホワイトクリスマスのことを言うんなら、今日はクリスマス日和には当てはまらないと思う。

肝心なのはそんなことではないだろう、と自分自身につっこみつつ、サンタというには細すぎ、若すぎの男を見た。でも格好はサン

タなのだ。間違いなく。

絵本で見た、日本のどこにもこの季節飾られている、一般的なサンタクロースの格好。疑うべくもなく。

「よい子のあなたにプレゼントを」

男がそう言いつつ、後ろに置いた白い袋を探る。そこでようやくわたしは、今、自分のおかれていた状況と、今日の日を思い出した。

えっとー、クリスマス……??

「今、二十三日の十一時五十分なんですけど」

ゴソゴソと白い袋を漁っていた男の手が止まる。

そしてちらりとこちらを振り向いた。日本人とは違う雰囲気を感じている彼の、綺麗な蒼い瞳としばらく見つめ合う。

チツチツと時計の秒針の音だけが響いたあと、彼はにっこりと笑った。サンタさんの柔和な笑顔だということは認めよう。

穏やかで、優しく、紳士的なサンタさん。ただしすごく若い。

「お嬢さん、さっきの言葉をもう一度言っていたいただけますか？」

酔っている様子はない。『よい子のあなたに』とも言った。そして明日はクリスマスイブだ。

サンタのふりをして子どもにプレゼントを届けるバイトさん、とかかもしれない。今日初めてで、日にち間違えちゃったという可能性だってある。

そう思いつつ、彼の瞳に見入る。カラーコンタクト？ それともそれっぽい北欧系の方を雇った？

日本人ではないのだろうけど、ここまで澄んでいる目って珍しいと思う。すごく、素敵な色。空の色でも、海の色でもない、ただただ澄んだ蒼。

「今日は二十三日で、今、十一時五十分過ぎなんですけど」

「ウソっ!!」

あ、やっぱり間違えてたんだ。この人。

しかもわたしはプレゼントをもらうような年でもないので、届け

先も間違えたことになる。バイト代、ちゃんと出るかな、こんなので。

「二十四日の深夜では……」

首を横へ振った。確かに、町中がクリスマスモードなので、たとえ今日が二十四日だったとしても違和感はないだろう。

間違えるのも、まあ、少し無理はあるにしてはないとも言いきれない。

が、いくらサンタのふりをするバイトだからといって、人の家に勝手に入ってくるのはいかなものだろうか。

せめて玄関から入るとか、ノックするとか最低限のマナーを守って欲しいと思う。問題はそこではない気もするが。

つつこみどころがありすぎて、どこからどうつつこんでいいのか分からない。いや、つつこまなくてもいいのかもしれないけれど。

「どうしよう……。初仕事でこの失敗」

蒼い目が揺らめいた。不安そうに光をはじく。悪いことを言ってしまったような罪悪感に襲われた。何故だかこちらが凄くひどいことを言ってみたみたい。

ただ、正しいことを言っただけなんだけど、すごく罪悪感。ごめんなさい、余計なことを言ってしまったって。

「サンタ失格？　もしかして向いてない？　せっかく挨拶からプレゼントを渡すときの言葉まで考えて練習してきたのに？」

今、サンタって。サンタって言った。若い男が、髭もない赤いサンタ服を着た男が自らサンタと名乗った。

やっぱり酔っているのかもしれない。もしかしたらクリスマスイブのイブだからって浮かれているのかも。

不審者……。警察に連絡したほうがいい感じ??　いや、でも、悪い人には見えないし。イケメンだからって、騙されちゃいけない、気もするけど。

「えっと」

「おじいちゃんに何を言われるか。一日早くて、しかも髭は途中で

取れるし、お腹の詰め物は忘れてくるし」

あ、髭とか最初はつけてたんだ。詰め物、してくるつもりだったんだね、この人。

「あなた、サンタクロースなの？」

ためしに聞いてみる。すると彼はぱつと顔を輝かせた。サンタというよりは、まだそれを信じている子どもみたいな顔をする。

彼はそのままわたしの肩を掴んで前後に揺らしながら、『信じてくれるの??』と聞いてくる。

いや、心の底から信じているわけでもないんだけど、と言い損ねた。

「サンタクロースって言うか、その跡継ぎなんだ」

聞いてもないのに語りだす。

自慢げに、誇らしげに。何かちょっと可愛いなあ、この自称サンタクロースさん。

「今日ちゃんとプレゼントを届けることができたから見事合格。来年から僕がサンタクロース」

「代替わりって、あるんだ。サンタなのに」

まだちよつと信じていない。だけどこの人が嘘をついているようにも見えず、返答に困ってしまった。

「なのにつ！ 二十三日に来るとか、どれだけバカなサンタ？ 本当に向いてんのかな、この仕事」

その言葉を聞いて、そのまじめに眉を寄せている姿を見て、いけないと分かっているのに思わず笑ってしまった。

クスリ、と響いてしまう。彼はそれを見て眉を寄せて、“やつぱり似合わないかな？”と改めて自分の服装を見た。

バイトの人が少しサイズの違うサンタ服を着たような姿だったのを、今更思い出したらしい。

「ううん。そういうことじゃなくって、『あわてんぼうのサンタクロース』っていうクリスマスソングのフレーズが浮かんできて」

日付を間違えて来たサンタさん。あなたにぴったりの歌だと思う。

小さい頃、好きだった歌。そのサンタさんに、そっくりだと思
った。クリスマス前に来るなんて、なんておつちよこちよいなんだ
ろう。

「あー、まさに僕の状態だね、確かに」

面映そうに、彼は頬をかいだ。白い肌が少しだけ桃色に染まっ
ている。そこでようやく思い出した。

本来、一番最初に聞いておかなければいけないことを。

「でも、どうして初仕事でわたしのところへ来たの？ やっぱり間
違えた？」

彼が首を振る。少し長いらしい白い髪が揺れる。

「ほら、サンタって小さい子のところへ行くのが普通でしょ？ 何
ももう信じていなさそうなたしのところに来なくたっていいと
思ってた」

「それはね！」

彼がニコツと笑う。無邪気な笑顔に一步後ずさり、どうぞ、と手
のひらを向け続きを促す。

彼の口から一体どんな答えが出るのか、気になる。何故新人サン
タクローズの彼がわたしを選んだのか。

「お嬢さん、去年その窓から叫んだでしょ。『サンタがいるんな
ら、大学合格させるー！』って、しかも大声で。」

おじいちゃんのそりから見てて、大学合格はあげられないけど、他
のものをあげたいなあって」

につこにつこ彼は嬉しそうに顔を赤く染めながら、こちらへ向
かって語る。思い出した、いや、正しく言えば、忘れたことなどな
かった。

去年、受験生だったわたしは重苦しい『何か』に嫌気が差して、
窓を開けて叫んだのだ。

勉強しても成果は出ないし、センターは近づくだけだし、失敗は
許されないという重責にがんじがらめにされていたし。

なのに世界規模でクリスマス気分。一人だけ取り残されている気

がして、イライラしたのだ。とつても。

それで、叫んだ。逃げたしたかったのか、泣きたかったのか、部屋が冷えるのもかまわず窓を大きく広げて叫んだ。

かあつと一番恥ずかしい記憶がフラッシュバックして、頭に血が上る。

今更それを持ち出されるとは思っていなかった。（近所中の人を窓を開けてこちらを見た姿は、まだ記憶に新しい）

というか、クリスマスが近づくにつれ、色んな人に言われていた。恥ずかしい、恥ずかしい思い出。忘れたくて、忘れられない思い出。

「本当にこの子、頑張ってるんだなあって思ったら、今年のクリスマスが待ち遠しくて、待ち遠しくて」

「なっ。見てたの?! あのもうどうにでもなれー、って叫んでたわたしを？」

しかもおじいちゃんのそりって、おじいさん（本物）も見てたってことか。あの醜態を。

「うん。それで今年、お嬢さんにプレゼントを渡そうと思ったんだ」
ハイ、これ。

白い大きな袋から少し大きめの箱を一つ取り出す。

緑のチエックの箱に、赤いリボンが結ばれている。押し付けられるように渡されて、思わず受け取ってしまった。

「いいの？ もらって」

「どうぞー。あ、今ちょうど二十四日になったし、二十数時間早いけど、クリスマスプレゼントには変わらないよ、きつと。メリークリスマス！」

ずっしりと重い箱の中身は全く見当もつかない。しゅるりと音を立てて光沢のあるリボンを外し、箱を開けた。

ふわふわとした綿のようなものに埋もれていたのは一冊の本だった。曰く。

「『コレさえあれば合格できる！ 受験必須テキスト』？」

テキストだった。中を開いてみる。

一年前に勉強したような気もする公式の山、練習問題の山、山……。カラーで化学の無機、有機なんかも説明してある。

あー、うん、随分分かりやすそう。うん。去年なら喜んでいたかもしれない。

「お嬢さんにぴったりだよ」

嬉しそうな彼に、どうやらわたしは本当のことを告げねばならぬらしい。

受験したのは、去年だということ。 (確かに試験自体は今年だったが、気分的にはもう去年の話だ)

「あの、非常に言いにくいんだけど、一応合格したから、必要ないんだけど」

「……」

「……」

長い沈黙がある。彼がぼかんとしていた。そしてそれからゆっくりと瞬きをして、両手を打ち合わせる。

「あ、そっか。去年のクリスマスに合格させろってことは、こっちは今年の春には試験があったんだ」

うんうん、と納得する。

もう去年のように勉強はしたくない。一生分の勉強をした気がするから。いや、間違いないね！ 一生分。

「って、ことは。これ、お嬢さんに必要ないってこと……?!」

どよん、と落ち込む。

あ、これもしかして浪人生のふりをしてまで喜ばなきゃいけないかったかも。

一年間この日を楽しみにしていたサンタさんは、どうやら他の事は全く考えていなかったらしい。

「あわてんぼうのサンタクロースは、もう一度来るために、一度戻ります」

これも、歌どおり、なのか。

「あ、えっと。で、でも嬉しい！ ありがとう、サンタさん」

とってつけたような言葉だったのに、彼はとても嬉しそうな顔をして、再び『また来るね』と笑った。

来年は、本物のサンタさんとして出会えればいいな、と思いつつ、彼の赤いサンタ服を掴む。

「向いてると思うよ、サンタクローズ」

優しい、人の幸せを考えられる彼なら、世界中の子どもたちを幸せにできるんじゃないだろうかと、柄にもなくサンタを信じていた頃のように笑ってしまった。

「来年は、二十四日に来るよ。今度はもっと喜ばれるようなプレゼントを持って。ううん、もっと……」

彼が窓から出つつ何か言いかけた。しかし、それに気付かずに、カーテンを開けたときに見えた白い物体に目を奪われた。大きな粒の、真っ白いもの。

「雪……」

「言ったでしょ。クリスマス日和ですねって」

彼が笑っていると向こうのほうからシャンシャンシャン、と鐘の音がした。それと同時に白い軌跡を描いて何かがちらへ向かってくる。

「お休み、お嬢さん。あなたにステキなことが訪れますように」

最後に見たのは、恰幅のよい、真っ白なお髭を蓄えたおじいさんに何か言われている、サンタクローズに見えない来年本物のサンタクローズさんだった。

All My Love On Christmas!

全ての人にとってよいクリスマスでありますように。

あわてんぼうの(後書き)

毎月14日あたりに更新できればいいなあと思ってます。

『あわてんぼうのサンタクロース』のところ、少しだけ修正してみました……。うーん、どうやって直せばいいのか、謎。

友子ヨコに をこめて(前書き)

一気に更新中！。

友チヨコに をこめて

頭の中で巡るメロディーは、季節外れだけどクリスマスソング。彼のことを歌っているのかと思うほど、そっくりな歌詞に笑いをかみ殺してしまう。

「今二月よ？ 今更、何歌ってるの」

鼻歌のつもりが、いつの間にか口に出ていたらしい。後ろにいた母に笑われて、慌てて口を噤んだ。ついでに手も止まり、作業が中断してしまふ。

湯煎しつつ、混ぜていた卵とグラニュー糖を見つめ、またその作業を再開した。ばれてしまふのは恥ずかしいので、黙ってやることにする。

「もう大学生なんだから、お父さん以外の人に渡す機会とかないの？」

「あるよ。友チヨコ」

型に生地を流し入れ、10cmほどの高さから空気を抜くために落とす。今年はチヨコレートケーキを作る予定。

無事に焼ければそうなるであろう、茶色の生地は均一に広がっていった。

「男の子よ。男の子」

「……お母さんからしたら、『男の子』なんだね。もうすぐ成人しようかという人は」

「ちらり、と思い出したのは、白色の髪と鮮やかな蒼い瞳。そしてサイズの合わない“サンタクロース”の服を着た彼のこと。

一ヶ月ちよつと前に出会った彼の名さえ知らないと気がついたのはつい最近、もらったテキストをパラパラとめくっていたときのことだ。

残念なことをしてしまったと思う。

と、いうより自分の名も彼に知られていないのは、ちよつとシヨ

ツクだ。聞いておけばよかつたし、名前を言えばよかつたかな、とも思う。

せつかくサンタクロース（来年……いや、今年から本物）に出会うという珍体験をしたわけであるし。

でも『サンタクロースが本名だよ』とか言われたらどうしよう。ありえそうで怖い。というか、サンタクロースに本名なんてあつていいのだろうか。

この前何気なく調べた『サンタクロース協会』というものに彼は関係あるのだろうか。……たぶん、ないんだろうと思う。色んな規定があつて、そのほとんどを満たせてなかつた気がする。

公認サンタクロースの方ではないらしい。もしかしたら、本物なのかもしれないなとちらりと思ったのもここだけの秘密だ。

そんなこと、この年になつて誰にもいえない。

予熱しておいたオーブンを開けて、ケーキ生地を入れる。

年に一回しか来ないサンタクロースに、バレンタインのチョコレートは不要だろう。それは十分分かつているのに。

「お母さん。卵、あと三つ出して。あ、あとバターも残つてたでしょ？ ココアパウダーは？」

「え？ どうして？」

今年は一割だけでいいよ、と前もつて言っていたので、母は怪訝そうな顔をした。その怪訝そうな顔から逃げるために、オーブンを覗き込んだ。

まだ全く膨らまない、茶色の液体を見つめ、言い訳するように口を開いた。

「もう一個作るの。友チヨコ、あげる人増えたのを急に思い出した」
作るだけなら、いいだろうと思う。

『念のため』だ。新米サンタさんがまた間違えるかもしれない。いざとなれば、わたしが食べてしまえばいいのだから。

二月十三日の深夜、やはり来ない人を思ってたため息をついた。期待していないつもりだったのに、がっかりしている自分がいて驚いた。

「来るわけないのにね」

それに恋、とかしてるわけではないし。サンタさんが“元”子供として好きただけだし。

と、なんだか自分にぶつぶつ言い訳しているときだった。

「今つ、今何時っ?!」

ガラリ、窓を開ける音がして、赤いマフラーを首に巻いた彼が、いや彼と思われる人物がこちらへ聞いてくる。

「二月十三日の、午後十一時五十分、だけど」

「間に合ったあ」

赤いマフラーの人物がため息をつく。

そこで小さな沈黙が訪れた。この気まずいものに耐えられなくなつたわたしは、やっと勇気を出して、『彼』に問いかける。

当然のように窓から入ってくる、彼に。

「サンタ、さんだよな?」

「え〜。忘れたの?」

「いや、そうじゃなくって、髪が……。髪が、金髪だから」

前会ったときは真っ白だった髪が、今は柔らかく照明を反射し金色に瞬いている。

それに服装も黒いコート（に、赤いマフラーって）なので、クリスマスときとイメージが違う。やっぱり私服になると、若さが目立つな。

余計、サンタクロスに見えない。普通の若い外人さん、って感じ。

「ああ。染めてるんだ。クリスマス時期は。サンタさんって白い

髪でしょ？ おじいちゃんくらいになると、染めなくてもいいんだけどねえ」

「あ、そう」

あっけにとられて、とりあえずそれだけ答える。染めてるんだ。髪の手。

「それと、ハイ、これ。ハッピーバレンタイン」

そう言って差し出された、赤い生地には黒いリボンがかけられた箱を手に取る。ずっしりとはしなくて小さく安心するが、首をかしげた。

これは、何？

「えっと、何、コレ」

「何って、チョコレート」

開けてみて、と促されたので開けると、中身は本当にチョコレートだった。これは世に言う逆チョコだろうか。

意図が分からず、ニコニコ笑っている彼を見つめる。

これは『何』のチョコレートと受け取ればいいのだろうか。義理チョコにしても、“義理”をもらうほど親しいわけではないと思うのだが。

愛情が籠るものでは明らかにないと思うし。

「日本では十二月十四日の朝、女性の枕元にはチョコレー」

「違うよ、それ」

またやってしまった。

去年もこれで彼を落ち込ませてしまったのだ。『もう受験生ではない』という一言で。

今も彼はびっくりした顔をして、こちらを見つめていた。いや、でも間違った日本の知識を正すのは悪くないはずだ。むしろ正しいはず。

「え、いや、大切な女性に日頃の感謝と愛情を込めて、サンタクロースに扮した男性が彼女たちの枕元にチョコレートをおく、というのが日本流のバレンタインデーでしょ？」

「いやいや、女性が……最近はそうでもないけど、まあ、主に女性が好きな人とかお世話になってる人とか、あと友達とかにチョコレートを贈るのが、日本のバレンタインですよ??」

「……………」
二人の間に思い沈黙が続く。たっぷり十秒ほど経ってから、彼はそつと確認してきた。

「じゃあ、バレンタインデーにサンタクロースが来るというのはウソ?」

「嘘」

「おじいちゃんが、昨日僕に言ったことは」

「嘘、だろうね」

「……………そうか、嘘か」

元祖(?)サンタクロースさん。孫で遊ぶのはやめてください。今、彼がすつごく可哀想です。

おじいさんの話を信じて疑わなかった彼が不憫です。

「『本物のサンタクロースになったのだから、今年のバレンタインデーの仕事はお前にもやらせてやろう。』

だが、まだ修行していないから、全部任すことはできない』とか大真面目に言つてたくせにっ」

「えつと、修行云々はわかんないけど、おちゃめな元サンタクロースさん、だね」

多分、孫をだまして楽しんでるんだろうなあ、と考える。

優しそうなイメージのサンタさんだが、実は孫で(決して、孫『と』ではない)遊ぶのが好きなお人らしい。

かなり面白い性格をしているに違いない、と彼に言わずにそつと思つた。

「『一番初めは、去年お世話になったお嬢さんだろうな』っていわれて、喜んでチョコレート作ったのにつ!!」

彼が赤いエプロンをつけて、楽しそうにチョコレートをテンパリングしている姿が簡単に想像できる。

どうしてか、彼がそんなことをしていても、一切の違和感は湧き上がらない。すごく自然に受け入れられそうだった。

「お世話なんて、してないけど、いただきます」

気まづくなっただので、一つをつまんで口に入れる。口の中で転がせば、甘いチョコレートが溶けて頬が緩んだ。

美味しいものは幸せの素だ。きっと。

「おいしい」

チョコレート、といえば。あれ、わたし、何か忘れてる……??

「あぁっ!」

「何?!」

彼がびくつと肩をそびやかす。美味しくなかった? と目で問われているのに、その返事さえできない。大切なことを、忘れていた。

「ちよつと、待ってて。すぐだから」

扉を開けつつ、彼に言いおいてから少し迷った。

さて、どういう名目で渡そうか。義理というほど互いを知っているわけでもないし(名前も知らない)、本命ではないと言い切れる自信もある。

だって去年の十二月(しかも末)に出会ったばかりなのだから。

「名前教えてもらうためのエサ、とか?」

自分の考えに笑いつつ、華やかにラッピングされた箱を一つ手に取る。

赤い箱はたった一つだけ。そして何も書いていないメッセージカードも一枚だけ。

それを手に取り、ペンを走らせた。

『What's your name?』

たったこれだけ。だけど今、わたしにとっても必要なこと。

新米サンタさん、友人としての一步、始めませんか?

それがバレンタインデーのプレゼントでいいですよ。そんなこと、

言えないけれど。

友子ヨコに、何を込めれば彼から名前を聞き出せるんだろう。

友子ヨコに をこめて（後書き）

紳士……紳士です。きっと。

な、直してみました！。微妙ですね。難しい。

白い贈り物（前書き）

それはマシュマロだったり、色々。ホワイトデーのお話です。

白い贈り物

皆さん、サンタクロースの起源をご存知だろうか。

わたしはあやふやにしか知らなかったのだが、どうやら長い歴史があるらしい。そんなことを考えつつ、店で一人、マシユマロと睨めっこしていた。

ニコラス・ハステイ

それが彼の名前だった。

『ニコって呼んで』

と無邪気な声で言われてしまつて以来、わたしは彼のことを『サ
ンタさん』ではなく、『ニコ』と呼ぶ。

ペットの名前みたいだと思つたのは、ちよつとした秘密である。

可愛らしい愛称だな、と思つたままで。

「この前貰つちやつたし、というかあつちの人はマシユマロって食
べるの？」

マシユマロって外国由来だっけ？ と考えつつ、目の前にある真
っ白いお菓子を見つめる。ふわふわとした食感といい、甘めの味と
いい、あんまり男の人は好きじゃないのかもしれない。

そうそう、余談であるが、彼は『ホワイトデー』の存在をきちん
と知っていた。

バレンタインデーに対して、間違つた知識を入れていた彼なので、
当然知らないと思つていただけ、一ヶ月前の帰り際につこり
と笑われた。

「次は、一カ月後だね？」

おやすみ、そう言つて彼は出て行つた。まるで初めから彼がいな
かつたように、するりと消えて部屋に一人残された。

さっきのことが現実ではないのかもしれない、と思つ反面一つだ
け間の空いたチョコレートが目に入る。

口に入れたチョコレート甘さを思い出し、もう一個つまんだ。

やっぱり甘くて、これは現実なんだと思り返す。

「一カ月後って、今日、だよなえ」

チョコレートケーキはあげたが、こちらも貰ってしまったし。もしも彼がホワイトデーをきちんと認識しているとしたら、お返しは用意しておくべきだろうと思う。

「ニコって、何が好きなんだろう」

サンタさんの好きなものって何だろう。某有名百科事典のサイトに行ったり、サンタの公式ページに行ったりしたが、いまいち確信がもてない。

クッキーが好きという説もあるが……彼は若いし、サンタっぽくないので信用できない。

「調べれば調べるだけドツボに嵌ってる感じ」

ふわり、と息を吐いて、とりあえずクッキーとマシユマロを買う。気恥ずかしい気もするが、ラッピングもしてもらった。

後から考えれば、手作りというのは恥ずかしい。来ると知っていたら買ったのに、と今更思う。

大体、とつらつら文句が溢れてくる。

本当にどうやって来てるの、とか。不法侵入しすぎだろ、とか。こんなに日本の一女子大生に会いに来ていいの、他に仕事ないの、普段どうしてるの、とかとか。

思いつく限りを並べてみてきりがない。

聞いてみたい気もするが、それをしてしまえば何だか気まずくなる気がして、結局一ヶ月前も聞けないままだった。

「本当にフィンランド出身なんだろうか。と、というか何で日本語しゃべれるんだろ」

ブツブツ言いつつ、店から出る。まだ寒くて、コートの前をかき合せた。足早に人ごみを抜け、目指すは暖かい我が家。横目でちらりと見えた花屋に目を留めるも、また歩き出す。

欧州では、バレンタインデーに男性は花束を女性にプレゼントするという。……日本とは正反対の行事だな、と思った。

メッセージカードを送ったり、と日本のものよりロマンチックだな、とか思ったりもしてしまう。

まあ、かと言ってプレゼントされてもどう反応を帰していいか分からないので、貰っても駄目だと思っただけ。そんなことを思いつつ、カバンから鍵を出して玄関の鍵穴に差し込んだ。

「ただいまーって」

玄関に入っただけで気が付くのは、見慣れない靴が一足。男性モノだと思う。父親がこんなスニーカーっぽいもの履くわけもないし、第一うちにはそんなものを履く人間はいない。しかも若い人が履きそう。

ボーイッシュな女性、とか？ 母親の友人か？

そんなところかもしれないけどどうなんだろう、と訳の分からないことを考えつつ、靴を脱いでリビングへ行っただ。マフラーとコートを外しつつ、扉を開く。

「お母さん、お客さ……」

ぴたり、と言葉が止まる。一瞬止まって、一度扉を閉めた。今なんか、見てはいけないものを見た気がする。あれは、今いちゃいけない人だ。明らかに。今日の晩来るんじゃないかなかったの、何なの。

「コトハ、お帰りー」

「あら、ことちゃん、お帰り」

ふらりと眩暈がする。何があったの、この空間に。

「ただいま、お母さん。ニコ」

ため息を吐きつつ、イスにコートとマフラーをかける。それから手を洗いに洗面所に行って、自分の顔を確かめてみた。ああ、かなり疲れた顔をしている。予想外過ぎることが起きたせいだ。

「えっと、リビングのドア開けたらニコがいて、お帰りって言うて……言ってる？」

どうしてお前がそこにいるんだっ。

そんなつつこみさえ出てこずここへ逃げ込んだわけだが、あの母とのほんわかした空気はなんだったんだろう。あの二人、初対面

だよな？ え、会ったことあるのかな。

でも初対面である空気って出せるのか？ すごく意気投合というか、馴染んでいたというか。ニコにいたっては、我が物顔でイスに座ってたよね。

「夢？ まさかの夢オチ？ サンタさんのくだり辺りから、全部夢なんじゃ」

グルグルと考えていると、洗面所のドアががちりと開く。そこから覗くのは紛れもない、淡い色の髪色を持つ彼で。

「コトハ？ 大丈夫？」

「ん？ 大丈夫、だよ」

わたしは、彼が何歳かも知らない。どこ出身で、どうしてサンタさんなんかを名乗っているのか。普段どうしているのか、どうして日本語をしゃべれるのか、何も知らない。

「気分悪い？」

「ううん、そうじゃなくって、びっくりしちゃって。いきなりニコがいるから」

誤魔化しつつも、そう言って洗面所から出る。そのまま自分の部屋に行ってしまったかったが、まさかそのまま行くわけにも行かず一度リビングに戻ることにする。ニコは何も言わずについて来た。

「ああ、だって帰り際に『たまには玄関から』って言ったでしょ？ だから」

今回は玄関からにしました、と笑いつつ彼はリビングの扉を開けてくれる。あ、こういうところは紳士っぽい。

「まさか夜中にチャイム鳴らすわけにも行かないでしょ？ 煙突ないしね」

指の先で淡い色の髪の毛を弄りつつ、彼ははにかむようにしてこちらを見る。リビングに入ると、にやにやと気持ち悪い笑顔をしている母親とばったり出くわした。

「ことちゃん、ちょっといい？」

「何かあった？」

平静を装ってみるものの、まるでそれ効果がない。気持ちの悪い笑顔を浮かべている母親はそれを分かっているのだろう。その笑顔を崩すことなくわたしの方へとにじり寄ってきた。

「これからお買い物してくるから、お留守番よろしくね」

ああ、あとね。お母さん、国際結婚は賛成派だから。

それだけ言い残して、母親は颯爽と出て行った。こちらが反論する余地もなく、暇も与えてはくれない。

ただただ、わたしは呆然と見送るしかなく、正気に戻ったのは玄関の鍵が重い音をたてて閉まったときだった。

「コトハ？」

「うん、じゃあ、部屋に行こうか。えっと」

部屋に行こう、とか言っちゃっていいの？ いや、それと言うのも、部屋というものは完全にわたしのテリトリーであって、安心するのだ。リビングだとどうにも分が悪い気がしていけない。

「どっちでもいいよ、コトハがいい方で」

こういう聞き方はずるいよな、と思いつつ、彼のカップの中にある紅茶を見つめた。それからそういえば、と思いつく。最初に渡しておけば、後々タイムイングで困ることもないだろう。

「ニコ。はい、これ、ホワイトデー」

「わあー、ありがとう」

嬉しそうな顔で受け取って、笑顔だけで開けてもいいかという確認をしてくる。どうぞ、と呟くと、その手は器用にラッピングを外していった。

破ることなく、きちんと開けてくれる。それは何だか少し気恥ずかしいと思うが、心地いい。

「あ、マシユマロとクッキーだ。大好きなんだあ」

「そう、よかった」

とりあえず、お菓子のチョイスは間違っていなかったらしい。ほっとすると同時に、他のお菓子でもよかったのかもしれない、なんて思い始める。どうなんだろう、聞いてもいいものだろうか。

「ねえ、さつきから大丈夫？ 眉、寄ってるけど」

自覚がないことを指摘されて、慌てて手で眉間を覆う。顔が赤くなって、思わず視線をずらした。恥ずかしすぎる。こんな姿見られるなんて。

まして、彼のことを思つて表情を変えていたなんて。

「え、あ。ほら、部屋、先行つて？ 紅茶淹れ直すから」

彼の背に手を当てて、ほぼ強制的にリビングから出す。そして階段上つてすぐの部屋だから、と言い置いて、電気ケトルのスイッチを入れた。すぐに温かくなるからお気に入りのものだ。

「落ち着け。落ち着いていられないけど、とりあえず落ち着かなきゃ」

息を吸つて、吐いて。それからいつもどおり紅茶を淹れて、自分の部屋に戻る。いつもと違うのはカップの数だけ。後は何の変化もない。そう自分に言い聞かせつつ、自分の部屋へ向かった。

さて、部屋の目の前にいるのはいい。が、どうやって扉を開けようか。残念ながら、両手はカップ二つで塞がれている。

ああ、お盆で持つて来ればよかったな、なんて思うのは今更で、声をかけようか一瞬躊躇した。

「二、二コー？ 開けてくれる？」

返事が来る前に扉が開いて、中から手が出てくる。あつという間に二つともカップを取られて、それから目の前に笑顔の彼が映る。

はにかむような笑顔は、去年のクリスマススイブから変わらず、気が付けばもう二ヶ月半の付き合いだ。

まあ、会ったのはこれで三回目だけだ。

「あ、りがと」

「どういたしまして」

柔らかい笑顔は少し気まずい。だけどほっとするのもまた事実で、変な感覚だ。するりと部屋に入って息を吐いた。

それでも緊張は解けてくれず、ただ呆然と彼を見つめる。落ち着かない、どうしてだろう。

「コトハ。はい、ホワイトデー。チョコケーキ、とっても美味しかったよ。ありがとう」

目の前に出されたのは、真っ白いバラの花束。

「えっと、え??」

「ホワイトデーのお返し。色々考えたんだけど、ね?」

ほら、花束の方がいいかなって。お菓子の方がいいのかもしれないけど。

「やっぱり、女性には花束かな、なんて。バラは、好き?」

「好きって、貰ったことないから分かんない……」

よくよく見ると、真っ白だと思っていたバラはわずかに桃色を帯びていて、その間にはカスミソウも入れられている。

小ぶりな花はまだ固いつぼみがほとんどだ。その中にいくつか咲いているものもある。恐る恐る手を伸ばして、ゆっくりと受け取った。

「ニコ、ごめん。なんて反応したらいいか分からない。でも、すごく綺麗」

自分が、花束を貰う人間ではないと分かっているから。しかも白いバラ。不似合いですぎてどんな言葉を返しても不恰好のように思われた。こんな花束、生まれて初めて受け取ったし。

「うん、その顔だけで十分」

どうやって持っていていいかも分からない。力を入れすぎたら潰れてしまうような気がして、そっと腕の中に囲う。

今自分がどんな表情をしているか分からず、そっと彼の顔をうかがった。そんなわたしとは違い、彼は嬉しそうだ。

「悩んだ甲斐があった。もし嫌いだったら、とか思ってた」

引かれちゃうかなあーとか思ったけどね。

にこにここと、それはそれは嬉しそうに語る彼に、やっとのことで笑い返す。うまく、笑えているんだろうか。

「すごく、嬉しい。ありがとう。こんな花束、勿体無いけど」

こんな花束を飾れる花瓶があったらどうか。半分はドライフラワー

ーにして、半分は押し花に出来ないだろうか。

こんなに綺麗なもの、ただ飾って捨てるなんて勿体無い。せつかく貰ったんだから、大切にしたい。

次々とやるべきことが見えてきて、それを頭の中で順序だてていく。こういうことが得意な方ではないが、調べてやってみるのもいいだろう。とても、大切にしたいから。

「ニコ、押し花とかにできると思う?」

「え、ああ、バラを? うん、できると思う。ドライフラワーなんかにしてもいいかもね」

何でもないように賛成してくれる彼に笑い返して、じゃあそうする、と返事をした。彼に同意してもらえると、何だか元気が出てくるから不思議だ。サンタさんだからだろうか。

「ニコ、ありがとう」

「さつきからお礼ばかりだね。こちらこそ、美味しいマシュマロとクッキーをありがとう」

特にクッキーは大好物なんだ、と先ほど渡したばかりのクッキーを口に入れる。ああ、そうなんだ、やっぱり、と納得したように頷くわたしへ、彼は笑いかけて口の中にクッキーを入れてくる。

「ニコっ!」

「でも手作りの方が好きだったなあ。前のチョコレートケーキも美味しかったし。どうして?」

どうしてって、だって。言い訳混じりにごによごによと理由にもならない言葉を述べる。恥ずかしい、とか上手じゃないから、とか。そうやって真正面から褒められるのは苦手なのだ。

「えー、僕はあのチョコレートケーキ大好きだったよ。独り占めして食べたし」

今回もちよつと期待してたのに、と少しだけ拗ねたように言う。

……そういうことを言われると、作ってあげたくなってしまっじやないか。サンタさんめ。そうやって、元子供を喜ばせることが上手なんだから。

「今度……」

「うん？」

「今度、クッキー焼くから、えっと食べに来る？」

「え?! 本当に? 来る来る。あ、でもやっぱり窓から入っちゃ駄目かな？」

何で? と首を傾げると、彼は恥ずかしそうに一度目を伏せて、それからこちらを見た。澄んだ、蒼い瞳とかち合って息を止めた。前にも思った。空の色でも、海の色でもない、ただただ息を呑む鮮やかな色。

「だって、やっぱりコト八に一番に会いたいからね。それに、二人っきりの方が楽しいし」

もう帰るよ、クッキーね、期待してるから。バイバイ。

すくつと立ち上がってわたしの手からバラを取り上げる。ノロノロと働かない頭と同じような動作で立ち上がって、彼を見送ろうとする。何か、言わなくてはいけない気がするのに。

「ニコ、あのね」

「ん? あ、鍵、ちゃんとかけるんだよ? それからバラの花束、喜んでくれて本当に嬉しかった」

一カ月後に会おうね、と小首を傾げてくる彼に頷いて、やっとのことで『分かった』と相槌を打つ。やっぱり頭は働かなくて、玄関で彼の後姿を見た。

「あ、これだけ」

次も会えるおまじない。

そう言っつて、今年の冬にデビューするであろう新人サンタさんは、わたしの頬に一度だけキスをした。

白い贈り物（後書き）

甘いお話が最近少ないので、ちょっと甘めで。押せ押せのサンタさんでした。

うーん、次は4月14日ですよね、ブラックデーにするか、オレンジデーにするか迷う。

ビター＝甘い？（前書き）

ビターオレンジの話題。オレンジデーとか素敵。

ビター＝甘い？

一ヶ月に一度の逢瀬。初めは二十四日（二十三日か）、そして二月からは十四日に。

これで四回目の逢瀬だった。『逢瀬』というと、何だか艶めいた雰囲気を感じてしまうが、何てことはなく、ただ会っているだけだった。

そう、先月までは。

「拳動不審よ？」

「そう、かな？」

クツキーを焼いているオーブンの中を覗きつつ、そわそわと時計を見やる。

まだ午後四時。母に訝しげに問われるが、何食わぬ顔をして片づけをはじめた。今日は、夜に来るんだよね。うん。

「ニコくん、次はいつ来るの？」

「さあ。彼も忙しい人だから」

よく知りもしないが、取り合えずそんな風に嘯してみた。

それからそつと、彼の唇が触れた右頬に触れる。とたん、体中の血が一気に巡る速さを変え、熱くなる。何でこんなことを思い出したのか。

しかも、それはおまじないであって、他に他意はないはずである。そうに決まってる。

日本人はそんなことしないから、動転しているんだ。彼に他意はない、挨拶程度のものなんだろう。

でも、何で帰り際にキス……。

あの後どれだけ呆然としていたんだろう。気付けば母が帰ってきて、『あら、ニコくん帰ったのー？』なんて無邪気に問いかけてきた。

それを思い出して、床を転げまわりたくなってしまふ。彼の訪れ

が楽しみであるような、ないような、そんな感覚だった。

少しだけ、怖かったのかもしれない。今まで考えないようになってきたものと、向き合わなければいけない気がして。

コンコン、と小さな音が響く。鍵をかけていないので、さっと窓を開けると、そこには淡い髪色の彼がいた。

「こんばんは、コトハ」

「こんばんは、ニコ。どーぞ」

すつと体をよける。今気付いたが、一回の屋根に靴を置いてたんだ。そっか、土足じゃ駄目だもんね。

「こっちは温かいねー」

こっち、ということとは彼はやはりどこか別のところから来ているらしい。

はつきり聞くのは戸惑われて、しばらく黙ってしまふ。小さい頃、サンタさんの正体を知りたくて、母親に色々聞いたことを思い出す。そのとき言われたのだ。

『サンタさんはね、子供に姿見られちゃうと、もう来てくれなくなるのよ。だからね、サンタさんのことをあまり聞いていると、サンタさん嫌がって来なくなっちゃうかも』

聞いちゃ、駄目な気がする。もう、来てくれなくなるかもしれない。

それは何だか、嫌だった。

「コトハ？」

「ん？ あ、クッキーね、作ったんだ」

ラッピングされた袋を一つ。それから、一緒に食べようとお皿に盛ったクッキーの山。それを見ると、彼は嬉しそうに笑った。

その顔は、やっぱりまだ若くって、とてもサンタさんには見えな
い。

「わあ。好きなんだー、クッキー」

「サンタさんは好きだって、書いてあったよ」

くるつと彼がクッキーの山からこちらへと視線を移す。それからまた、嬉しそうに笑ってからわたしを見つめた。

「コトハ、調べたの？」

「う、うん。調べたよ。サンタクロースの起源、とか。色々」と

嫌がられて、しまっただろうか。やっぱり、何も調べずにいた方がよかつたんだろうか。もう、来てくれなくなる？

「でっ、でもねっ」

「そっかー。コトハ、調べてくれたんだ。何か嬉しい。そうやって調べてくれるって、ちよつと照れくさいけど」

慌てて取り繕おうとしたのに、ニコは笑ったままそう答えた。それに息を一つ吐く。そっか、嫌なわけじゃないんだ。なら少し安心した。どうして、安心したのかは少し分からないけど。

「食べていい？」

「もちろん、どーぞ」

もう温かいけど、やっぱり紅茶を淹れてきた。夜はまだ冷えるし。

「あ、そういえば、ニコにもこれ」

彼に貰ったお花は、やっぱり自分には不釣合いな気がして、気が引けた。

だけど綺麗で、どうにかして保存したくて、結局少し活けた後、半分は押し花に、半分はドライフラワーにした。

と、言っても、それをするにあたって色々調べたのは秘密だ。

特に押し花は難しくって、頭を抱えつつの作業となった。半分に茎を切るとか、花びらを外して組み直すとか……不器用なわたしには難しすぎた。

キットに頼ったのもいい思い出。その前に一個無残にばらばらにしてしまったが。新鮮なうちに思い立ってよかつたと思う。

それから時間もかかったが、栞にしてみた。セットというのは大変便利なものだ。

差し出した栞は、白いバラが完全にではないが上手く再現されて

いるようにも思う。小さいバラだったので、少し大きめの栞で上手く入った。

「え？ あ、この前のバラ？」

「栞にしてみたの。結構大変だったんだけど、面白かったよ」

苦労はしたけど、どうしても残しておきたかったし、色んな発見ができたから苦ではなかった。

「ドライフラワーもね、どうしたらいいか分かんなかったから、いくつか方法を試したの」

自然乾燥を少し、シリカゲルでの乾燥を少し。楽しかったし、部屋にバラがあると言うのは新鮮だった。(ただし逆さまに吊ってたんだけど) 見るたびにニコを思い出して、嬉しかった。

そんなことを言っていると、いきなりぎゅっと抱きしめられる。

「ニコっ？」

「あー、もー。コトハはあ」

ほんの少しだけ、呆れたような声。それなのに、声は弾んでいるんだから、器用なものだ。

「すっごく嬉しい。ありがとう」

綺麗だね、と栞の中のバラを見つつ言う。一体何があったんだろうか、というかそろそろ離してほしい。

「今日言おうかと思ってたけど、何か心の準備できなくなっちゃったから、やっぱり止めるよ。こういうのは、それ相当の準備をしなくちゃいけない気がしてきたから」

照れるように言ってから、やっと体を離す。わずかに上気した頬を覗きつつ、意味が分からず首を傾げた。どういう意味なんだろう。何を、言うつもりだったんだろうか。

「へ？」

「バラのね、というか色んな話」

色んな、話。

「ん。でも、これは渡しとくね。ハイ、プレゼントー」

手のひらに、小さなオレンジ色の容器を乗っけられた。

え？ 何、これ。ツルツルした表面に、クリームとかが入っているような印象のそれ。開けて開けて、と急かされるので、仕方なく開けてみた。

「これ、何？」

「これね、ネロリのクリーム。ビターオレンジから取れたアロマ、知らない？」

知らない。ネロリって何？？ ビターオレンジ？ それって食べれるの??

「あー、えっと。橙色って知ってるよね？ そのダイダイをね、ビターオレンジって言うの。白い花を咲かせるヤツね。で、その花から取られるアロマがネロリって言うんだって」

容器に鼻を近づけると、確かにいい匂いがする。でも、何で？

「どうして、ネロリのクリーム？」

気になって聞けば、彼はにこやかな笑顔を崩すこともなく、それもまとめて今度ね、と言った。

何だかはぐらかされた気分。それでも深く聞く気にはなれず、そつと蓋をした。何だか勿体無くて、使えないし。

「貰っていいの？ この前も貰ったばかりだし、お花」

「いいのー。僕がプレゼントしたいんだから」

だから、どうして『それ』なんだろう。だけど彼が、あまりに嬉しそうに笑うから、結局何も聞けずじまい。

しかしそれを、思ったより普通に受け入れていた。今思えば、謎だらけだった去年でさえ、ごく自然に受け入れていた。

わたしって結構、深く物事を考えないタイプの人間なのかもしれない。それってすごく、危なくない??

「次はね、そうだねえ。黄色のバラにでもしようかなあ。チューリップでもいいかなあ」

「ねえ、それって花言葉と関係がある？」

バラの話をすると言った。だから『バラ』に意味があるのかと思っただ。

「ただどよくよく考えてみれば、簡単なことでそれについて話すことは、何か言いたいことがあるからという意味で。」

「さあ、どうかなー」

「ニ」

「あ、でも調べちゃ駄目だよ。これはね、僕の口から言わなきゃ、意味がなくなるからね」

「いい子にしてたら、ちゃんと意味を教えてあげるよ。」

耳元で彼は囁く。無邪気な笑顔と、サンタさんのように暖かな言動のせいで忘れがちだが、彼は間違いなく男性であって、わたしとは確実に何かが違うのだ。

甘くて、少し低めの声にびっくりして体を離すと、不思議そうに首を傾げられた。何か悔しい。

「ニ」

「返事はデージーでいいよ」

調べちゃいけないのに、返事の用意はさせるの？

「返事って、言いたいことって、質問だったの？」

「違うけど、そんなところ」

「じゃあね、コトハ。また来月。」

「え、ちよつと」

急いで追いかけてよつとするのに、彼はもう窓から出ていた。追いつこうと、窓から身を乗り出せば、彼が近寄ってきて、また頬にキスを落とされる。

「なっ」

「おまじない。この前と一緒にじゃないよ、今回は特別なおまじない」
そうしてもう一度、今度はわたしの手を持ち上げて、掌にキスを落とす。挨拶、は、手の甲じゃないのっ!?

「じゃあねー」

何も言えず、彼が屋根から落ちるのを見た。次の瞬間にトナカイが空を走る……なんてことはなく、でも彼の気配は静かに消えて行った。遠くへ、行ってしまっ。

「二二」

静かに呼んでも返事は返ってこなくって、その場にへなへなと座り込んだ。なくなつたのは葉が一枚と、クッキー。代わりにのように置いていかれたのは、つるりとした容器と、わたしの頬の赤み。

「心臓に、悪い」

一体、何から考えればいいんだろう。花言葉でも探せばいいのか。そんなことを思いつつも、花言葉を探す気にはなれなかった。どうしてか、彼の言葉が耳に残って、わたしの行動を妨げる。どうしたらいいというんだ。

「とりあえず、寝よう」

全てを、忘れてしまえたらいい、なんて思った。目が覚めたら、また十四日の朝で、何の躊躇いもなくクッキーを焼きたい。

だけど、そうならないということは嫌と言うほど知っていた。

「ニコの馬鹿ー」

白いバラと、黄色いバラ。そしてチューリップ。……返事はデージー。頬のキスと、掌へのキス。

「一体何」

彼の伝えたいことって、一体何なのだろう。一カ月後が、すごく怖い気がした。

下に待たせてあるトナカイは、普通に人には見えない仕様。この前の帰りに、酔っ払ったおじさんと鉢合わせてえらい目に会ってしまったから。

「ごめんね、待たせて。帰ろうか」

よしよし、と一頭だけ借りてきた彼に声をかけて、ソリへと乗り込む。少々季節外れなのは、仕方がない。飛行機なんかに乗っていたら、何時間かかるだろう。それは嫌だ。

「ああー。焦っちゃったよ、どうしよう」

肩までの髪がゆらゆら揺れる、可愛い子。

一年間ずっと頭の中を占めていた、女の子。去年やっと、話す機会があった。そして祖父の言葉に騙されるように、二回目の訪問を果たした。

本当なら、それで満足するべきだったのに。無邪気に名前を聞かれたから。そして柔らかく呼ぶから。どんどん惹かれていって、気がつけば後戻りなんてできない重症に。

「おじいちゃんに、何て言おう」
好きな子ができました？

そんなのとづくにはれている。身を乗り出すようにして見た、一昨年のクリスマス。夜空に向かって叫んでいた女の子が、気になつて仕方がなかった。

その次の年、彼女に会いたいと思った。

「うわああー。もつと時間をかけて、僕のこと知ってもらって、それで好きになつてもらえたらいいなあ、とは思つたけどさー！

焦りすぎ？ 焦りすぎだよ。引かれてたらどうしよう」

ガタガタ、とソリの中で自己嫌悪に陥る。彼女のあのびっくりした顔。確かに、前のは挨拶程度だが、今回はそれも言っていられない。

『掌へのキスは懇願のキス』なんて。

「ただの変態、とか思われてたらどうする？ どうしよう……」

手の中にあるのは美味しいクッキーと、可愛い琴。どうしようもなく緩む頬にはつとして、慌てて表情を引き締める。

それから頭を抱えてソリの中で体を縮めた。怖いというよりも、どうしようもなく落ち込む。

花の意味も、全て伝えるのは難しい。きっと、調べられてしまうだろう。白いバラの意味も、黄色いバラの意味も、チューリップの意味も。

全部。全部、彼女に恋した事実が込められている。

「花言葉で告白とか、寒い？ 寒いかな、やっぱり駄目かも。あー、来月どんな顔して会えばいいの？」

花言葉に想いを託したのは、彼女が気付けばいいと思ったから。

本当は、自分の口から言いたいなんて大嘘。気付いてほしかったのだ。反対に、口で言う勇氣がないのだ。

「情けない」

口で伝えなければ意味がない。自分の声で伝えなきゃいけない言葉がある。なのに、臆病な自分はどこまでも予防線を引いて、閉じこもって、嫌な予感に震える。

「でも、会わなきゃ」

会いたいんだ。どうしても。

「だって」

だって、どんなことがあったって、どんなに嫌われたって。

「好きに、なっちゃったんだもん」

だから、諦めるなんてできないんだ。今更。

ビター＝甘い？（後書き）

初のニコ視点でしました。ニコニコしてる彼の裏が見えたと思っただけなら幸いです。

オレンジの花は、花嫁さんとかの象徴らしいですよ。髪とかに飾るんだってー。ネロリは高いアロマです……。わたしには手が出ないので、実際どんな匂いなやら。

スイートオレンジよりもちょっとフローラル系で甘い感じを想定してますけど、どうなのかは知りません。

花言葉を君に ? (前書き)

このシリーズにしては珍しく、ちょっとシリアス目。このお話だけだとそうでもないけど、?の方はシリアスです。最後は甘めに仕上げましたが。

花言葉を君に ?

白いバラを再び贈るのはどうなんだろう。同じ花ってやっぱりダメかなあ。

芸がないとか思われたらどうしよう。やっぱり別の花のほうがいいんだろうか。でもこの花だから意味があるんだし、他の花よりは同じままの方が。

「何だお前は。まだ悩んでるのか。花は日本で買ったろう?」

「その花が決まらないのっ! どうすればいい? ねえ、どうすればいいと思う??」

淡い色の髪の毛を日に透かしながら、眉を寄せた。

相手は真っ白な髪とひげを持つ、恰幅のよいおじいさん。この人こそ、去年までサンタクロースを務めていた正真正銘のサンタクロースである。

「お前……一ヶ月もあっただろうに」

「だって決まらなかったんだもん!。あれこれ迷ってたら、見れば見るだけ色々贈りたくなっちゃって」

呆れたように言う祖父を少々胡乱げに見つめ、ため息を吐いた。

日本から帰ってすぐ、悩み始めたまではよかった。早めに準備をすれば、次に行くとき少しでも落ち着いていると思っていたから。

しかし、事態はもっと深刻だった。考えても考えても、何も決まらなない。

どう伝えようか、何を説明しようか。何から言えばいいんだろう。やっぱり、花は渡した方がいいだろう。では何の花を?

そんなことばかり、考えていたら時間なんて一気に過ぎて、今日という日が来てしまった。

今日中に出発しなければ、明日までに着かない。あっちで花を買う予定だから、なるべく早く着いていたい。時差を計算したら結構ギリギリだ。

だから、本当はもう出たいんだけど。出たいんだけど、肝心なこととは何も決まってるじゃない。

「どうしようー。コト八に気持ち悪いと思われてたら」

「まあ、そしたら家に入れてもらえないだろうな」

「……やっぱり」

がくつと肩を落として、また大きくため息を吐いた。

何度考えても大切なことは何も出てこない。決心だって、本当は定まってるじゃない。

ただ好きだと思って、今まで行動してきたから。返事を望もうなんて、思わなかった。

そんなことを、望んでしてきたわけじゃなかった。好きだと知って欲しいとか、一緒にいたいとか、恋人になりたいとか。

そういうことじゃなくて、ただ好きでいるだけでよかった。そして、友達みたいに時々会えるだけで幸せだった。

だった、はずなのに。

会えば会うだけ心配が増すのだ。こんな一ヶ月に一回しか会えない自分を、本当に友達のように思っているのかどうか、とか。本当は恋人とかいるんじゃないだろうかとか。

嫌な考えばかり浮かんできて、ついでに本当に自分は人として好かれてるんだろうかとかまで浮かんでくる。

いきなりやってきた、サンタ見習い。

そんな自分を受け入れて部屋に入れてはくれたけど、実は面倒だとか思ってるんじゃないだろうか。そんな、相手の気持ちなんて分からないのに、嫌な予感だけはたくさんあつて。

「コト八に気持ち悪いとか思われてたら、立ち直れないかもしれない」

「まあ、そういう職業だからなあ」

一方のおじいさんは慣れたもので、どこからか持ち出してきたパイプを燻らせ始めた。

「サンタさんがタバコ吸うとか、信じられない」

「いや、サンタシーズンは吸わない。滅多に吸わない。ただときどき無性に欲しいときがなあ」

ふわん、ふわんと形なき白いもやが空気に浮かぶ。それは少しの間あいまいな輪郭を空間で表して、やがて溶けるように消えていく。そのさまは幻想的だが、臭いはきつい。眉を寄せれば、『分かった分かった』と苦笑いされた。

「サンタクロースは元々異端者だ。火炙りにされたことだってある。……まあ、昔の話だと言えなくもないが」

「またそうやって、その話を持ち出す」

サンタクロースと聞くと、『聖なる夜』を思い出す人が多い。

しかしその一方で、異端者であり、横領者として処罰されたこともあるのだ。宗教というものは、見方が様々な分だけそういうことが起こりやすい。

「だがたとえ、好きな人にそういう目で見られても、こちらは軽蔑できないなら仕方ない。諦めがつくまでとことんやればいい。」

……犯罪にならない程度に」

「孫を何だと思ってるの」

決めた。黄色いバラを持っていこう。あ、白いバラも持っていこうかなあ。

いや、ここはきっぱりと赤か紅のバラを贈るべきだろうか。それにカスミソウを添えて。

「黄色と白と紅、かなあ」

「配色がすごいことになってるな」

水を差されて、むっとすれば『濃い紅色でなければまだ見れる』と笑って付け足された。

「花屋さんに頼むからいいの」

「そうだな。そうしろ。まあ、花言葉で通じないこともあるだろうけど」

にやり、と笑われた瞬間、粟肌が立った。何だか嫌な予感がしてくる。

すごく、いけないものを見てしまったかのような気がして、慌てて祖父のいる部屋から出た。

「あら、ニコ。どうしたの？」

「おばあちゃん」

目の前に現れたのは、あの祖父と結婚したツワモノだ。

何がよかったのか、未だかつて聞いたこともないが、案外あの祖父よりすごいのもかもしれないと常々思っていた。

「あの、さ。好きな人に、嫌われちゃったらどうする？」

「えっと、おじいちゃんにってこと？ うーん、そうねえ。日本に帰っちゃうかもしれないわね」

この人、実は日本人です。だから、自分自身はクォーター。

日本語が出来るのもそのせいで、初めての仕事を日本を選んだのもそのせい。祖母から語られる日本はとても、優しい気がした。

美しいというよりも儂くて、自分自身の目で見なければいけないようなそんな気さえしていた。

それと同時に、昔の写真を見て、その頃はまだ黒かったらしい髪の毛に惹かれた。漆黒の、夜の闇のような色。

何もかも覆い隠して、包み込んで、自分になりものに惹かれていくだけかもしれないなんて、考えたこともなかった。

ただ、憧れていた。綺麗だと思った。だけど好きな人のものだと触りたいと思った。

「帰っちゃうの？ だから、そのっ。何とか、嫌われる前に戻りたいとか、好きになって欲しいとか。いや、好きとまではいなくてもさ、友達みたいな好き、に戻って欲しいとか」

完全に悩みはバレバレで、だけどそれを誤魔化す余裕さえなかった。

知りたかったのだ。祖父の愛したこの人は、祖父を愛したこの人は、一体どうするのか。

「なあに、ニコ。ニコだったら、そうするの？」

「うっ。それができるかどうか分からないから、おばあちゃんに聞

いているのに」

その昔、この人は日本で祖父と出会ったらしい。

出会ったらしい、というのはこの人ばかりが話して祖父は一切を語らないからだ。散々惚気るくせに、その出会いは頑として語らない。

その理由は推して知るべし。

祖父は何と、人様の家の前でパイプを燻らせていたらしい。しかも真っ赤なサンタクロースの服を着て。プレゼントの包みを持って……で、十歳前の子供（そのとき、祖父はすでに二十を越えていたはずだ）に見つかったのだ。何とも情けない話ではあるが。

「何て言うか、今更ながら犯罪くさいと思うよ。僕とコトハの年が近くってよかった。十歳以上の歳の差って、なかなかだよな？」

「あら、でもニコだって見かけによらず、二十歳超えてるのに？」

見かけによらず、とは失礼な。立派に成人を済ませた大人です。どこからどう見たって大人だろうさ！

「ねえ、おばあちゃん。もし、振られても、戻れると思う？ 好きだって言うて……」

応えてもらえなくても、友達としていられると思う？ 相手が、じゃない。自分が、だ。

自分が、友達として彼女のそばにいて、何もしないで、いい友人として振舞えると思う???

「それは。無理ねえ」

「無理、だよな」

無理なことくらい、分かっていた。分かっていたけど、縋りたかった。

もしかしたら、できるんじゃないかって、そう思った。思って、それを逃げ場にして、今日ここを発つはずだった。大丈夫、何も起きない。

失敗したって、友達に戻ればいいだけだ。そう、自分に言い聞かせれば何とかなる気がした。なのに。

「もう、行きたくないなあ」

でも会いたい。

顔を見たい。

声を聞きたい。

あの頬に、触れたい。

どんどん増えていく望みは貪欲で、彼女を汚すように深く広く侵食する。自分が自分じゃないみたいな、そんな感覚は嫌過ぎる。

自分は、彼女が瞳を輝かせて呼んでくれる『サンタさん』なのに。

「ニコ。困った子ね」

「だって、怖いんだもん」

怖いんだ。とても、怖い。

嫌われる以前に、もう二度とあの笑顔が見れないんじゃないかと思うと。こちらの顔を見た瞬間、顔を強張らせてしまっんじゃないかと思うと、どんなことよりも恐ろしく思える。

「コト八を、失いたくない」

違う。コト八の、笑顔をだ。

頬にキスしたとき、そのときはただのおまじないのつもりだった。次もまた、会えますように。彼女の笑顔に、また出会えますように。そんな、願いを込めて。

だけど二度目はもう、そんな綺麗な気持ちだけではなくて。少なからず、自分を意識して欲しいという思いも入っていた。

気付いて欲しい、なんて。勝手過ぎる気持ち。

「じゃあ、行って来なさい。今行かなかつたら、コト八さんは悲しむわよ。……お友達として、かもしれないけど、そうじゃないかもしれない。

それは分からないけど、約束してるんでしょ？」

その言葉に背中を押されて、ぐっと唇を噛んだ。行かなきゃ後悔するのは分かりきっていた。でも、行っても後悔するかもしれないと思った。

行くのか行かないのか、それに迷ってばかりで、肝心なことに気

付いてなかった。

自分が行かなければ、コト八が傷つくのか。約束したのに、その約束を破ると。それは。それはすごく。

「いや、だなあ……」

泣き出しそうだった。足が震えそうだった。逃げ出したかった。

全てを先月に戻して、何事もなかったかのように振舞いたかった。出会わなければよかったなんて思わない。だけど、踏み込まなければよかったと思い始めていた。

「コト八が傷つくのは、すごく、ヤダ」

俯いて、ぐっと強く手を握って、弱い自分を奮い立たせる。

これは自分のためじゃないんだと言い聞かせて、やっと顔を上げることが出来た。目の前には、優しい顔をした人が笑って立っている。

「行くんでしよう?」

「行ってきますっ!」

心が決まれば、やらなければいけないこと次々に浮かんでくる。

それを頭の中で整理しながら、祖父愛用のトナカイたちから一頭を拝借した。

届けに行くのはこの想い一つ。

その想いがどうなるか、それは彼女次第だけれど、自分の仕事はそもそも届けることだから。

花言葉を君に ? (前書き)

第二弾。シリアスなのか何なのかよく分かりませんが、苦手な方注意。いや、むしろべた甘苦手な方注意。

花言葉を君に ?

寒い中一人立っていると、涙が独りでに零れてきた。

未だに少し寒い夜の風は、容赦なくその流れ出る涙を掬い取っていく。涙の流れた痕が、すっと涼しくなった。

家の前で立って、一人泣いている自分は、さぞかし滑稽なことだろう。そう思うのに、涙は止まらず、ただひたすらに一人を待っていた。淡い髪と、澄んだ瞳を持つ彼を。

優しい笑顔で、こちらを向いて、名前を呼んでくれるサンタさんを。

「にこお……」

何で泣いているのか、自分でも分からなかった。

ただ一つの嫌な予感が、胸を締め付けて、どうしようもなくなっていた。待つているのに、彼は来ない。どうして、どうしてだろう。聞いちやいけないことを聞いたから？

彼の色んなことを知りたいなんて思ったから？

また会いたいなんて、思っちゃったから？

家の前で、恥ずかしげも泣いていたわたしの前で、一陣の風が吹いた。

寒い、とは言ってももう五月。日中は少し汗ばむくらいなのに、そのとき吹いた風は真冬のように凍える寒さだった。

そして、その風が吹き止む前に、求めて止まない声が聞こえた。

「コトハ？ え、どうした」

どうしたの？ と柔らかい声が聞こえてくる前に、自分の体は勝手に動いていた。

ふわりと地面に降り立つたはずのトナカイは、空気に溶けるように見えなくなっていた。けど今はそんなこと関係なかった。

ただ彼の元に走りよって、ぎゅっと彼の服の裾を掴んだ。

抱きつくわけには、いかなかった。胸を占める予感が、無邪気に

抱きつくなんて行動を許さなかった。

「なっ、ちよつとコト八。どうしたの？　ねえ、泣いてるの？」
びっくりしたような彼の声に、ううん、と首を振る。

しかし彼はため息を吐いて、『泣いてないわけじゃないでしょ』と涙を拭ってくれる。その手が優しく、また涙が出た。

「コト八？」

「黄色のっ、バラ」

「ん？」

言いたいことはたくさんあったのに、出てくるのはそんな言葉でもそれだけじゃ伝わらないことはきちんと分かっているから、また声を詰まらせながら言葉を吐き出そうとする。

声が出ない。でも、言わなければいけないことがある。苦しくて、それでも搾り出すように声を出した。

「黄色の、バラのっ。花言葉」

「えっ、調べたのっ?!」

「友達に聞いたの。……もう、会わないってこと、だよな」

自分で言ったことなのに、手から力が抜けて、握っていたはずの彼の服の裾から手が離れる。ぱたり、と音を立ててその手がわたしの体に当たり、少しの間揺れた。

「え？　コト八？　何、が？」

焦ったような彼の声に、もう何も言えなかった。

言ってしまうえば、それが現実だと自分自身が認めているようで、すごく嫌だった。ああなんで、彼の裾を手放してしまったんだろうと、今更ながらに悔いた。

「コト八。話が見えないんだけど、えつと。話を、聞かせて？　友達、黄色のバラの花言葉を教えてくれたんだよね？　それでなんで僕が。……あ」

何かに気付いたような声、それから小さな唸り声が続く。

「ねえ、もしかして。その黄色いバラの花言葉って、『誠意がない』とか『別れよう』とかそっういう系統？」

びくつとして、彼から離れようとする。まさに凶星を突かれたからだ。

「あのっ。ニコ。わたし、何が悪かったのか分からないの。自分がニコに何か悪いことをしたのかずっと考えたんだけど、でもっ、分かんなくって」

確かに、悪いことをしたはずなのに、それさえ分からないなんて一週間以上考え続けたのに、何も出てこなかった。確たることは何も分からずに、ただ可能性だけは増えていった。

色々な可能性。でも、どれもがありえるけど、確かなことは何もなくて。

「サンタさんのこと、色々調べたから？ ニコのこと、知りたいって思っちゃっ」

言い終わる前に、少しは慣れていた距離を縮められる。

恐れるように体を引く前に、彼はぎゅっとわたしを抱きしめた。逃げようともがくことさえ出来ずに、ただされるがままになっている。

「ごめんね。コト八。ごめん。ごめんね……本当に、ごめん」

繰り返される謝罪の言葉が何を意味するのか分からずに首を傾げた。

一体、何を謝られているのか分からなかった。わたしが、悪いことをしたから黄色いバラを贈りたいって言ったんじゃないの？

「違う。そんな意味で送ったんじゃないよ。ごめんね。傷つけたね一杯、泣かせちゃったね。ごめん、コト八。」

黄色のバラを贈りたいとか、この前言ったからだよね。それが、コト八を追い詰めてたんだね」

よしよし、と頭を撫でられた。それからゆるゆるとまた抱きしめられて、頭の上で息を吐かれる。

今気付いたけど、わたしよりニコはずっと大きかったんだ。もつと小さいイメージだったのに、彼はすっぽりとわたしを覆っていた。「あのね、コト八。コト八は何も悪くないよ。なーんにも、悪くな

んかない。ね、だからまず、顔を上げて？」

優しい口調は、一ヶ月前と同様で、何も変わってなかった。

次に会うとき、一体どんな表情で見られるんだろうと不安に思っていたのに、その顔は穏やかだった。その少し苦い笑顔にやっと安心して、彼の顔を見られるようになる。

「うん。ありがとう」

顔を上げれば、ニコは笑ってお礼を言ってくれる。だけど何も分からずに、恐る恐る訊ねてみた。

「ニコ。あの、わたしは、悪くないの？」

何としてでも、その証明が欲しかった。

わたしが何か悪いことをしたから、あんなことを言われたわけじゃないと、そうニコ自身の口で言っただけで欲しかった。

「うん、むしろ悪いのは僕の方だから」

えっ、と声にならない疑問符が飛ぶ。何を言っているのかよく理解できず、ただ黙っているわけにもいかななくて首を傾げた。

彼は、何が言いたいんだろう。

「ごめんね。コトハ。悪いのは、僕だね」

違つと、言いたかった。たとえ彼がどんなことを言っても、違つと伝えたかった。ニコが、悪いわけじゃない。

誰も、何も悪くない。それで、いいんじゃないの？

「ちがっ」

「身勝手に花を贈って、誤解させて、泣かせて」

こんなことなら、想いを込めているなんて言わなければよかった。

そんなふうに、彼が言った。自嘲気味で、どこか眉を寄せて。

「素直に、言えばよかった」

ニコの目が、優しく揺らいだ。澄んだ青が細くなって、淡く輝く。暗いこの空間で、その青は予想以上に際立っていた。ぼんやりと分かっていたことが今はつきりと分かった。

友達として、近くにいて欲しかったんじゃないんだと。もっと近くで、もっと違う関係で、わたしは彼を見ていたのだと。

サンタさんだから、あんなにドキドキしたわけではない。サンタさんだから、もう会えないかもしれないと思ったとき悲しかったんじゃない。

ただただ単純に、恐ろしいと思ったのは、わたしが彼を、大切に思っていたからだ。

友人に対するもの以上の、一般的に恋愛感情というものが私の中にあるとするならば、きつとこの感情なんだろう。

この感情をこそ、恋というんだろう。

「二二」

「コト八が、好きだよ」

はつきりとした、言葉だった。

ぼかんとするわたしとは対照的に、彼はその細めた瞳をそのままに言った。隠すことも、照れることさえなく、妙にすっぱりと口にした。

「黄色のバラの意味も、白いバラの意味も、全部君が好きだって言いたかっただけなんだ。君を傷つけるつもりなんてなかったんだよ。言い訳だけど、ごめんね」

ぎゅっと抱きしめて、それからゆるゆると息を吐く。こんな彼でも、緊張しているらしい。

すごく余裕そうなのに、ぴったりとくっついた胸からドクドクと心臓が鳴る音がする。

その速さに、力強さに、言いようもない安心を得た。ああ、わたしこの人のことが好きなんだなあ、唐突に感じて、そしてそれで幸せをかみ締めた。

初めての、感情なのに、戸惑いよりも先に喜びがあった。

「初めて会ったときから、ずっとずっと、気になってたよ。一年間がすごく長かった。ずっと、会いたかった」

わたしの知らない、一年以上前の話。

だけど彼の中では鮮やかな、一昨年のクリスマスの話。

「会って、想像してたよりずっと可愛くって、好きになってって

た。頻繁に、会ってるわけじゃないのにどんどん惹かれてった。止められなくって、悩んで」

それは、わたしが知らない彼だった。

いつでも穏やかに笑っている彼からは想像できなくて、でも苦く笑っている彼を見ていたら、そんな彼もいたのかもしれないと思っ
た。

「コト八のことが、好きです。すごくすごく、好きです。臆病にな
って、君を傷つけちゃうくらい、どうしようもないくらい、好き。
どうやって伝えていいのか、どうやったら伝えられるのか、そんな
こと分らないくらい」

分らないくらい、そのくらい。

「君のことが、大好きです」

喉から出たのは、答えでも何でもなく、ただの嗚咽だった。

何故かまた涙が出てきて、声を抑えようと彼の上着に顔を埋めた。
言葉を尽くしてくれた彼に、何か言いたかったのに、何も出てこ
なかった。ただ涙が、嗚咽が、とめどなく溢れてきて、それが全て
彼に吸い込まれた。

「ニコ」

「うん？」

優しく問いかけてくれる彼に、わたしが出来ることって何だろう
か。

「もう、お花屋さんは開いてないけど、また今度、黄色いバラを贈
っていい？ わたしから、ニコにも贈って、いい？」

わたしにも、それくらいはできるだろう。せめて、彼と同じよう
に心を込めて、バラを贈ることくらい。

「うーん。残念だけどね、コト八。今日はローズデーなんだよ」

「え？」

「だからね、バラは今日貰いたかったんだよねー。いや、まさかコ
ト八からそんなこと言われるなんて思ってたから、これはも
ちろん冗談なんだけど」

そうやって、冗談めかして笑った彼が、わたしから離れて後ろから何かを取り出した。

「だから今日は僕だけね。はい、コトハ。まだギリギリ14日だから。僕の気持ちを君に」

そうやって差し出されたのは、この前くれたものよりもっと色鮮やかな花たち。どの花に、どんな言葉が隠されているのか、わたしはまだ知らない。

それでも彼がくれたなら、知りたいと思った。彼の心を余すことなく、知りたいと。

「コトハ、大好きだよ」

だからね、もしね、僕にバラをくれる気があるというなら。来月は、もうバラじゃなくていいから。

「やっぱり、デージーをちょうだい？」

甘い、甘い笑顔で言われた。

「え、デージー。え??？」

意味が分からないけれど、でも彼が欲しいと言っただから、きっと理由があるんだろう。今度調べて渡そう。

きちんと意味を知って、ちゃんとわたしの気持ちだと思って。

花言葉を、大切なあなたに。
気持ちを込めて。

花言葉を君に ? (後書き)

そんな甘々でした。花言葉については5月8日の活動報告をご覧ください。ただければと思います。

デージーが気になる方は調べてやってください。幾つかある花言葉の中で、一番それっぽいのを。

花も敵わぬ（前書き）

相変わらず甘々なので、苦手な方注意。デージの花言葉は色々あるのですが、わたしはお話に出てきたものを推しています。

素敵だと思っているのですが。

花も敵わぬ

大学というのは随分と自由なものだと思う。裏を返せば、帰属性が薄いとでもいうのだろうか。

小・中・高と自立心のカケラもなく育ってきたわたしには、少々居辛い場所だ。何せ決まった教室さえない。

いつもどこへいけばいいんだろうと考えてしまう。

授業はいいんだけど、空コマがね。二期生になってもそれは変わらず、ただふらふらと図書館や学生サロンを漂っていた。

「授業、終わった」

やっと終わっても、取っている授業が違えば教室も違う。

友人にメールを送るか迷うが、結局止めた。一緒に帰ろうというためだけのメールというのは、何だか少し幼い印象を持つてしまう。大学生なのだから、という意識は一年のときから変わっていない。むしろ少し強くなってきた。大学生なのだからこうしなきゃ。大学生だからこうあるべきだ……などなど、仕様もないと言ってしまえばそれまでだが、結構切実な悩みだった。

何より、大人っぽくいることが求められている気がして、微妙に落ち着かない。

「高校のときの気楽さはどこ行った」

一人で怪しい独り言を呟きつつ（一人で言うから独り言なのだという当然のつつこみは聞かなかったことにして）、校門に向かう。

いつも使用しているのは正門ではない方のもので、人通りが少ないのがお気に入りの理由だった。

今日は寄るところもあるし、やることもあるからなるべく急いで帰らなくては。何せ今日は十四日なのだから。

使う人もいないのときどきいらっしやる守衛さんに挨拶をし、門から出ようとした瞬間携帯が震えた。

学校に居るときは常にマナーモードなのだが、授業が終わるとバ

イブだけ入れているのだ。

と、いうのもマナーモードにしっぱなしでメールが届いても気付かず、休講の情報を何度か逃したからだ。あとで知ったときの衝撃は結構なものがある。

それ以来、こまめなメール確認と、バイブは必須だった。

どこに仕舞ったかな、とポケットや鞆を探る。やっとの思いで取り出した携帯を開けば、ここ一ヶ月で随分と見慣れた登録名が見える。

と同時にメールを開いた。緊張で震える手に、『何度目だ』とつっこむ。

「ニコ」

メールの送り主はまさしく彼。

目を走らせれば、話している言葉同様正しい日本語が並んでいる。いや、わたしよりよほど文章を練るのが上手かもしれない。少し落ち込む……。

『大学前で待つてるよ。正面の門ね。授業終わったらメールしてくれると嬉しいな』

慌てて方向転換するとともに、携帯電話の電話帳から彼の電話番号を呼び出す。

わたしからの初めての電話がこんな形でなされようとは。それでも、普通だったら迷ってしまっていたかもしれないから、こんな形であってよかったと思う。

迷う時間なんて、ないほうがいいのかもしれない。

『もしもし？ コトハ、授業終わった？』

「うん。今そっち向かってるから」

『あ。そうなん……』

声は聞こえる。聞こえる、がかるうじて聞こえる程度だ。

はつきりとは聞こえずに、ニコの電話の後ろのほうで明るい声が続く。聞こえた。おおよそ何が起こっているのか分かるような気もする。だって黄色い声がほとんどだし。

「二二」

『うん？』

「大学、入っていいからさ。目の前の大きな建物の方に歩いて来れる？」

「この大学は、図書館が一般に開放されているので『入るだけ』なら誰でもできる。」

まあ、まれに止められることもあるらしいが。留学生が少ない学校なので、彼のような容姿は目立つからどうなのか分からない。

それでもそこに彼がいれば目立つのは必須だと思っし、声もかけられるだろう。何だかそれは、少しだけ面白くないようなそうじやないような。いや、面白くないんだけど。

『えーっと、図書館のこと？』

「分かる？」

『うん。コトハの通ってる大学ってことで、この前調べたから』

にへら、と笑う彼の表情が浮かんだ。少しだけ照れたように、それでも嬉しそうに。

そんな表情を出すとき、決まって彼はこんな柔らかくて温かい声を出す。出会って半年もすれば、これくらい分かるようになっていた。

もっとも、会う数はすごく少ないんだけど。

「あ」

『見えたね』

向こうの方で彼の髪が見えた。淡い色の髪は、夕方の日の中でも十分に明るく見える。

それもそうか、暗い場所でも目立つんだから。そう思いつつ、携帯を耳に押し付けたまま彼の元へ走った。

「『いつまで耳に携帯つけてるの？』」

声が二重になって届く。目の前にいる彼の声と、電話越しの彼の声は少しだけ違って聞こえた。

目の前にいる彼にふわりと笑われて、慌てて携帯を耳から離して

切った。それを確かめて、目の前の彼も携帯電話を仕舞う。

「走ってこなくてもよかったのに」

「ううん。待たせるの、苦手だから」

彼がここに来るとは思っていなかった。手を髪に当て、意味もなく前髪をすく。

そわそわと服の裾をいじって、非常に落ち着きがなくなってきた。一体何のために来たんだろう。

「ニコ、どうして、きたの？」

「来ちゃダメだった？」

「そうじゃないけど。夜、来るのかと思ってたから」

いつものように窓から入ってくるのかと思っていた。回数が増えて、それ以外の登場の仕方何回もあったけど。

「彼氏が彼女に会いに来るのに、理由がある？」

小首を傾げられ、ぐっと黙った後に顔へ熱が集まる。

『彼氏』って、彼のことで合ってるんだろうか。実感が湧かないから、こういう言葉は素直に恥ずかしいと思う。好きなのは事実だけど。

事実なんだけど。何と言うか、彼と自分の間には何か隔たりがある気がしてならない。

恋愛感情かと聞かれればそうなのだが、何と言うか……自分の感情は幼い気がしていた。

「いらぬ、と思う」

「思うなら、そういうこと聞かない」

リュックを背負って、小さなバッグを持つての通学。それはいつもどおりの道のりなのに、彼がいるというだけで景色がいつもと違って見えた。

歩行者専用の通路に埋められた木々も、隣を走る自転車も。

いつもは煩わしいと思っていた、排気ガスを吐き出す車でさえ全てが優しく、鮮やかに映る。

そう思った瞬間、手を握られた。バッグを持っている手とは違う

手を引き寄せられて、指を絡められる。

力を入れられず、咄嗟に振り払うように手を引いた。しかし彼はそれを許してくれず、絡めた手を逆に強く握られる。

「いや？」

「いや、じゃないけど」

「けど、何？」

けど、の後ろが続かず黙り込む。

慣れていないの、と訴えれば、そうかと小さく頷かれた。

「ニコは、慣れてるの？」

「慣れては、ないけど。コト八に触りたいとは思っね」

こういうとき、彼との違いを感じる。別に自分は彼と触れ合いたいと思ったことはなかった。

ただそばに入れば幸せで、一緒に話すだけで安心できるし嬉しい。だって、彼はサンタさんなんだし。

サンタさんと手を繋ぐなんて、想像したことさえ出来なかった。

「触りたいの？」

「もちろん。大好きだから」

ずるいんだと思う。この人は間違いなくずるい。わたしがそう言われれば、黙る他ないと知っているかのようだ。

意趣返しに絡めた指に力を込めるが、それさえ彼を喜ばせるものでしかない。

「ねえ、ニコ」

「ん？」

穏やかに返事を返してくれる彼が好きです。

緩く目を細めて、その視線だけでわたしを大事にしてくれる彼が大好き。

「あの、ね。花屋さんに、寄っていいかな」

だから、わたしも彼と同じだけの『好き』を渡してあげたいと思う。

できれば、彼が喜ぶ方法で。

わたしが、精一杯頑張れる方法で。

でも、わたしにはそれがどんなことか見当もつかないから、やはり彼に助けてもらおう。

「花屋？」

「今日、夜に来ると思ってたの。だから、夕方買えばいいかなって花を、贈ろうと思ってた。先月できなかったことを、今月はやるうと。」

同じことをするのは学習能力がないことなのかもしれないし、正直彼にとって嬉しくもなんともないことなのかもしれないけど。

「あの、デージーをね。贈りたいなあって、ニコっ?!」

ふわりと体が宙に浮いた。驚いて彼を見れば、ニコニコと笑ってこちらを見ている。

何と彼はわたしを（本体＋リュック＋バッグという重荷を）軽々と抱き上げていた。その速さに目を白黒させて彼を見つめる。

「えっ。何？」

「コトハー。もう、大好き!!」

そのまま小さな子供をあやすように回される。ただでさえ目立つわたしたちは、一気に注目の的だ。

微笑ましいと見守る目が少し、公衆の面前で何をやっているんだと白い目が半分、バカップルなんて……という僻みを含んだ目が残り。

そんな視線を受けていた。

「ニコ。止めて！ 恥ずかしいから、とりあえず下ろして！」

何とか脱出を試みたものの、高さと回されている速さについていけずにぐったりとする。

しばらくすると彼も体力の限界が見えてきたらしい。小さなため息の後、静かに下ろされた。

「ねえ、コトハ」

「何」

「コトハは少し警戒した方がいい。可愛すぎて、そのうち攫われち

「やうよ」

「大丈夫だよ。そんな人いないから」

攫われるって、わたしは小学生の女の子か何かか？ しかも可愛すぎてとか。ニコ、可哀想に。目がよくないんだ。

「で、デージー買いに行くの？」

「ニコさえ、嫌でなければ」

「嫌なわけではないでしょ」

そう言ってから、ニコは少し考え込む仕草をする。あごに手を当てて、小首を傾げて。

本当にサンタさんらしくない、可愛らしい仕草だった。それから何かに気付いたように、今度はわたしの顔を覗き込む。

「あのさ、コトハ。デージーの花言葉、知ってる？」

「知ってる、よ」

オドオドとほんの少し身構えて答えた。顔にどんどんと血が集まっっていくのが分かる。

見る間に真っ赤になっているだろう自分自身の顔を思い浮かべ、少しでいいからコントロールが聞いて欲しいと願う。

「何か、聞いていい？」

「デージーの花言葉は」

あなたが欲しいといった花に込められた想いは。

「無邪気、純粹、平和、希望」

彼の顔が少しだけ、気付かない程度に沈んだ。

これは彼が欲しかった言葉じゃない。それは分かった。

「たくさんあつたけどね。わたしが一番贈りたいなって思った言葉は」

どれもあの可愛らしい花に似つかわしい、明るいイメージの言葉ばかり。だけど、本当はそれだけじゃない。

「『あなたと、同じ気持ちです』」

やっと出た言葉は、思いの外震えていて情けなかった。

それでも、その言葉が出た瞬間、彼の表情に花が咲いた。どんな

に明るい花も敵わなくらい、すごく明るくて優しい笑顔。

「コトハ」

ふわっと再び抱き上げられた。

今度はそんなに思いつきり高いわけじゃなくって、回されるわけでもない。ただ目線が彼に近くなって、彼がいつも見ているらしい視界が目に入った。

いつもより眺めのよい町並みは、彼の目に映っているというそれだけの事実で鮮やかに輝く。こんな世界を、彼はいつも見ているんだ。

こんな世界の中で、わたしを見つけたんだ。

それはとても不思議で、ありえないくらいの偶然で、とてもとても幸せなことだ。

「ありがとう」

「それ、わたしの言葉だよ」

「うん。ありがとう。ありがとう、コトハ」

彼の声が震えた。

わたしの出した言葉よりずっと震えていて、泣いているのかと思ってしまうくらいだった。何がそんなに彼の心を振るわせたのかわからなかったが、とりあえず彼の肩に手を置いた。

その肩もわずかに震えている。

「ずっとね、好きだった」

「うん」

「友達でね、いいと思ってたんだけど」

「うん」

他の返事が思い当たらず、ただただ頷くことしかできない。

「それでもやっぱり好きで、でも怖かったんだ。もし、君の顔から笑顔がなくなったらどうしようって。どうすればいいんだろうって。ずっと、悩んでた」

「ごめんね」

「ごめんね。心配かけたね。笑顔がなくなるなんてこと、あるわけ

ないのに。

「謝られることじゃないんだ」

君が、大好きだよ。

「うん。わたしも」

恥ずかしいのは事実だ。慣れないのはもつと事実。

逃げ出したくなることだってあるし、顔が赤くなるのだって止められない。正直付き合ってる実感なんて皆無に等しいし、未だに触れたいとは思わない。

それでも、彼が好きだとは思うんだ。柔らかなその髪も、澄んだ瞳も。わたしを呼ぶ声も。優しい手も。

いくら幼い感情とはいえ、拙い方法でしか伝えられないとはいえ、わたしは間違いなく、彼に恋をしていた。

笑われてしまつかもしれないけど、馬鹿にされるかもしれないけど。

彼が好きだ。

「あー。不味いな」

「え？」

「今日、何の日か知ってる？」

彼が口元を手で多い、目線を逸らしつつこちらに聞いてくる。

え、今月も何かの記念日なの？ 毎月あるものなの？ またお花関係ですか？

「デージーの日、とか」

「そっだよねー。コトハは知らないよねえ」

トンと足が地に付いた。それでも感覚としては今だ中を彷徨っているよう。

ふわふわと、まるで現実感がない。何の日か、なんてすでにどうでもよくなって、ただ彼が包んでいた我が身がすごく熱いことに気がつく。

自分の体が自分のものではないみたいで、ちょっと違和感があった。

それでもこの熱は、確かに彼からのものだと思うとどうしても『嫌だ』とはつきり確信できない。恋というものは、こんなに厄介なものなのだろうか。

「今日はね」

「うん」

ちよつと声を潜めた彼に、わたしも釣られて声を潜めて彼に近づく。

小さな声を聞き取ろうとして彼の口元に耳を寄せれば、あつという間に顎を捕まえられた。『顎を』です。何故？

「ニコ？」

「今日は、キスデーだね」

恋人が公衆の面前でキスをして許される日だよ。

そう言つて彼は、理解が追いつかないわたしの唇の端、ギリギリにキスをした。

ほんの少しずれたその感触は、わたしの思考を停止させるには十分で思わず彼を見つめたままフリーズした。

一時停止も、ここまでくれば素晴らしい出来だと思つ。時間が止まったと言つても過言ではなかった。少なくともわたしには、それくらいの衝撃だった。

「コトハー？」

彼の呼びかけにも答えることができない。

何デーだつて言つた？ ニコは今、なんて。

「あー。真つ赤でも可愛いね」

「なつ。二つ。今つ」

自分がどうやって声を出しているのかさえ不思議だ。

よくもまあ、息が止まらないものだと思う。いっそ、息が止まってもよかつたけど。止まつてしまえと思つているけど。

「分かつた？ あんまり可愛いと」

攫われちゃうよ？

そう言つて彼は、今度こそわたしの唇へ小さくキスを落として笑

った。

柔らかい、触れているのかどうかさえ不確かなその感触だったが、わたしの腰を砕けさせるには十分な威力があった。

「うわっ。コト八」

慌てて腰を救う彼だったが、わたしにしてみれば正直そんなことどうでもよかった。そんなことよりよほど大事なことが胸を占めて、何も考えられなくなる。

「大丈夫？」

「大丈夫じゃ、ない」

かろうじて答えられるけど、自分が自分じゃないみたいだ。唇が熱い。今絶対火傷してる。間違いない。そのうち腫れ上がってきそうだ。

「いや、だった？」

心配そうに聞いてくる彼を見て、首を傾げてしまふ。『嫌』だったろうか。

不快だった？　すごく嫌だった？　泣いてしまいたかった？？

「ううん」

そうじゃなかった。

「びっくりしたけど」

びっくしただけだった。

「実感湧かなくて、何かよく分からないうちに終わっちゃった」
誤魔化すように笑い返すと、ニコはそうかあと小さく笑った。その笑顔はちよつと照れくさそうで、それでもすごく嬉しそうだった。たったそれだけのことで、このキスも意味があつたんじゃないだろうかと思えるんだから、わたしも案外現金で単純なのかもしれない。

そう思って、彼に笑いかけた。

花も敵わぬ（後書き）

こんなのほんカップルがいたら可愛いだろうなあと勝手に思いを馳せてます。この人たちに、困難とか試練が降りかかるなんて想像できない。

雨が降っても（前書き）

7日に上げたかったんです。すみません。でも書き出したの7日
って言う……。せめて9日に上げたかったんですけどね！！ 10
日になってしまった。そして14日分はまだ考えてない。

雨が降っても

七夕だというのに、晴れていない。それはすごく、空しい。

家の窓から外を見て、溜息を吐いた。折角の七夕なのに、何だつてこんなに酷い雨なんだろう。ちよつと落ち込む。落ち込むにもほどがある。

「折角、織姫様と彦星様が会える日なのに、ね」
窓を開けて、そのひんやりとした風を迎え入れる。

ここ最近すっかり暑くなっていたが、雨だと気温が低くなる。むつとするような湿気もなく、実に心地よい風が辺りを包んだ。

それとともに、雨特有の匂いがして、何だか余計悲しくなった。雨がそんなに嫌いなほうではないが、今日ばかりは流石に凹んでしまった。

この雨さえなければ、二人は会えるのに。

一年に一回しか会えないならば、せめて今日は晴れて欲しかった。梅雨の時期にこんなことを思うのも、無茶なのかもしれないけれど、そう思うのは、自分が月に一度しか彼に会えないからだろうか。

彼らに同情しているのかもしれない。少なくとも自分は、一ヶ月に一度彼に会える。

メールだって、電話だってできる。

まあ、わたしからすることは少ないから、ニコがもっぱらしてきてくれるんだけど。

「会いたい、ね」

携帯に話しかけて、ちよつとだけ苦笑した。

あと一週間もすれば十四日だ。何をそんなに急いでいるのやら。声を聞きたいなら電話すればいい。何だつたら会いに行こうかと聞かれたこともあったっけ。

それは嬉しかったけど、遠慮しておいた。彼には彼の、あつちでの生活があるんだから。サンタさんの延長線上のこの場所に、日常

生活を送っている彼を引きずり込みたくはない。

「ニコ」

「どうしたの？ コト八」

試しに呼んでみて、返事がして、幻聴かと思って……。

次の瞬間に窓の方へ振り向いた。そこにいたのは、びしょぬれの彼。びっくりして、口が開いて、しばらく声さえ出なかった。

それからしばらく彼を見つめて、そしてやっと吐き出すように声を出す。

「ど、して。ここに、いるの？」

ぼたり、ぼたりと彼の淡い髪から雫が落ちる。

その雫を掬うように手を伸ばして、彼の髪に触れた。ヒンヤリと冷たい感覚がして、初めて彼の体を心配するに至る。

「コト……」

「待ってて！」

部屋に入れようと手を引っ張れば、『部屋が汚れちゃうから』と笑って辞退されてしまう。

それでも無理やり入れようともがけば、そっと手を握られて放される。

「部屋、汚れるから。ここでいいよ。すぐ帰るし」

「タオル持ってくるから。お願い、入って」

すでに彼の腕にしがみつくまでになっただけで、自分自身の服もしつとりと濡れ始めていた。

しかしそんなことはどうでもよく、彼の腕をひたすらに掴む。放してしまえばすぐさま帰ってしまうだろうと簡単に想像できた。

「ニコ、お願い。入ってて」

「でも」

「お願い」

目に力を入れて、彼の瞳を見つめる。

あまりに力がすごかったのか、彼は一度肩を揺らして靴を脱いだ。床に足を置く寸前、やはり躊躇したがわたしはその躊躇さえ許せ

なくて闇雲に彼を引っ張り込む。

彼が入ったことを確認してから窓を閉め、それから足早に部屋から出てタオルを取りに出る。

足が絡まって、階段を危なげに降りてからタオルを掴む。それから台所にいた母にホットミルクを頼んで、また階段を上った。

「ニコっ！」

「あー、ごめんね。濡らしちゃって」

タオルを手渡せば、申し訳なさそうに眉を寄せてニコは受け取る。しかし彼が拭いたのは彼自身ではなく、少ししか濡れていないはずのわたしの服や髪だった。慌てて離れば、『まだ濡れてるよ？』と笑われた。

「わたしはいいから！ ニコは自分を拭いて」

「別に平気だよ。コト八が風邪引かないか心配なだけだから」

勝手に心配させて、と彼が小さく笑った。

いつの間にかわたしも確かに濡れていて、ぽたりと髪から頬に落ちた。柔らかいタオルで水分を吸い取られると、濡れてたんだと分かった。

「でも。ニコの方が酷いけど」

「あー。急に降ってきちゃったんだよね」

「朝から降ってた！」

「えーっと、あっちは晴れてたんだよ」

苦笑つて、彼は『着替えておいで』と頭を撫でてくれる。

その手はすぐく冷たくて、思わず握り締めて抱きしめた。折角、拭いてくれたのにね。冷たい体に精一杯腕を伸ばしてしがみつく。

少しでも体温が移ればいいのに。

「コト八。本当に風邪引くから、離れて」

「いやっ」

ぎゅっと力を込めて、拒絶の意思を示す。

子供っぽいその仕草にニコは呆れたように溜息を吐いた。少しだけ自分の行動を後悔したが、止めるつもりはなかった。

「コトハ。お願い」

ニコが少し苦い口調で言っ、わたしの肩を掴む。

それからゆっくりと引き剥がされて、わたしの両腕は宙に浮かんだ。何か、悪いことをしてしまっただろうか。折角拭いてくれたのに、また濡れたから？

「拭くから、ちよつと待つてね」

「お父さんのでよかつたら、服もつて来るけど……多分、身長は変わらないし」

ただし、お父さんが着るので、あくまで『お父さん』の服です。

決して若者が着るデザインではありません。あしからず。いや、そこまでオジサンっぽくはないと思うけど。

頑張れば若い人が着ても……無理か。

「えつと、脱衣所。こつちだから。お風呂も入って」

「コトハも入るの？」

「入るわけないでしょ」

階段を下りて少し奥に入ったところ。

玄関からは分かりにくいそこに脱衣所はあつて、そこから母に向かって『お湯のスイッチ入ってるー？』と聞いた。

すると『入ってるわよ』と聞こえて、少し安心した。

「えつと」

脱衣所に入って、かごを用意する。それからお風呂に入ってシャワーの掴みを回した。

「これね、右に回すとシャワーなの。左に回すとこつちから出るから気をつけてね」

そう言いつつ、お風呂の蛇口を示した。

お湯はすぐ出るから、と言いつつ後ろを振り向けば、彼は苦勞しながら上のシャツを脱いでいた。まだわたし、ここにいるんだけどな。

ニコ、分かつてるのかな。

「濡れたやつはこれに入れといてね。洗濯しとくから。えつと、あ

るものは好きに使っていいから！ タオルここに出てるからね。こゆっくりっ」

慌てて外へでて、それからお父さんの服何かないなあ、と考える。

そのとき台所から母が出てきて、『ホットミルクはー？』と聞いてきた。あ、忘れてた。

「ニコに今、お風呂入ってもらってるから。あと、お父さんの服何かない？ ニコの服濡れちゃって」

「あらー。この雨の中来たの？ ニコ君、なかなか情熱的ねえ。泊まってもらえば？」

そしたらお父さんのパジャマ、大きいの買ってるから入るでしょう？ お洋服も乾くし。晩御飯、何か足した方がいいかしらー」

お母さん、それ問題じゃないし。

一番の問題は、チャイムが鳴ってないのに娘の彼氏がこの家の中にいることだろう？ 違うの??

この人の順応性の高さに眩量を感じつつ、溜息を吐いた。とりあえず、ホットミルクはまたあとでチンしてもらおうとして、パジャマだ、パジャマ。

「ねえ。ことちゃん」

「何？」

「下着、どうしようかしらねー」

ぶつと噴出したのはわたしで、思わず母の顔を凝視してしまった。

「えっ、ええっ」

「あら、いやね。ことちゃん考えてなかったの？ お洋服のことは考えてたのに」

「だ、だって！」

「さすがにお父さんのを貸してあげるわけにいかないでしょう？ この辺で買って来れるところってあるかしら。あ、お父さんの下着って買い足してないかしらね」

ちよっと待っててね、という母を見送り、ぐるぐる回っている頭

の中の単語たちを整理し始める。

一気にことが起こりすぎて動揺しているらしい。確かに、今日は彼が来る日ではないから当然か。

ざーっと遠くの方で水を使う音がする。

時々途切れたり、再開したり、床に水が当たって跳ねる音がしたり。何だか心臓に悪い音ばかりだった。

否応にも彼がそこにいて、シャワーを使っていると言う事実が分かった。

「暑い、熱いー」

気温が暑いのか、はたまた顔が熱いのか。

座り込んで、脱衣所の扉に頭を持たせかけ、一人で声を上げた。会いたいとは思ったけど、思ったんだけど。

確かにそれはそうだから、文句何て言える立場じゃないんだけど。

「何か恥ずかしい」

「ことちゃん、あったわよ。よかったわね。じゃ、これ。ニコくんに渡してね」

手渡されたのは、まだ袋に入っている下着一式。

え、コレをわたしにどうしろと言っんですか。そう思って母を見上げれば、母は頬に手を当てて目を細めた。

目じりにしわがよって、笑顔の形になる。

「やあね。恥ずかしがってるの？ 手渡してあげてね。さてー。お夕飯もう一品増やしますか。ニコ君、日本食大丈夫かしら。お肉とかの方がいいかしらね、若いから」

そんなことを言っつて、母は足早に去って行った。

それを見計らって、ゆっくりと立ち上がった。そしてコンコンとノックして、彼が出ていないことを確認する。

それからそつと中へ入り、お風呂場の扉をノックした。

「あの、ニコ？」

「何ー？」

籠った声が聞こえる。

「あの、ね」

下着ここにあるから、使ってねって言えと。わたしに。そんなこと、この口から出てくるとは思えないんだけど。

「大丈夫？ えっと、使い勝手とか、悪かったら言っただけ。だから、あの」

だんだんと小さくなる声、何がいたいのか分からない口調。動揺しまくって震える声。

「あの、ね。えっと……だから」

「コトハ？」

「下着つ、使っていないやつここに置いてくから。使っただけ！ パジヤマも」

ばたんと脱衣所の扉を閉めて、部屋に逃げ帰る。

手早く着替えてしまおうとシャツを脱ぎ、簡単な着替えを終えた。そんなに大層な服を着ていないし、少ししか濡れてなかったから大丈夫。

髪が少し濡れてるけど、大丈夫。うん。

震える手で着替え終わった服を下に持って行き、洗濯機の中に放り込もうとしてはたと気付く。洗濯機、脱衣所の中だ。

今ちよつと、お風呂から上がったくらいだろう。

入るわけにはいかないし、でも濡れた服を持ち続けるわけにもいかないし。そう思いつつ脱衣所の前でウロウロする。

相当の不審人物である自覚はあったが、チラチラ動く影を見て入るわけにもいかなかった。屈んだりする彼の陰を見て、そつと視線を外した。

とりあえず部屋に帰ろうとした瞬間、後ろで脱衣所の扉が開いて肩が上がった。むしろ体全体で飛び上がった。

「二、二」

「それ、洗濯するの？」

「うん」

ついでに彼のものも一緒にしてしまおうと思って、彼が持ってい

たかごに手をかける。

しかし彼は離さずに、にっこりと笑ってこちらを向いた。

「洗ってもらうのは少し気が引けるから、ビニール袋とかある？
もって帰るから。あと、パジャマありがとう」

「パジャマは、お母さんが見つつけてきてくれて。あと、洗濯はするから！　すぐ乾くよ」

無理やり彼からたかごを奪おうとする。しかし彼も手は離さず、ただいつもどおりの笑顔を向けていた。

「一緒に洗えばすぐだし」

「コトハは、嫌じゃないの？」

何が？　と首を傾げた。何が嫌なの？　あ、洗濯すること？

でも洗濯は、洗濯機がしてくれるし。ついでに乾かしてくれるし。何も面倒なことじゃないから大丈夫なんだけど。

そう思っただけを彼を見れば、顔が赤かった。

「あの、だから。洗濯物、触るの」
触るの??

「へっ、あつ。や！　あの！！　嫌とかそういうんじゃないって
言っている意味が分かって赤面した後、何とか取り繕うとするの
に言葉が出てこなくてしどろもどろになってしまう。」

「ごめんね、コトハ。折角のサマー・バレンタインだから会いに来たのに、迷惑ばかりかけて」

相手が申し訳なさそうに肩を落とすので、今度こそたかごを無理やり取り上げて、洗濯機に中のものを放り込んだ。

それから自分のシャツも入れて、洗剤箱に手を伸ばす。

……色物とか白物とか、分けた方がいいのは承知の上です。でも確かめる勇気はないんです。見たところ、真っ白なものはないのでよしとする。

「ニコ。あのね」

恥ずかしい。すごく、恥ずかしい。

お風呂上りの彼はほんのりと桃色の頬をしていて、お父さんのパ

ジヤマから伸びる手足は長い。

薄い生地のはそれは彼の体の線をはつきりと映し出していて、思わず目をそむけた。

広く開いた襟首から覗く首元は、すごく色気があって顔が赤くなる。ずっと伸びた筋とか、鎖骨とか。その辺りが彼の『男性』の印象を強くしていた。

「会いにきてくれて、すごく、嬉しかったの」

落ち込む彼を慰める言葉など、わたしは知らない。

今この色んな恥ずかしさを、彼に伝える術も持たない。

自分がどれだけ動揺しているかは、言葉の震えや顔の赤みで気付くだろう。だけど、これだけは口で伝えなくては。

「声が聞きたいと思った。話がしたいと思った。ニコの笑顔が見たいって、そう思ったよ。だから、迷惑とかじゃなくって、本当に嬉しくて……だから、謝ってほしいわけじゃないんだよ」

ありがとう、とゆっくりと言葉を出した。

聞き取って欲しくて、伝わって欲しくて、精一杯を口に出した。

拙いけれど、言っておかなければいけないと思ったんだ。

雨の中、寒い中、わたしのために来てくれたんだから。

「コトハ」

引き寄せられた胸は温かくて、ほんのりと自分が使っているのと同じものの香りがした。未だ湿った髪に手を伸ばせば、さらりとした感触がした。

「ごめん、好きすぎて我慢できなかった。十四日なんて、遠すぎる」
強めに抱きしめられた。薄い布地が少し恨めしくなる。

彼の体温がこんなに近く感じられるのは初めてで、幸せよりも動揺が先にたつ。

お湯に当たったばかりの肌は温かいというよりむしろ熱くて、不快ではないけれどドキドキする。

「一週間後に、会いに来るから」

「泊まっていく？ っってお母さんが」

「ありがたいけど、やめとくよ。服乾いたら帰る」

それまでは、傍にいさせてくれる？ 一ヶ月に一回しか会えないけど、それでもそのときは絶対会いに来るから。

「雨が降っても、雪が降っても。何が起こっても、一ヶ月に一回は絶対に会いに来るから」

そう言ったニコは、いつもの穏やかな笑みではない真剣な顔をしていた。

「それ以上離れているのは、僕が耐えられない」

そう言った彼の声は、今までのどの言葉より甘く響いた気がした。

二度目のキスは、ちょっとだけ長くて。

前のものより少しだけ、本当に少しだけ、慣れたような気がした。

雨が降っても（後書き）

ニコは紳士です。ゆえに、ときどき彼の行動は裏にどんな意味があるのか勘ぐりたくなります。こんな人ですみません……。

月の雫を指輪にして（前書き）

溶けた銀を月の雫に見立てる、昔の人の感性って素晴らしいと思います。そんな感性、わたしもほしい。

月の雫を指輪にして

「行ってくるね」

家の中に向かって声をかけると、パタパタと音がして祖母が出てきた。

その顔はどこか呆れ顔で、眉を少し寄せていた。まるで責めるようなその仕草に、『何?』と返すと溜息を吐かれる。

「ニコ、あなた風邪が治ったばかりでしょう。それなのに夜風に当たるなんて。無理して帰ってくるなら、泊めてもらえばよかったのに」

頬に手を当て、首を傾げて。

その様はどこからどう見ても心配性のおばあちゃん。しかしその笑顔を見れば、それだけじゃないことは一目瞭然だった。

むしろ、どこか楽しんでいるようだった。

「無茶言わないで。僕にどうしろっていうの? 一睡もするなって言いたいのか?」

「そんなことないけど。近くにことはちゃんがいると意識して、眠れなくなる?」

ぐっと言葉につまり、横を向いて視線をずらした。

凶星だったのだろうかと自分に問いかけてみるも、その疑問に対する明確な答えは持っていないので答えようがない。そうかもしれない、と思うだけだ。

「お風呂に入つて、すぐ帰るなんてするからよ。こっちの夜は寒いのに。湯冷めして当然。それで風邪を引くなんて」

「だって、遅くなつてもコトハは心配するし」

泊まっていけばいいのに、なんて無邪気に引き止められた。

いや、あれで結構色々気にする子だから、頭の中では様々なことを考えていたのかもしれないけれど、少なくとも自分には無邪気に誘っているように見えた。

何でもないように言って、『夕ご飯も食べる?』なんて聞いてくれて。

「本場の日本食食べるチャンスだったのに!」

「おばあちゃんが作る日本食が嫌いなのかしら?」

祖母が笑って聞いてきた。違う、が。やはり本場には勝てないと思う。そもそも材料からして違うし。

「とにかく! コト八に会いに行つて来るから!」

「はい、ニコ。どうせシルバーデーでしょ?」

言い訳のように言つて、家から飛び出そうとすれば祖母に呼び止められる。

慌てて振り返れば、小さな封筒を差し出された。何だろうか、シルバーデーなのは事実だが、封筒とは関係ない。

「シルバーデーはね。年配者がデート代を出すのよ。おじいちゃんには内緒ね? 甘やかしてつて怒られちゃうから」

茶目つ氣たつぷりにウインクなんてしてくる祖母は、その年の女性にしては随分と若く見える。

もっとも、十歳ほど離れている祖父も十分若々しいのだから、揃つて若くあろうとしているのだろう。

元気すぎて、孫をからかうのはどうかと思うが。

「え、デート代? いいのに!」

「いいの。おばあちゃんがしたいんだから。さて、シルバーアクセサリーを何にするか決めたの?」

シルバーデーは恋人同士がシルバーアクセサリーを贈り合う習慣らしい。

多分コト八は知らないんだろうな、なんて思いつつ家から出た。実はもう贈るものは決めていた。

前のようにギリギリまで悩むなんて失敗、二度と起こさないと誓つたのだ。だから用意周到に準備していた。

彼女に似合う、シルバーアクセサリーを贈ろうと。

それを贈ったとき、彼女はまだびっくりしたような顔をするんだ

ろう。それで遠慮して『貰えない』なんて言うのかもしれない。

彼女のそういうところは可愛いと思うが、好きで贈っているんだから、にっこりと笑って受け取って欲しいとも思う。

わがままなのは百も承知だ。

「もう決めてるよ」

「そう。いつてらっしゃい。今日は濡れて帰らないのよ」

その言葉に頷いて家を出た。目指す先は遠いけど前より近いと感じる国。

彼女のいる、美しい国。彼女は今日、笑ってくれるだろうか。そんなことばかり気にしながらトナカイの顔を見た。

人間には学習能力というものがある。毎回毎回十四日に何かしら理由をつけて、プレゼントを贈ってくる彼を何としてでも止めたい。申し訳なさが先に立ち、最近では喜びつつも無遠慮に受け取れないのが実情だ。

現に、固辞しては寂しそうに肩を竦められ、その顔に負けて受け取ってしまう。

だけど自分にはそれがどれだけの値段か分からない。今更だが、バラがあんなに高いと言うことも知らなかった。

今回こそは、そういうことはないようにしたい。

しかし、彼は毎回何か仕掛けてくる。それを防ぐのは難しいし、あの寂しそうな顔をされれば受けとらざるを得なくなるのは百も承知だ。

そこで考えた。

今月の十四日は何の日なのか。

初めからそうしていればいいのに、ニコのことだけで一杯一杯だったわたしはまるでそんなこと思いつかなかった。

しかし、今回は気付いた。そしてそれを実行できた。

七月十四日、それはシルバーデー。

恋人同士……が、シルバーアクセサリーを贈り合う日らしい。これならわたしも選べる気がする。何もファッションを追求したものでなくてもいいからだ。

「サンタさん、だもんね」

手の中にある、ラッピングされた袋の中にあるのは、サンタさんの意匠のキーホルダー。

可愛いデザインに一目ぼれして、その場で購入を決めた。もっといいものがあつたのかもしれないし、あのまま探していたらもしかしたらアクセサリーなんかを買う機会があつたかもしれない。

それでもいい。わたしはこのサンタさんが好きなのだ。

優しくて、子供たちのことを思って、寒い中一人で世界中を駆け回る。そんな人が好きだ。

たとえ髭がなくなつたって、たとえ恰幅がよくなかつたって、サンタさんの赤い服のサイズが違つてたつて。わたしはサンタさんが大好きです。

「貰つてばかりじゃないんだから、ニコ」

驚くだろうか。

それとも笑つてくれるだろうか。

どちらでもいいけど、できれば驚いた後に笑つて欲しい。それが一番理想だし、一番そうなりそうだった。

小さな袋は靴の中では酷く心許なく、神経質に何度も確かめてしまふ。

平日だから、帰りに買えないと踏んで土日を買つたのはよかつた。けど家においておくのも不安で、今日は持ち歩いていた。もしかしたら、彼が大学まで来るかもしれないなんて淡い望みを抱きつつ。

来られたら少し困る。

恥ずかしいし、友人に知られるのは少し気まずい。

だけど期待することも止められなくて、そうなってしまおう自分が悔しい。こんなに振り回されていることを、少しずつ少しずつ自覚させられる。

学校の帰りも、知らずに淡い色の髪の毛を捜している。

どこにいても見つけられる自信があるくせに、見落としていないかとぐるりと辺りを見回しつつ帰路を急ぐ。

もしかしたら、もう家にいるかもしれないなんて考えながら。

「せめて、連絡してくれればいいのに。いつ来るとか、どこに来るとか……」

「そんなことしたら、コト八驚いてくれないじゃない」

後ろからそんな声がすると同時に、手を回されて退路を塞がれる。呆気なく拘束されて目を見開いていると、後ろから笑い声がしてやっとその人物を知る。

後ろから女の子に抱きつくなんて、ただの変態だ　　と言い切れないのは、わたしがニコのことが好きだからか。絆されているからか。

「ニコ」

「すれ違わなくてよかった」

きゅっとお腹に回された手が強くなって、リュックが背中にのめりこむ。

何だかそれだけで体が温かくなって、怒る気も失せてしまった。

批判混じりの声を出したことを、ちよっただけ後悔する。

「家で待つてよつかと思っただけだね。早く渡したくて」

『渡したくて』か。

自分の学習能力の確かさに苦笑いしたくなる。やはり彼はそうきたらしい。しかも、もうわたしに拒否権なんて与えられていない。

受け取ることが前提になっていた。毎度繰り返す言葉を、今回もまた繰り返し返そうとすれば、意外にも呆気なく腕が離れた。

元々すぐ解放するつもりだったらしい。

「あのね、ニコ」

「うん、可愛い」

へ？ と間拔けな声が出た。平々凡々な容姿なので、特別褒められた記憶がない。

そんな容姿に対して、今更賞賛を口にする人などいるはずもないので首を傾げた。何が可愛いんだろっ。

服装？ いつもと変わりないけど。

「似合ってるよ」

チャリと音を立てて、ニコはわたしの首元を摘む。

いつの間にか何か光るものがあって、目をしばたいた。いつの間、と問う必要もないだろう。後ろから抱きついたのは、これが目的か。

「器用だね、手先」

「ほかにもっと感想ないのー？」

「ありがとう？」

「疑問系なのはどうしてかな？ すごく可愛いのに」
お礼を言いたい気持ちはとてもある。

毎回毎回申し訳ないという思いだって、もちろんある。

けどどれも口に出せば、ニコはどこか寂しそうな顔をする。お礼を言っても、謝っても、彼を笑顔にすることはできない。どうしてだろう。

「可愛い？ あ、トップが指輪なんだね」

ペンダントのトップはシルバーの指輪で、シンプルながらも可愛いらしい。

シルバークセサリーというと、少しごついイメージがあったのに、わたしが持っていててもそんなに不自然でない代物だった。

前々から思っていたことだが、さすがサンタさんというべきか、モノを選ぶセンスがいいのだ、ニコは。

多分その人に似合うものとか、その人が欲しいものとかをすぐに理解してしまうんだと思う。それは、サンタさんにとって大切な『天賦の才』ではないだろうか。

「うん、これね。指輪としても使えるから
少し、疑問に思った。」

ニコはわたしの指のサイズを知っているんだろうか。そんな表情
をしていたのだろう、ニコは笑ってわたしの頬に触れた。

その指先が、ほんの少しだけ熱い。

「サンタさんが贈り物する女の子のサーチを忘れると思う?」

「これ、サンタさんからの贈り物なんだ」

別に深い意味はなかった。

ただ彼自ら『サンタクロースである』と名乗ったのは、最初の辺
だけだった気がする。最近では滅多にそんなこと言わなかったから、
少しだけ首を傾げてしまったのだ。

しかし彼には深い意味があったらしい、珍しくうるたえて、手を
左右に振った。体全体で否定している。

「違う! これは僕が恋人としてコト八に贈りたかったの!

指輪のサイズは合ってるよ。だってコト八のお母さんに聞いたもん
いくつですか。コト八のお母さんすごく嬉しそうに教えてくれ
たよ」

指輪を外して指に通す。すつと抵抗もなく入ったそれは、薬指に
ぴつたりだった。

それがどういうことか、少し考えて首を振る。その考えは流石に
飛躍しすぎだろう。ニコはそんなことおくびにも出さない。

右手の薬指にはまったそれを見つつ、自分の考えに苦笑いしてし
まった。

何だか自分一人が浮かれているみたいで、少し馬鹿らしい。嬉し
いのに、他のことに気を取られるのはいいこととは言えない。

「ありがとう。ニコ。素敵だね」

「コト八って、ときどきちょっと残酷だよな」

ぼつりと返されて慌てて彼を見る。

彼自身も驚いているらしい。目を見開いてこちらを見ていた。

お互い驚いた顔のまま見詰め合えば、時間が止まったような錯覚

に陥る。それでも先に回復したのは彼の方で、慌てて言葉を紡いだ。
「何か言葉間違えた！ ごめん、コト八」

「いや、いいけど。日本人じゃないことは分かりきってるし」
そう自分に言い聞かせる。

『残酷』？ わたしが、ニコに対して？

行動がと言うことだろうか、少し悩んでしまった。彼が言葉の彩
だと言い張ろうと、少なくともそれに近いことを言いたかったに違
いない。

そこを否定するほど、わたしは強くなかった。何と言いたかった
のかは分からない。だけどそれがいいことが悪いことかくらいは分
かる。

「だから、そうじゃなくって。『残酷』っていう言い方はよくない
なって。えっと、コト八にもっと甘えてほしいんだってこと」

「気まずそうに、ニコは言った。」

「たとえばね、プレゼントを貰っても、最初に申し訳なさそうな顔
をするでしょ？」

お礼言っても、何か気後れしてるみたいだし。そういうのね、でき
れば止めてほしいの。わがままでから、怒ってもらっても構わない
けど、やっぱりにつこり笑ってほしいんだ。

僕が勝手にやってるだけだしね、これ」

右手にある指輪をなぞって彼が言った。

「プレゼントを褒めるくらいだったら、『嬉しい』って、顔で知ら
せて？ そうじゃないと、自分が見立てたものが『正解』かどうか
なんて、僕には分からないから」

手を握られて、それでもやっぱり申し訳なくて、どうしても笑顔
で応じることができなかった。

仕方ない。日本人なんだもん。遠慮するってお国柄でしょ。プレ
ゼントされて当たり前と言う神経を持ち合わせているわけでもない
し。

「難しい？」

わたしの顔を覗き込みながら、ニコは言う。

別段怒ってなさそうな声に少し安心して、それでも上手に笑えない自分に眉を寄せた。上手く笑って見せればいいだけのこと。

それだけのことが、自分にはどうして難しいのか。

逃げるように視線を彷徨わせ、やがて突破口を見つけた。というよりも、単に逃げ口を見つけたのだ。

鞆から小さな袋を出して彼に渡した。今度は彼が目を白黒させている。……澄んでいる瞳に、この表現が合うのか分からないけど。

「何？」

「今日はシルバーデーでしょ？」

知ってるんだよ、それくらい。調べたんだよ。

ニコが毎回何かしら贈ってくれるから。お返しがしたいなんて。

「よく知ってたね。開けていい？」

それに頷くと、彼はそつと開いてくれる。何度でも言おう、彼のこの仕草が好きだ。

袋まで大事にしてくれる、この心遣いが何よりも好き。こっちまでくすぐったくなって、首を竦めてしまうくらい。

「サンタさんと、トナカイ？」

「似てるでしょ？」

そのときばかりは、素直に笑えた。

そして、彼がわたしに笑ってほしいと言った理由も少し分かった。彼が笑顔になった瞬間、プレゼントしてよかったと思ってしまう。

そんな笑顔をされてしまえば、またしたいと思う。笑ってほしいと思う。それはごく自然なこと、特別我侭と言うわけでもなかった。

笑ってみようか、次からは。

まだ少し遠慮はするかもしれないし、上手くないかもしれないけれど。それでも、しないよりはきつといいはずだ。

ニコが喜んでくれるなら、努力だってできる。

「ああー。もうっ!」

ぎゅつと今度は前から抱きしめられる。それも結構容赦なくしつかりとだ。

ぐつと肺が押しつぶされた気がして息を吐き出せば、ニコは慌てて手を緩める。それがおかしくて、今度は声を出して笑った。

「コト八が可愛すぎるのがいけないの！　こんなの……嬉しいに決まってる」

抱きしめる力を緩めて、手を握られて、それから何でもないようにニコは歩き出す。

ちよつとデートしよう、と誘われて、少しだけ首を傾げた。もう五時過ぎてるし、ニコだって暇なわけじゃないだろうに。

「おばあちゃんから、デート資金貰ったんだよね。しかも円で。用意周到すぎて笑っちゃうよ」

「あ。先輩がデート代を出してくれる日でもあるんだよね、シルバードー」

よく調べたね、なんて褒められて嬉しくなった。

実はパソコンで結構調べた。韓国では各月の十四日に、それぞれ記念日があつて、そのどれもが恋人と過ごしたりする日なのだ。

それは日本には少し馴染みのないものばかりだけど、素敵な日ばかりだった。こんなことを、ニコは考えてくれたんだ。

「だからデート。美味しいもの食べよ。お団子食べたい」
緩く引つ張られて、仕方なしに歩調を速めた。

どことなく消極的だったわたしの歩調が早くなれば、ニコは自然と歩調を緩めて合わせてくれる。

ニコは優しい。優しいけど、ちゃんと不満に思ってることを外に出せる人でもある。それは気付かぬうちに彼を傷つけていそうなたしにしてみればありがたいこと。

「コト八、月が出てる」

知ってる？　銀と月は切っても切り離せない関係なんだって。

そうやって彼はわたしに銀と月の関係について話し出した。

スラスラ出てくる様子を見れば、彼が博識なのは十分に分かった。

急にわたしが質問しても、慌てずに答えてくれる。

「銀色は月だし、三日月は銀の象徴なんだって。ああ、あと女性の象徴でもあるね」

そんなことを聞きながらゆっくりと歩く。

ニコの口から出てくる情報は、わたしが知っているものから知らないものまで、多岐に渡っていて面白い。

知らないことが出てくるとちょっと興味がそられて、引っ付くようにしてその話を聞いた。元々神話には興味がある性質だ。

しばらくして会話が途切れれば、ニコは空を仰いだまま小さな声を吐き出した。

「クリスマスプディングに銀の指輪を入れて渡せばよかったなって、今更思うよ。でもクリスマスまで、まだ長いんだよね」

ニコが照れたように笑う。

意味が分からず首を傾げれば、『あ、そういう習慣ないんだっけ？』と首を傾げ返された。クリスマスプディングと言うからには、クリスマスに食べるものなのだろうとは予想できる。

が、それだけだ。

「クリスマスプディングって、色んなものが中に入って、それで運勢を占ったりするんだ。銀の指輪を見つけれられた人はね。一年以内……」

ニコが少し息を潜めて、内緒話をするかのように笑った。

釣られるようにして、わたしも彼に近づくと、彼は少しだけ意地悪そうに笑って屈めていた身を起こした。ずっと彼とわたしの間の距離が広がる。

教えてくれるとばかり思っていたわたしは拍子抜けして、開いた距離の分だけ彼に近づこうとする。

「やっぱり、秘密にしとこうかな」

言い方を変えてあげる、なんてニコは笑った。

そのまま教えてくれればいいだけなのに。

「次に指輪を贈るときはね」

こつちにしてね、とニコは笑いながら左手を手を取った。

そしてわたしが静止する暇もなく、その薬指の付け根に口付ける。チュッと小さな音がして、指に柔らかい感覚が走った。

予想もしなかったことだったので、思考回路が完全に停止した拳句、ショートした。

それは一体、どういう意味で受け取ったらいいんでしょうか。深読みしろってことなのか、それとも額面どおりに受け取るべきなのか。

でもキスを額面どおりに受け取るってどうやって？

「左手の薬指の血管は、心臓に直接繋がってる」

クリスマスプディングの謎は、今度指輪を贈るときに教えてあげる。

「だからそんなにびっくりした顔しない？ 本当は今すぐにでもしてほしいけど、それはちょっと焦りすぎだからね。今は予行演習コトハ、びっくりすると止まる癖あるから」

可愛いからいいんだけどね、と付け加えられて、止まっていた思考回路が再びゆるゆると動き出す。

しかし残念ながら、いつも以上に回転は遅くて、ニコの発言についていけない。

「えっと、えっとね。ニコ。今のは、どういう」

「びっくりしすぎて、整理できてないか。当然だよな。ごめんごめん、僕が悪かった」

よしよしと頭を撫でられて、俯いて頭の中を整理し始める。

わたしの中で、左手薬指に指輪というのは特別な意味を持つんだけど、この人は違うんだろうか。いや、違ったらあんな意味深な態度見せないだろうし。

でも、ニコだからどうなんだろう。もしかしたら、本当に言葉だけの意味で、自分が過剰反応しているだけかもしれない。

それはそれで恥ずかしい。ちょっとがっかりするかもしれない。

「んーとね。とりあえず、一年間君のことを想い続けた僕の心は伊

達じゃないってことだよ」

そして人波を避け、少し入り組んだ道で耳元に顔を寄せられた。再び思考回路を止められそうな気がして、慌てて身をよじる。

それでもニコは耳元で小さく言葉を紡ぎだした。人生最大の爆弾だと思っていた、キス（未遂）でさえ何でもないことのように感じられてしまう言葉だった。

「愛してるってことだよ。コトハ。サンタさんのお嫁さんになりませんか？」

それから耳元から顔を離して、呆然とするわたしを見て笑う。赤い顔をしている彼を見て、少し安堵しつつ、それ以上に赤くなっているであろう自分の顔を想像して泣きたくなった。なんだったそんな、唐突に。

「時間が足りないなら待つよ。信用してないなら、してもらえよう努力する。会う時間が少ないって言うなら増やすし、毎日電話だって何だってする。

だけどね、覚えておいて」

ニコが切なそうに笑った。

「諦めてあげることだけはできないんだ。ごめんね？ どんな苦勞も、行動も面倒なんて思わないけど。君を諦めることはできないんだ」

幸せなのか、そうでないのか。

混乱してるだけなのか、拒絶したいのか。

そんなことをグルグルと考えつつ、ふと手に目をやった。繋ぐことが、少しずつ当たり前になってきてきているこの関係。

姿を見るだけで嬉しくなっていて、ときどき負けてると自覚するくらいにニコのことが好きで。

逃がせないのは、諦めきれないのは、一体どちらだと言っただろう。傍から見れば、完全にわたしの方じゃないだろうか。間違いないかわたしの方だろう。

「さて、お団子食べに行こうか」

「ニコ。わたしも、ニコのことを」

誤魔化そうとしたニコの言葉を許さず、わたしは話題を戻した。混乱したわたしのために流されそうになったその話を、わたしは再び掘り返す。それでもしないと、ニコはもう二度とこの話を振ってくれなくなる気がしたのだ。

喉が詰まって、上手く発音できなくてどうしようもなくて……それでも言いたかった。

「ニコのことを、愛しています」

口に出すとやはり恥ずかしくて、どうしようもないけれど。それでも目の前の笑顔があれば、どうでもいい気がした。

プディングに銀の指輪が入っていた人は、一年以内に結婚する。

そんな言い伝えがあるなんて、コトハは知らないんだろうね。

腕の中に納まった温かい体を抱きしめつつ、自分がにやけているのが分かって苦笑した。

月の罫を指輪にして（後書き）

問題発言連続のニコでした。箍は初めからありません。

故郷の香り（前書き）

フィンランドフィンランド言ってますが、わたし一回も行ったことないです。その辺をご了承ください。でも北欧大好き！！いつか行きたいです。

故郷の香り

朝早くにメールが来た。

曰く『動きやすい服で、7時に玄関前ね』らしい。いつもの彼にしては簡潔なメールで、少々目を丸くした。

たまたまマナーモードにして寝てなかったのが幸いだったと思う。……いつもだつたら絶対に気付かなかつた。

夏休みの七時とか、絶対に寝てた。寝ぼけ眼で『分かった』とだけ返信して、のそりと起き上がる。現在午前五時だ。

多分今寝たら絶対に起きられない。起きられない自信がある。

そう思ってベッドから緩慢な動きで身を起こし、支度をし始めた。元々服装に拘る人間ではないので、こういうときの決断は早いほうだ。

動きやすい服という指定もあったことだし、歩いたり走ったりするんだろうか。そう思いつつ、動きやすさだけが追求されたシャツを着て、膝丈のボトムスを穿く。

靴は……スニーカーとか？

「今日は、何の日だっけ」

この前、一年分の十四日にある記念日を手帳にメモしたのだ。忘れないように。

それを思い出して、手帳のページを捲る。すぐ傍にある携帯にもあるが、手帳にはさらに詳しくメモってあるのだ。

「えーっと。八月十四日は……」

目的のページを出して、目を滑らせればピンク色のペンで書かれた文字が目に入る。

『グリーンデー』だった。何でも恋人同士で森林浴に行く日だとか。この暑い中、森林浴？ いや、この暑さだからあえて？

もやもやしなからベッドの上に座って時計を見る。

朝ご飯食べに下へ行こうかなあと一瞬思ったが、この時間では母

親がやっと起き出す頃だろう。そんなところに鉢合わせしようものなら、絶対にからかわれる。

空腹を抱えてじっと待っていた。じんわりと汗が滲むが、それはこれからどうやって下へ降りて説明しようか迷っているからだ。

夏休み中怠惰な生活を送っているわたしが、七時前に下りるとかどう考えてもおかしいだろう。怪しまれるに違いない。

お父さんに一体なんて言い訳すればいいのやら。（お父さんには未だに何も言っていないのだ。お母さんには一応言っているけど）この前ニコが来たときは、お父さん丁度残業だったし。

「どうしよう。何て言うの」

父と娘という関係は、意外に複雑だと思う。

少なくともうちはそんなに仲が悪いわけじゃないから、余計こじれる。彼氏ができましたとか、改めて言うものなの？ 報告して当然のことなの？

お父さん、何か言うんだろうか。怒ったりするのかな。

とりあえず、こっそり出るように試みる。鞆に最低限必要なものを用意して、もう明るくなり始めた外を見た。

今日も暑そう。こんな日に森林浴って、一体どこへ連れて行く気なんだろう。

「完全に、ニコのペースにはまってる気がする」

ちゃりと首元で音がして、お風呂のとき以外はずっとかけているペンダントを見た。

そういえば、この問題だって解決していない。何から何まで全てニコのペースで進んでいる気がする。

それが不快でなければ、悔しくもない。

何だかそれがひどく自然な気がしてきてしまい、つくづく甘えてばかりだなと思う。しっかりしなくちゃいけないんだけど、だけど。

その方法が分からずに、呆然とするしかない。

「そろそろ下りよう」と

髪をとり、服装を確認して時間を見ると、六時半だった。

朝ごはんを食べないとたないの、どうしても下に降りないといけないのだ。お父さん、今日休みじゃないから下にいるんだろくなあ。

トントンと音を立てて階段を下り、それからそっとキッチンを覗いた。幸い、お父さんはまだ起きていないみたい。

お母さんが朝ごはんとお弁当を作ってるだけ。

あ、お弁当どうするんだろう。

「あら、ことちゃん。これから起こそうと思ってたのよー。ニコくんのメール見た？」

はい？

一瞬止まって、お母さんの言葉を反芻する。何度思い返してみても、このお人は『メール見た？』と聞いた。

ニコの、メールは今朝着たはずだ。なのにどうして、お母さんが知ってるの？！

「あらあら、お母さんが何故知ってるのかって顔してるわね。それは、ニコくんとお母さんがメル友だからよ。

やだっ、言っちゃった。娘の彼氏とメル友なんて！」

もしもし？？ 大丈夫ですか、お母さん。

「あのね、ニコくんがね。夕方までには必ず送って来ますからって。わざわざお許しを求めるメールが来たの。

本当に几帳面で素敵な彼氏ねえ。お母さん羨ましいわ。大丈夫よ、お父さんは今日朝早くって、先に出たの。遅くなっても、お母さんが説明してあげるから安心して行って来てね。

あとはー。ああ、お弁当ね。ハイ」

ワケが分からないうちにお母さんは勝手に話を進めてしまった。

ついでにお父さんという一番の危機が先に出してしまったという話だ。助かった。お弁当まで用意してくれるなんて。

本来それって、わたしの役割のはずだけど。そう思いつつ、バスケットに入れられたお弁当を見る。リュックを背負っているので、バスケットは持てる。

「いいわねえ。青春ねー。羨ましい」

いつてらっしやい、なんてことを背中で聞いて、六時四十五分には家を出ていた。

にっこり笑われて、何故か帽子を渡された。やっぱり、森林浴って知ってるんだ。玄関出て、息を吐く。

まだ彼は来ていないらしい、よかった。

「そのうち、心臓止まっちゃうかも、しれない」

「それは困るよね。心臓止まっちゃうって」

ひやっと色気のない悲鳴が漏れて、体全体が少し浮き上がるくらい驚いた。

飛び上がったというには大げさすぎるが、気分的にはそうだった。心臓が、喉から零れちゃうんじゃないかって思った。

心臓が口から飛び出て、どこか行っちゃったらどうしてくれるんだろ。そう思いつつ、後ろを振り向いた。

「ニゴ」

「おはよう、コトハ。朝早くのメール、返してくれてありがとう。

今日はそんな君に、とっておきの景色をプレゼントします」

どういことだろうと思った瞬間に抱き上げられて、そしてすぐ下ろされた。

びっくりしたまま固まっていると、ニゴがこちらを向いてからちよいちよいと手招きした。

「ようこそ、ソリの中へ。ボクの相棒であるトナカイ、ルドルフもよろしくね」

あ、赤いお鼻のトナカイさん？

「僕と一緒に、まだ新入りなんだけど一番有名だよね」

ニゴが背を撫でると返事をするように鼻を鳴らす。

いつの間にかわたしはソリの中へ入っていて、先程までは見えなかったトナカイが見えていた。多分、ずっとここへいたんだろうけど、わたしには見えなかった。

まるで魔法か何かのようで、ドキドキしてしまう。一体どんな力

を使つたら、こんなことができるんだろう。

「さて、今日は特別。ボクの故郷を案内するよ」

へ？ と首を傾げると、ニコはその笑顔を崩すことなく『国境越えます』とあっさり宣言した。

すみません、わたしはいままで国から出たことがないので。ついでに言えばパスポートも持ってないんですけど。

もつと言えば、わたし油断してて薄着もいいところなんですけどね！！

「にっ。ちよっ、まっ！」

「いいから、いいから。サンタさんの力を信じてて。よし、ルドルフ。よろしくね」

その言葉を理解したように、トナカイさんは地を蹴った。

それと同時に立っていた場所がふわりと浮き上がり、見る間に自分の体が浮くのが分かる。ぐらつと体が揺れると、すかさず腰を掬われた。

見上げればニコはいつもどおりの笑みを浮かべていて、どこか憎たらしくなった。こんなにびっくりしてるのに、ニコのペースに載せられっぱなしで。

「こ、故郷つて。フィンランド？」

「正解。森の国で有名でしょ？ 何せ69%が森なんだから」

隣でニコが笑った。

そうか、本当にフィンランドの人なんだ。故郷か。わたしにしてみれば、それは遠く外国の話なのに、彼にとっては自分が生まれ育った国なのか。

何だか疎外感とでもいうのだろうか、一人だけ置いてけぼりにされた気がした。

一人ぼつちで、どこか知らない土地に放り出されるような、そんな感覚。怖いのか、不安なのか。

彼がいつもより遠く見えただけで、途端にわたしの中に黒いものが広がる。縫ろうと手を伸ばせば、危なげもなく繋がれた。

「不安？」

「だって」

だって、の後に続く言葉が見つからなかった。
行ったこともない国だから？

ニコが知らない人になりそうだから？

このソリがどういう仕組みで動いているのか、浮いているのかも分からないから？

「でもね、僕が日本を綺麗だと思うように、コト八にも僕の故郷をキレイだって思ってたほしいんだ。

僕が日本のことを大好きなように、コト八にもそう思ってたほしい。思ってたほしいから、知ってたほしい。それだけだよ」

握っていた手の甲を、彼は優しく撫でてくれる。

それはいつもどおりの仕草で、多分彼はどこへ行っても変わらないのだろうと思う。要はわたしの感じ方次第なのだ。

わたしが彼との距離を遠いと思えば遠いし、近いと思えば近い。多分彼は動いていない。ううん、わたしとの距離は常に同じなんだ。だけど、わたしが勝手に遠いと思おうとしているだけ。

それは、多分自分に自信がなかったり、不安だったり。理由はたくさんあるけど。

……彼を、信じていないのだろうか。わたしは、ニコのことを心底信じ切れていないのだろうか。そんなこと、今まで考えたことなかったのに。

どれほど黙っていたらう。すごく長い間、黙っていたような気がする。やっと口から出てきたのは、たったの一言だった。

「うん」

信じたい、のに。信じていると、思っていたのに。

人を好きになつたり、大切にしたりするのは、そこまで簡単じゃないらしい。恋なんて、今までしたことなかったから知らなかったけど。

自分が思っていたよりずっと、心は簡単に動く。わたしの心は、

ずっとずっと弱くて、脆くて、簡単に揺れる。

風が強くなつて、わたしの髪を揺らした。多分、わたしの心つてこういう感じなんだろう。

「見てみたい、ニコの住んでるところ」

髪を押さえて、どんどん見えなくなる景色を見つつ、呟いた。

森林浴とか、何かもうどうでもよくなって、ニコの手を握り返した。彼を知りたいと思うし、自分自身のことももっと知らなくちゃいけないと思う。

知らないから、不安になっちゃったりするんだろうし。うん、真剣なんだから、ちゃんとニコのことが好きなんだから。

「よし、森林浴へ出発」

風の温度が低くなる。

ひゃつとするほどのその変化に、思わず肩を上げた。湿った空気は瞬く間にその性質を変え、わたしの髪の毛をうねらせる。

ばたばたとはためくその髪に煽られて、わたしは目を瞑った。寒いというより涼しくて、ほんの少しだけ上着を持って来ればよかったかもしれないなんて思い始める。

でも特別涼しいだけ、ということもなく、夏の気配もほんのりとしていた。

「着くよ」

彼がぎゅつとわたしの手を握る。それと同時にソリが高度を落とした。

みるみる見えなかった景色が見えてきて、あっという間にソリが地面に着く。……早すぎませんかね、ニコ。

「ルドルフがすっごく頑張ってくれましたー」

わたしが伺うようにニコの方へ向くと、ニコはトナカイの背中を撫でつつ笑った。

そしてひょいっとソリから降りて、こちらに手を差し出す。両手を、だ。その意図が分からず、首を傾げつつ両手を彼に預けると、首を横に振られた。

「もつと近づいて」

「え?」「いいから」

両手を繋いだまま、彼に近づけばするりと繋いでいた手は離されて、脇を持たれた。

そのまま持ち上げられ、あつという間にソリの外へ引つ張り出される。さくつと土を踏んだ気がした。

「ようこそ、僕の故郷へ」

そう言われて、改めて辺りを見回す。誰もいない、静かな山の中だった。

山ってというか、森か。

「静かだね」

「デートは邪魔されたくないからね」

わたしからお弁当の入ったバスケットを取り、彼はわたしの手を取って歩き出す。

リュックに入れていた帽子を被り、彼が歩くスピードにあわせて歩いた。そよつと風が吹いてわたしの髪を攫う。

頬に当たる風は確かに夏の熱を孕んでいるはずなのに不快ではなく、森独特の匂いを運んできた。

頭の中が冷えて、感覚が鋭くなる気がする。風に揺らされているのはわたしの髪だけではなく、森の木々も同じらしい。

葉が音を立てて揺れていた。その音を聞くと、先程までの憂いも悩みも全てが消えていく気がした。今、すごく落ち着いているのが分かる。

「なかなかいいもんでしょ」

「何か、すごく気持ちいい」

多分、手を入れられた森林浴に適した森なんだろう。

人が歩きやすいように道があった。だけど人工的という雰囲気はなく、あくまで獣道の延長線のような感じ。

背の高い木々は名前も知らない。だけど風のさざめきや、鳥の声に自分が今森の中にいて、その一部になっているという錯覚さえ覚

えてしまった。

「綺麗なところだね」

「好きになってくれた？」

心配そうな彼の顔に、首を傾げて笑う。

どうしてそんな、不安そうな顔をするんだろう。

「好きだよ。だってニコが育ってきたところでしょ？ ニコが、キレイだって思う土地でしょう？」

わたしに見せたいって、そう思ってくれたんだよ。嫌いになんてきつとなれるわけがない。

多分、そのくらい溺れてる。国そのものが好きだというより、ニコ自身が好きなんだ。

それはもう、仕方がない。諦めよう。好きなんだから。うだうだ考えてたって、それが変わるなんてことありえないんだから。

そう思って、ニコを見つめた。

「ねえ、ニコ」

「うん？」

「わたし、単純かも」

彼の言葉一つで、彼の動作一つで、こんなにも彼を好きだと自覚させられる。

それは悔しくて、時々不安になるくらいだけど、それでもそれに満足してしまうほどで。

「ニコのことが、好きだなあ」

風がざわりと強く吹いて、思わず目を瞑った。

そして目を開けた瞬間、ニコの顔が近くて驚く。一歩下がろうとすればすかさず手を掴まれて、引き寄せられる。

彼が持っていたはずのバスケットは下におかれています、逃げ腰になった腰を強く引き寄せられた。落ち着いていたはずの心拍数は、途端に落ち着きをなくして数を増やす。

「そういう可愛いこと言わないの」

責めるようなニコの声。それとは別に、嬉しそうな顔。

その違いに戸惑えば、腰に回された手の力が強まった。

「ねえ、知ってた？ ここね、太陽が出てる時間長いんだ。もつと北に行けば、それこそ一日中太陽が出ててもおかしくないんだよ？」

「……それで？」

「夕方つて、どれくらいのことを言うんだらうね」

彼の言いたいことが分からない。それはわたしが鈍感だからなんだろうか。それともニコが難しいことを言い過ぎているからだろうか。

「どづいうこと？」

「コト八を、ギリギリまで捕まえておきたいってこと」

違うな、とニコが呟く。

それから顔が近づいて、耳元でそつと声を落とされた。

「できれば帰したくないってことだよ。それこそ、日が落ちるまでずつと」

森林浴は心が落ち着くという。リラックスできて、気分転換にはうつつけたとか。

それなのに、すごく綺麗な森にいて静かな木々の合間を歩いているわたしは、心が落ち着きもしないし、リラックスもできていない。ひた走る心臓を宥め透かそうと息を吸うのに、全くもつていうことを聞いてはくれなかった。

「ニコ、ニコ」

「なんてね。帰さなかったら、次から信用されないもん。それだけは嫌だよ。だから我慢してあげる。」

「だけど、あんまり可愛いこと言っていると、それも分らないからね」

「ちゅつと軽い音がして、額にニコの唇が当たった。」

もう森林浴関係ないんじゃないかな、と思ったのはここだけの秘密だ。いつもやられっぱなしなのは癪に障って、半ば自暴自棄に彼の額を引き寄せた。

わたしだつて、やればできるんだということを実証したくて。伝わるだらうかと、頭のどこかで思いながら。

故郷の香り（後書き）

初？ の攻めことはさんです。ことはさんだって、やればできる子なんです。小悪魔的な。

それが当然だと（前書き）

当然だと思うことは多いですが、それが本当に当然のことだといふのはあまりにも少ないと思います。結構、当然じゃなくて、特別なことなんだなって気付くことが大切かなあって。

でも、幸せとか、そういうものが『当然だ』と感じてほしいくらい、幸せになってほしい人もいます。

……そういうお話にしたかった。（過去形）

それが当然だと

「ねー、ことは。9月14日って何の日か知ってる？」

大学での授業の合間に友人から尋ねられる。『知らないよ』と笑いながら、手元の手帳にちらりと視線をやった。

それから携帯を確認して、そつとため息を吐く。今日はまだニコからメールが来てない。

来ないならメールすればいいことなのだが、話題も思いつかなかつたので、ただ携帯を確認する作業が続いた。

今日でもう何度目だろう。メールの着信を問い合わせたかったが、友人の手前そんなこともできない。

「今日はね、セプテンバーバレンタインらしいよ」

首を傾げれば友人は、なんとも意地悪そうな目で笑った。

わたしが知っている記念日とは違ったので、物珍しくて友人に続きを促す。同じ日にちでも記念日はたくさんある。

その中で、ニコが何をするのは予想できないので、なるべく多くの情報を知りたかった。もっとも、今日来るかどうかはまだ分からないのだけれど。

「3月14日のホワイトデーから半年。別れを切り出す日、らしいよ？」

へえと気のないような返事をしつつ、わずかに心拍数の上がった心臓を抑える。

ニコに限ってありえないと否定しつつも、どきりとしたことは事実だった。まさか、そんなことあるわけないんだけど。

でも不安になるのは仕方ないことだと言いつく。こんなときに限って、彼からのメールは来ない。自分からしようかと携帯に手を伸ばす。

「ことはは彼氏いるんだっけ？」

「あー、まあ」

言葉を濁してから携帯を手にとり、それから友人の言葉を振り切るように立ち上がった。

「気を悪くした？」

「ううん。別にそれはいいんだけど」

どんな風にメールをすればいいのか、まして電話してもいいものなのか。

そもそも、時間はどれくらい違うのか。そんなことさえ分からなくて、今彼がどんな風に過ごしているのか想像もできなくて、小さく唇をかんだ。

「ねえ、フィンランドって日本と時差どれくらい？」

突拍子もない質問に、友人は少しだけ首を傾げたが先ほどのことをよほど悪いと思ったのか、素直に悩んでくれた。

「えっと、イギリスまでが9時間だから……。6時間とか、7時間とかじゃないの？ ノルウェー、スウェーデン、フィンランドって、フィンランドが一番右だっけ？」

今から6、7時間前ということか。今が2時半とかだから、8時とか？

丁度忙しい時間だと思う。かけられないな、と思って携帯をしまった。一体いつになればできるのだろう。というかいつもはどうやって来てるんだろう。

だって、6時間とか7時間も違えば、こちらで夜遅くてもあつちではお昼とか夕方とかで、とても仕事が終わっているとは思えない。

……学生とか？ でも学生だって授業ありますよね、普通に。もしかして、とんでもない無理をさせているんじゃないかなるかと思え付いて、逆に今まで何も考えてなかった自分を恨む。

どうして気がつかなかったのか。こんな簡単なこと。

立ち上がって、そわそわして鞆を持って学校を出ようとする。

「ちよっと、ことは！ 4限目始まつちゃう！」

「うん、ごめん！ 帰る！」

学校をサボったのは生まれて初めて。授業がどうでもいいなんて

考えたのも、多分初めて。

彼のことしか頭になくって、他には何も考えられなくて。だけど『どうして』と繰り返して、自分を責めることは忘れない。

電話してもいいの？ 迷惑なの？

何かしているかもしれない。邪魔してるのかもしれない。毎月会いに来るのだからきっと大変で、すごくすごく無理してるのかもしれない。

校舎から出て、人もまばらな大学内を走る。携帯を握り締めて、大学の門を出た。息が上がって、苦しいのに何で止まらないんだろう。

ずるずると門に手をつきしゃがみこんだ。

頭が痛くなつて、気分も悪くて、口元に手を当てた。ぐるぐると色んなことを考えてたら、立ち上がれなくなりそうだった。

助けてほしかった、誰かに。違う、他の誰でもない『彼』に。

「コトハ？！ 気分、悪い？ 大丈夫？？」

背中に温かい掌が乗った。次いで優しい声が聞こえて、びっくりして体を起こすと、目の前にはニコがいる。

口だけが『どうして』と動くのに、息が切れたわたしの口から音は出ない。こみ上げていた涙を親指で掬われ、そのまま頬を撫でられる。

大丈夫、と囁くように言えば安心したように体を離された。そのわずかな隙間さえ嫌で、思わず抱きつく。

「コトハ？ 立てない？」

「……違う、けど」

不安になったり、そういうことじゃなくって。

何も知らない自分自身に嫌気が差したただけ。知らないのに、『知らない』事実を何とも思わずにいたことへ、呆然としただけ。

「あー、お姫様抱っこ、じゃ僕の体力が持たないな。背中に乗るとか」

オ口オ口とするニコの胸に頭を押し付けて、情けない自分を心の

底から罵る。罵ったところでどうにもならないし、意味もないんだけど。

そうすることしかできなくて、余計にイヤになった。ニコの服の裾を掴んで、頭を振る。

何も語るつとせず、離れることもしないわたしを見て、ニコが溜息を吐いて、頭を撫でる。何も聞かない、何も言わない。

それがニコの優しさであるんだろうけど、何故だか今日はそれが嫌だった。

「ニコ、学生？」

「え、違う、けど」

「そう」

そこですばらく沈黙が落ちる。会話が切れて、頭を預けたままその沈黙にじつと耳を澄ませていた。

「ねえ、コトハ。そろそろ謎解きしてくれる？ コトハの考えてること、僕には分からないから」

ニコが笑って、こちらの顔を見る。

下から掬うように顎を捉えられて、その仕草にどきりとした。今まで一度としてされたことがない、大人の仕草。

無理やりではないのに、逆らえない力があつた。

「わたし、何も考えてなくって」

「え？」

「ニコのこと、何も知らないのに、『知らないこと』を少しも疑問に思ってた」

何度か気になったことはある。思考の端の方で、ちらちらと瞬くこともある。

だけど深く考えることなんてなかった。知らないことが、ある意味当たり前のよう。知らなくてもいいよう。そんな考え方をしていた。

彼が働いているのかも、とか。来るときに仕事をどうしているのかとか。遠い道のりは辛くないのかとか。

そんなこと、何一つ考えてなかった。ニコのことが、好きだと
うくせに。何も、考えてなかったんだ。

「もしかして、知らないことを気にしてる？」

「気に、してなかったことが、情けなかったの」

ニコの手が背中に回る。顎を捉えていた手は、わたしが俯かない
ことを確かめるとするりと離れていつていた。

下唇の下に当てられていた親指がかすって震える。

「情けなかった？ どうして、コト八がそう思うの？ 話さなかつ
たのは僕だよ？」

聞かなかったのは、わたしだよ。

そんな言い訳さえ、彼の瞳は許してくれない。じっと見つめられ
て、またぐらりと体が傾く。自己嫌悪が、気持ち悪さとなって襲い
掛かる。

何も言えなくて、ただ彼の背中に回していた手で、服を掴んだ。

助けを求めた。この苦しさから救ってほしかった。

救ってほしかったけど、自分で解決しなければいけない問題だと
いうことも分かっていた。聞かなきゃ、きちんと。言わなきゃ、ち
やんと。

「ニコが、夕方とかに来る日でしょ？ でもその時間って、フィン
ランドではずっと前でしょ？ 仕事をしてるんなら、そんなに早く
出れるはずないのにつて。きっと、すごく無理をして、会いに来て
くれてたのに。」

わたし、考えもしなかった。時差とか、距離とか、そんなこと、一
つも考えてなかったの。それがね、すごく情けなかったんだ」

口に出してみても、考えながら話してみても、そうなのだと言くと頷く。

会いに来てくれていることを、段々と当たり前のように感じ始め
ていたのではないか。会いに来てくれることが、大変なのだと思付
いていなかったのではないかと。

「ねえ、コト八」

ニコが、苦笑った気がした。背中に当てられたては優しくわた

しを落ち着かせるように動く。

責めていないその手の動作は、いつもどおり優しく、でもわたしの心だけがいつもどおりではなかった。

「僕がさ、無理してるって考えてたの？ コト八に会うことを、
大変だ』って？」

違うよ、とニコが呟いた。

その反対、と続けられる。

「僕はね。それを当然のことだと思ってほしかった。距離なんて考えてほしくなかった。時差とか、それこそ君の頭の中から消してしまいたいくらい」

ニコの手がわたしの服を掴んだ。まるで、縋りたいに。さつき
のわたしみたいに。

「一ヶ月に一度だけど、でも会うことが当たり前で。二人の間に距離なんてなくて。それこそ、コト八が助けてほしって思ってくれるくらい近くに感じてほしかったんだ。

すぐ、会いに行ける距離だと思ってほしかった。それに、会いたいのは僕の方だから。無理とかじゃなくって。コト八に、会えない方が僕には辛いんだ」

抱き寄せられる。近くに、引き寄せられる。

いつもよりずっと強いその力は、彼からすればほんの些細な力なのかもしれない。それでもわたしの胸は押しつぶされて、苦しくな
って、小さな痛みを覚える。

それでも、彼が抱きしめてくれているのだという実感は確かにあ
った。ぎゅっと、確かにここにいるのだという感触があった。

「仕事はねー。お祖父ちゃんとお父さんがやってるおもちゃ屋さん
で働いてるんだよね。だからまあ、二人には悪いけど自由は結構聞
くんだ。

お祖母ちゃんとかね、日本の人で。だから、コト八に会いに行くの
を応援してくれてるし」

ほらね、とニコは何でもないうように笑ってわたしの不安を打ち消

した。

まるで、悩むこと自体不要なんだというように。とても優しい声で、わたしに語りかけてくれる。

聞きたかったことを、聞けなかったことを、いとも簡単に話してくれる。こんなことなら、色々悩まずに初めから聞いておけばよかった。

出身地はどこなの？

どうして日本語を話せるの？

サンタさんをする以外にはどんなことをしているの？

「まあ。でも、コトハが僕に興味を持ってってくれるならいいかなあー。何かいいね。こうやって自分のことを知ってもらえるのって。

理解してもらって、何だか安心する」

ほっと息を吐いたニコは、どこか拗ねたような口調で続けた。

抱きしめた力は少し緩められたが、抱きしめることを止めようとは考えていないらしい。

「コトハが体調悪いのかと思った。すごく心配した！ まだ授業中かと思って大学行ったら、蹲ってるし。一瞬で血の気が引いたんだから。もー、ルドルフに心配されるくらい焦ったんだから」

拗ねたような口調で、叱られているような感覚になる。

言い訳が許されないほどで、口を開くもニコの顔とぶつかってやめておいた。何だかすごく、心配させてしまったようだった。

申し訳ない反面、少しだけ嬉しい。

「ちよつとね。あ、ニコ。今日何の日か知ってる？」

元気が出てきて、笑顔も戻って。わたしってとことん現金なんだと自覚させられる。

ニコが傍にいただけで、こんなにも嬉しくなる。ニコも、そうであればいいのと思った。わたしがいるだけで嬉しくて、心配がなくなるようになればいい。

そんな存在になれればいい。わたしにとって、彼がそうであるように。

「今日はねー。フォトデーでしょ。メンズ・バレンタインデーでしょ。後は」

「セプテンバー・バレンタインってのもあるらしいよ」
ぎよっとしたようにニコが目を見開いた。その様子からすると、どうやら彼はその存在を知っていて、わざと言わなかったらしい。

どうして知っているの、とその目が問うていた。

「コトハ。それ、怒るからね!」

「……冗談だから、怒らないで」

ぎゅっと今度こそ加減を知らないくらいので抱きしめられて、諸手を上げた。降参のポーズを取ると、ニコはゆっくりと笑って『分かればよろしい』と大仰に頷く。

その様子がおかしくて笑えば、額をくっつけられた。

「ねえ、コトハ。7月に言った言葉、覚えてる?」

いきなり問われた問いに、どきりとする。

きゅっと服の上から棟にかかっているペンダントトップを握り締める。指につけるわけにもいかず、かといって身につけていないと不安で。

だからずっと首から提げている指輪。この指輪を貰ったときの会話を、忘れることなどできるはずもなかった。

頭から離れるなんてありえなくて、ふとした瞬間に思い出しては床を転がりまわりたくなるような羞恥を覚えた。

その人のことを考えて、声に出して叫びたくなるくらい恥ずかしくなるのは今回が初めてだった。

指輪を贈られることを予期していたらしい母は、何にもつっこまず、ただただニコニコ笑っていた。

『ニコくんはやるときにはやる子よねえ』なんて言いながら、わたしがゴロゴロするのを見ていたのだ。

不思議そうにしている父に何でもないので、と笑いながら、母はわたしから話すことを待っていたらしい。

父に言い訳もできず、かといって母にも相談できず、ただ悶々と

する日々が続いていた。先月、どうやってあそこまですっかり忘れていたのか気になるくらいだ。

「うん」

「考えてくれた？」

「すごく、考えた」

実際は彼の真意がどこにあるのかとか、それは本気なのだろうかとか。疑っていたという方が近い。

わたしはまだ大学生だし、彼もまだ多分若い。彼が口に出した話は、わたしにとってはもつとずっと先の話で、それでいて憧れがないというには少し無理があるような話だった。

「考えてくれるだけで幸せって言ったら、笑う？」

「でもね。あの、色々と考えててね」

何と言えど、この気持ちを表現できるんだろうか。

結婚とか、したくないわけじゃないんだ。うん、したくないわけじゃない。まして、ニコが嫌いなわけでもない。

好きだ。すごく好き。口に出せば意外と呆気ないけど、それまで悩んだのが馬鹿みたいに軽いけど、ただと言いつつ表せないくらい、好きだ。

うん、愛してるって言うてもいいと思うよ。

こんな若い人間が何を言ってるんだと、他の人たちに言われてしまうのかもしれない。

もしかしたら、それは愛じゃないとか言われてしまうのかもしれないけど。

でも、わたしは今これ以上に人を大切に思ったりする心を知らないから。わたしの中での、最上級の心はニコにあるから。

だから、それを愛と呼ぶことにしてる。後々間違っていれば、それは訂正しなくてはいけないんだけど。

だけど、日に日に大きくなっていくから、多分大丈夫。

「コトハなりに、一生懸命考えてくれるだけで幸せだよ。だって、可能性が0ゼロじゃないからね。」

コト八が一生懸命考えててくれるだけで、今はいいよ。確かに早すぎるしね」

額をあわせたまま、彼が笑った。何も心配ないよと言われているようで、ここがどこかなんて考えずに笑い返す。

体を離れたニコが、手を引いて歩き出すのもそのままについていく。考えるだけで、いいの？

「もちろん、言ったからには僕の心が変わるわけではないし、本音を言えば今すぐにでも攫ってしまいたいよ。うん、本当に。そうできたらどんなにいいだろうって思う」

彼が呟くようにそう言つて、繋ぐ手に力を込めた。ニコはときどき、こちらが赤面したくなるような言葉を言ってくる。

決して不快なわけではないのだけれど、どこか気恥ずかしくてついで下を向いてしまう言葉たちなのだ。

「でもね。コト八が嫌がるようなことはしたくないし。できれば皆に祝福されたいし」

町並みを過ぎ、見知った道を歩きどんどん家が近くなる。あと10分もすれば我が家が見えてくるだろう。

それでもニコはゆっくりとした足並みを止めることなく、わたしの手を繋いで歩いていく。

「コト八。今君は、どこまで考えてる？ 賛成的、否定的？」

どこまで、というような具体性は全くない。だけど、せめて『そういう』未来が予想できることは伝えたかった。

「あのね。どんなふうに二人で過ごすのかなつとか、どこで住むのかなつとか。色々と考えてた。すごく、大変そうだなって思ったよ。だけどね、嫌だなんて思わなかった。まだ早いのかもしいし、考えなきゃいけないことはすごく多いし、ちょっと反対されちゃうかもしれない」

特にお父さんとかね。

「だけど。……ニコと一緒にいたいなって、最終的に思っちゃった」
もっと他に考えることとかあつて。相談しなくちゃいけないこと

とかもあって。きつとわたしたちだけの総意ではどうにもならない事だっただくさんあって。

だけど最終的に考えたのはそれだけだった。他の誰かと一緒にいる未来なんて考え付きもしなかったし、未来を思い描くときには当然のように隣にニコがいた。

わたしはそれを、当然だと思った。

ごくごく普通のことだと、それ以外に考えられないと。

そんなふうに、思っちゃったんだ。

「サンタさんの、恋人になるだけでもびっくりだったのにね。去年まで、わたしはニコのこと全然知らなかったのに。そんなに、知ってるわけでもないのに。知らないことの方が多いのに」

ニコの言葉に反対する理由なんて考えれば考えるだけ出てくるくせに。出てくるのに、それは決定打にはならない。

そういう側面があるだけだ、と思うのだ。それに対する解決策だっつて、いくらでも出てくる。

知り合って間もないなら、もう少しこうやって一緒に過ごせばいい。そうやって、ニコのことを少しずつ知っていったらいい。

「コトハ。それって、いいように受け取っていい？ 僕が、都合のいいように、受け取ってもいい？」

ひどく気弱なその発言に、『ニコの言葉も、わたしの都合のいいように受け取ってるから』と笑う。

「わたし、サンタさんの奥さんになりたいなあって思っちゃった」
笑うように言えば、『そっか』と返事をされて抱きしめられた。もう家は目の前だ。

どうしよう、離れたくない。彼はわたしの足が浮くくらい強く抱きしめて、わたしも彼の肩に顎を乗せた。それくらい、幸せなのだ。

だけど、そのときだった。

一番、見つかってほしくないタイミングで。一番、大切なタイミ

ングで。彼の肩越しに、わたしは目を見開いている父を見た。

言い訳も何もできない状態で。彼に体を預けて。

「……そこで、誰と何をしてるんだ。ことは」

恥ずかしさと、気まずさと。後は何とも言えない後ろめたさ。そんなものが一緒くたになつてわたしに降りかかった。

そういえば、わたしはまだ『彼氏』がいることさえ、報告してなかったのだ。

厳しい父の目を目の当たりにして、いつそ気を失えばどんなにいいだろうかと現実逃避を計った。

「お父、さん」

お母さん。今日、早めに帰ってくるんなら、朝言ってくればよかったのに。こんなに早く帰ってくるなんて、わたし知らなかったよ。

「あらー。秀則さん。おかえりなさい。あ、ニコくんも。あらあら。四人してどうしたのかしら。さあさあ、中へ入ってお茶を淹れましょうね。」

そうそう。今日はお夕飯食べて言ってね。ニコくん」

お母さん、どうしてそんなににこやかでいられるの。というか、こうなりそうだと思ってたの?!

「今日は肉じゃがとお味噌汁よ。純和食にしてみました。秀則さんも好きよねー」

「あ、ああ。そうだな」

父の目が揺らぐ。母の目がつこりと細められる。何だろう、この光景。できることなら自分の部屋に駆け上がりしたい。

「あ、あのっ」

ニコの声が響いたが、父はそれに耳を貸すことなく家に入っていた。その際、わたしの腕を掴むことを忘れずに。ずるずると問答無用で家の中へ入れられる。

母はニコの手を取って、その後に続いた。

「あの！ コト八さんと、お付……」

「ことはの名前を気安く呼ぶな！」

「まあ、秀則さんだったら。うちのお父さんが秀則さんに言った言葉と一緒に。秀則さんだったら竦みあがっちゃって、ニコくんみたいに挨拶できなかったのよ？」

母の嬉しそうな笑い声が聞こえて、今度こそ眩暈がした。願いが叶うなら、今日の朝からやり直したい気分だった。

「挨拶するにもゆっくりした方がいいでしょ？ お母さん、お茶淹れてくるから三人で大人しく座っててね。秀則さん、殴りかかっちゃダメよ？ いくらうちのお父さんが秀則さんを殴ったからって。ニコくん、とつても紳士的で、とてもとてもことちゃんの前で秀則さん殴り返せないから」

こんな息子ほしかったのよねえ、なんて言いながら母はお茶を淹れに行ってしまう。わたしも手伝いに行きたかったが、さすがにここへ二人残しておくことは危険だろうと判断して大人しく座る。

ちなみに、父に引つ張られたままのわたしは父の隣。父の向かい側にニコ。その顔からはいつもの笑顔はなかったが、落ち着いてはいた。

落ち着きがないのは父の方で、睨んではいるものの……どこか目が泳いでいる。

ニコと目が合うと、ゆっくりと微笑まれて、でも今回ばかりはそれで安心できなかった。だって、思ってもみなかったのだ。

お父さんが、ここまで激怒するなんて。ちよつと心配されるかなあとは思ってたけど。

「ことは、事情を説明しなさい！ お嫁さんのところまで全てだ！」

涙声なのはつつこまなくていいのかな、と思いながら。わたしは口を開けずにいた。どこまで話せばいいのか。どこまで話したらいいのか分からなかったからだ。

グルグルと目が回る。ああ、ダメだ。本当に気分が悪い。目が回りすぎて……。

「ちよつ、コト八つ?!」

気を失いたい、なんて言ったけど。よもや本当に気を失うなんて、思ってもみなかった。意識が黒く塗りつぶされる瞬間でさえ、ニコしか目に入らなくて、その事実に対し笑った。

それが当然だと（後書き）

微妙なところで来月に続く。

お父さんをどんなキャラクターにしようかなーと、お母さんが出てきてすぐに考え始めましたけど。ちなみに、モデルはうちのお祖父ちゃん（母方）と父親です。

『彼氏連れてきたらどうする？』

『殴りかかるかな。あーでも、逃げるかもしれない』（自分は殴られそうになつたらしい）

『結婚するって言われたら？』

『泣く！』（即答過ぎて、母親が爆笑した）

一人娘だと、こういうことって珍しくないらしいです。今のところ、そんな必要がまるで見受けられない娘でよかったね、と思わないでもない感じでした。

娘を持つ世の中のお父さんって辛いですね。

その存在に酔う(前書き)

微妙に……うん、注意を促してみる。基本ラブラブですけど、危ない雰囲気だと思ったなら逃げるのが吉だと思います。だけど年齢制限はない、はず。

その存在に酔う

「お、お母さん。もうわたし、ここにいたくないんだけど」

わたしが気を失い、家の中が騒然としたのは一ヶ月前。

父はその日を『なかつたこと』にしているらしく、それ以来家中では一切ニコの話題が出ていなかった。出ていなかった、というよりも意図的に出さないようにしていた。

わたしはわたしで、面倒なことを言われないようにと、ひたすらに息を潜めている。それは昨日までも一緒だった。

それなのに、昨日唐突に父に呼ばれ、机に向かい合うように座られ、ゆっくりとした口調で諭された。

曰く、『お前の彼氏を紹介しなさい』と。

母親が隣で小さく笑い、父は惘然とした様子で座っている。

わたしはといえば、倒れてその日のことをなかつたことにされていることへ多大な安心感を抱いていたので、驚きが隠せなかった。

そしてその日に仕方なくメールしたのだ。

お父さんと一緒にご飯を食べてくれませんか、と。

ニコからの返事はとても端的で、『よろこんで。楽しみにしていますと伝えて』と返ってきた。

その物分りの、話の通りやすさといったら、逆にこちらが不安になるくらいのもので、わたしはメールを送ったことを後悔した。

一ヶ月前、わたしが倒れて、家中が大騒ぎになったのは母とニコ

(電話)から聞いた。

父は慌ててはいたものの、真っ先にニコを帰したらしい。ニコはせめてわたしが目覚めるまで待つていたかったらしいのだが、母に促されて帰ったのだとか。

正解だと思う。あれ以上の家にいたら、確実に父が殴っていたよ
うな気がする。

「何言ってるの、ことちゃん。今日はニコくんが我が家でご飯を食

べてくれるのよ？

一ヶ月前はことちゃんが倒れちゃったけど、今回はそんなことないし。でも、本当に風邪で倒れることってあるのねえ」

母が頬に手を当てて、不思議がるように言った。そんなこと、わたし自身が聞きたい。

今まで一度として気を失ったことなどなかったのに、どうしてあのタイミングで倒れてしまったのだろう。

いくらなんでも自分に都合がよすぎるというか、ニコにとって都合が悪すぎるというか。とりあえず、あんなタイミングで二度と倒れたくない。

「だって、だってお父さんがすごく怖いよ！」

「いつだって、誰のお父さんだって、娘の彼氏には怖いものよ。…多分ね」

母のなんとも頼りない言葉を聞きながら、携帯を閉じたり開けたり。

忙しくないじるわたしは完全に落ち着きをなくしていた。

父に『彼氏を呼べ』と言われたときに、色々な言い訳をし、様々なフォローを入れてみたものの、父の決意が揺らぐことはなかった。もうすっかりと寒くなっているから、外で風に当たってほしくはないんだけど。

「どうしよう、殴ったりしちゃったら」

「するかもしれないわねえ」

お母さん、どうしてそんなにのんびりと言葉を紡げるの。わたしは今から不安でいけないよ。

時計に目をやれば、約束の三十分前をすでに切っており、そわそわと落ち着かなくなる。

一ヶ月に一度のこの感覚は、いつもどこか苦しくて、それでも楽しみだったわけだけど、今日ばかりはそうも言っていられなくなっていた。

今日は駄目だ。今日は怖い。

全然楽しみじゃない。

お父さんが怒ってニコを殴ったりしたらどうなるんだろう。

いつも優しい笑顔を向けてくれるし、絶対に乱暴なことはいないニコだから、まさか殴り合いの喧嘩になるなんて心配はないのだからけど、それでもニコが一方的に殴られるなんて見たくないし。

お父さんが遅く帰ってくればいいのに。

「お父さん、今日早く帰ってきてくるって」

「そっ」

と、そのとき玄関で音がして、びくつと肩が震える。ニコだろうか、お父さんだろうか。

どちらにしろ心臓に悪いことには違いないので、とりあえず玄関に急いだ。すると扉がするりと開いて、そこからお父さんが帰ってくる。

残念だったような、ほっと安心するような。不思議な感覚で、お父さんの顔を見た。

「何だ、ことは。その残念そうな顔は」

「当たり前ですよ、ことちゃんはニコくんを待ってるんですから」

お父さんの眉間にしわがより、不機嫌そうな顔が怒りを孕んだのが分かった。

わたしは何も言い訳ができずに、そっとお父さんから視線を外す。これくらいしかできない自分は、心底意気地がないと思う。

「それで、その。ことはの彼氏はまだ来てないのか」

「当たり前ですよ。三十分も前ですから」

お母さんが笑った瞬間、玄関に人の気配がし、ピンポンと柔らかいチャイムの音が鳴った。

その瞬間、玄関先でネクタイを緩めていたお父さんの周りの空気がひんやりとする。勘違いじゃない、一瞬で空気が冷たくなった。

「あら、早かったわ」

わたしは慌てて再び玄関に向き直り、そっと玄関の扉を開けた。

予想していたことだが、目の前にいたのは見慣れた笑顔のニコで、

でも今日ばかりは素直に笑顔を返すことができずに、おずおずと『いらっしやい』と言った。

「ニコくん、いらっしやい」

「お邪魔します、お母さん」

ニコの口から『お母さん』という単語が何の迷いもなく出てきて、思わず照れる。

どうしてか、こちらが照れてしまつて、そつと俯いた。嬉しいのか、恥ずかしいのかよく分からない感覚が胸を占めて、一瞬お父さんの存在さえ忘れてしまいそうだった。

いや、正確には一瞬だけお父さんがこの場にいることを忘れた。それくらい、とつさに抱きついてしまいたくなった。ふわつと温かくなる安心感がそこにはあつて、それだけでわたしはさっきまでの不安が消えていくのを感じる。

ニコがいる、というそれだけで、こんなにも心が落ち着く。

「あの、お父さんも」

「君にお父さん呼ばわりされる筋合いは一切ない！」

あ、とお母さんとわたしが口を開く。

テンプレ過ぎたその言葉だったが、怒った声で言われるとなかなかの迫力があり、ニコは困つたように眉を下げた。

しかし困つたように、なだけで、決して恐れているわけではなさそうだった。

「あの、ではお名前でお呼びした方が？」

「もつと筋合いがない！」

そんな無茶な、と思う一方で、その会話の奇妙さに笑いがこらえきれずについ噴出した。

お父さんの子供っぽい言い方と、それに対するニコの紳士的な返答が絶妙で、どこかちぐはぐの印象を与える。

そのことに気が付き肩を揺らせば、お母さんも同じらしく笑いながらお父さんの肩を押した。

「さあさあ、中へ入ってください。お夕飯の準備、済んでますから

ね

我が家の中で一人だけ冷静なお母さんの背中を見つつ、今日無事に終われるのか分からなかった。

いや、終われない気さえた。お父さんの雰囲気は不穏だし、それに対するニコはあまりにも堂々としていて、恐がっていないから。ぶつかりそうな気がする。何となく、だけど。

「い、いつから付き合ってるんだね」

「そうですね。五月にコト八さんに告白して、六月に正式な返事を貰いました。それから、お付き合いさせていただいてます」

落ちて着いたニコの声。

今日ばかりはわたしの隣に座っているのは彼で、目の前のお父さんを穏やかな顔で見つめていた。

全く緊張の見られない顔で、声で、いつもどおりのニコだった。何だか少し意外で、それでも十分にニコらしい態度だった。

一番初めに会ったときは笑顔の似合う、少しおかしなお兄さんという感じだったのに。

「それで、君は」

「コト八のことを、愛し」

「お父さん！ ごはんのおかわりいるよね。ニコもいるよね！！
たくさん食べてね」

お父さんとニコの会話に我慢できず、思わず割って入る。

お母さんがわたしの目の前で苦笑いを浮かべつつ、残念そうな顔をして『あらー、どうして止めちゃったの？ お母さん聞きたかったのに』と不平を漏らした。

いや、なんか居た堪れなくなった。

すごく気恥ずかしくなつて、邪魔したくなつたのだ。

お父さんとニコのお椀（そう、何故かニコ専用のお椀があるのだ）を掴み、炊飯ジャーのところまで走った。

知っていますか、炊飯器って英語でライスクッカーって言うらしいよ。そんな関係ないことを思い出していた。

「あ。ニコくんからワイン貰ったの」

お母さんが喜び勇んでワインの入った袋を出す。

「ご飯食べてるときに出すものなの？ それ。ご飯食べたあとに晩酌程度でいいんじゃないの？」

成人してもなおお酒が苦手で飲めないわたしは、若干のけぞりつつそう思った。

「今日はワインデーですから。コト八にも飲みやすいやつ」

「あ、ありがとう」

そっか、今日はワインデーだったのか。

ニコは本当に色んなことを知っていて、ときどきその知識は一体どこにしまわれているんだろうと思うことはある。

わたしだっつてそれぞれの十四日は何かがあるか調べているつもりだけど、全部を覚えているわけじゃないし、それを常日頃から気にしているわけでもない。

特に今日なんかはお父さんがニコを呼んだというその事実だけで焦って、他のことは何も考えられていなかったのだ。

「ことちゃんお酒好きじゃないもんね」

「はい、だから口当たりのいいものを選んでみたんですけど。お母さんは赤ワインがお好きと聞きましたので、赤と白を買ってきました。お口に合えばいいですが」

よく分からないし、ワインなんて白でも赤でも一緒じゃないの？ と正直思っている。

確か……どっちかが渋かったりするんだよね。冷やしたり冷やさなかったりもあるし、第一高いイメージがある。

何か大人の飲み物で、わたしには縁がないもの。

実はお酒といってもチューハイを少しくらいしか飲まない私からしてみれば、とても未知のものです。

「私はねえ、あまりワインの良し悪しが分からないから。でもお酒

は好き。ニコくんが選んでくれたならよかったわ」

食事は思いのほか和やかに進み（お母さんのおかげだと思つ）、お父さんとお母さん、それからニコがワインを飲み始める。

「白の甘口。初心者にはいいって聞いたから、あ、あとね。こっちもコト八に」

ずっと差し出されたのは、それまでの洒落な（多分、あつちで買ったんだろう）ラベルのものじゃなくて、何故か日本語で書かれているラベル。

あれ、ワインって日本でも作ってるの？

とことんお酒の知識がないわたしはそんなことを考えてから、ラベルをまじまじと見つめた。小さな可愛いボトル。

それから漢字で書かれたお酒の名前。

でもその色は赤ワインとも白ワインとも少し違う気がした。

琥珀色、とでも言おうか。少し黄色みがかつた液体がたぷんと揺れる。美味しそう、とは思わないけれど、それが何か分ならず首を傾げる。

「これ、ワイン？ 日本でも作ってるの？」

「これはね、貴腐ワインっていうの。すごく甘くて、コクがあるし、おばあちゃんが勧めるから」

きふ？ きふってどんな字だろう。

甘いのか。それは飲んでみたいなあ。でも酔っちゃうとどうなるかまだ分からないし、ニコに醜態を見せるわけにもいかない。

何よりケンカになったとき、酔ってたらニコを助けてあげられない。それはちよつと嫌だから、とりあえず脇に置いた。一人でこっそり飲もうかな。

「酔ってもいいときに飲むよ。今日は、やめとく」

「どうして？」

「どうしてって、お父さんとケンカになったらどうするの？ 殴り合いになったら止めなきゃ」

真剣に言った私とは裏腹に、ニコはにっこりと笑って『心配ない

よ』と言っ。

どうしてだろうなんて思いながら、お父さんのほうを向くとお父さんはすでに机に突っ伏していた。え……。どうして？

「お父さん、お酒に弱いんだってね。お母さんから聞いてたから、度数が高いワイン持って来ちゃった」

「どうして？」

「お母さんが、『ヒデノリさん、ニコくんを離さないと思うから、酔わせちゃいましょ』って。

本当はね、もつともつと僕のことを知ってほしいし、僕とコト八のことについて話したいと思ってただけ。止められちゃって。お父さん、多分すごく動揺してるから」

動揺しているのは認めよう。

多分、ニコの存在を認識すること自体嫌はずだ。でなければ、あれからほぼ一ヶ月、一度もニコの話題を出さなかったというのはおかしい。

お父さんは、わたしが誰かと付き合っているという事実自体、認めたくないのだろうと思う。

今までそんなに溺愛されて育った覚えはないのに、それだけは確かだった。

「もつとゆっくり、時間をかけて。僕のことを少しずつ、知ってもらって。そうしたら、付き合うのも賛成してくれるかな？」

それとも、お母さんが言うとおり殴られちゃうかな」

そんなことは分からなかったが、急にニコが大人しくなって、思わず抱きつく。

何て言えばニコは満足してくれるんだろう。

何て言ったら、ニコは笑ってくれるんだろう。別にお父さんだっ
て本気で誰にも渡したくない、なんて考えてるわけでもないだろう
に。

「ニコ。二人で、空けちゃおうか、その美味しいって言うワイン」
お母さんからワイングラスを受け取り、ニコから貰ったボトルを

二本持つてもらおう。

それからニコを手招きして、いつもどおりわたしの部屋に案内した。さすがにここでニコに向けて何か言うつもりはない。

だってお母さんがいるし、お父さんだっていつ起きるか分からないし。それに、わたしがニコに向かって話す言葉を、ニコ以外に聞かれない。

「コトハ、一応言っとくけど。僕、普通に成人男性だよ?」

「うん?? 知ってるよ」

今更何を言ってるんだと思いながら、空いた手でわたしの部屋の扉を開く。

暗い部屋はぼんやりとしていて、月の光に満ちていた。満月ではないけれど、電気をつけなくても十分家具の配置は見える。

奥の方に置かれたベッド、入り口近くの勉強机。それから床に敷かれたビーズクッション。

「信用されてるんだらうけどね。ときどき不安になるよ」

呟くようにそう言われて、意味が分からずに首をかしげると『分かんないままのコトハも好き』とにっこり笑われた。

別に怒っているわけではなさそうなので、少しだけ安心する。

しかしニコの言葉の意味がやっぱりよく分からなくてどういう意味でいつているのか気になった。信用しているけど、どうしてそれが不安になるんだらう。

「コトハ。どっち空ける?」

「んー、日本産の方!」

何となく、外国産よりは身近な気がして、漢字の書かれたラベルを指差す。

ニコは穏やかな表情のまま頷いて、栓抜き(と言っていいのか?)を使ってコルクを抜いた。ポンと軽い音がして、コルクが抜ける。わたしがやったら絶対に零れるだらうと思った。力があるから、多分反動でボトルを倒してしまうだらう。

とぶんと暗闇でも十分分かる鮮やかな色合いが光を弾いて、飲ん

だこともないのに自然と目が吸い寄せられた。

何だか不思議な匂いがする。嫌いじゃないけど、けどとても不思議。

「はい、どうぞ」

差し出されたグラスを恐る恐る手にとって、ちろりと舐めるように飲む。

お酒だ。うん、お酒。

美味しいのか美味しくないのか判別しがたい、まずお酒だと分かる味。うーん、美味しい、のか？ よく分からず思わずぐくくと飲んでみる。

喉のとおりはよかったけど、やっぱり特別美味しいかと聞かれれば首を傾げるしかない。もう一口飲んでから、やっとニコにコメントを言うことができた。

「お酒、だね」

「そう？ まあ、僕はあんまり飲まないしなあ」

わたしの想像する『甘い』と微妙に違った。何だか甘いのは甘いのだが、とろりとした感じ。

何に似てる、なんていい表せるはずもなく、しばらくその複雑で名状しがたい感覚を口の中に留めていた。

その正体を探り、結局グラスを空ける。美味しい、というか不思議。

「もういいの？」

「あんまり飲むと、本当にぼんやりしちゃうから」

水を飲みたくなってしまふ。ニコには悪いが、やはりお酒とは相性が悪いらしい。

多分、飲みなれば美味しいと感じる口当たりだったので、また挑戦してみたらいいかもしれない。

とりあえず、お母さんに言って保存してもらおう。確かこの前買った『真空にする』何かがあったはずだ。

どうやらワインは酸素に触れさせたまま保存するのはよくないら

しい。全くもって詳しいことはよく分からないが、そういうものだろう。

「ニコー。口の中が甘い」

さつきは甘くないかもしれない、なんて思ったがいや甘かった。とろっとした甘さが口の中に広がって、多分残ったままなのだろう。続けて飲んでしまいたいような、もう止めてしまいたいような。どっちにも取れるその感覚に、頭に白もやがかかってきた。酔ったのかもしれない。とりあえず、気分がよくてニコに縋りついた。「美味しかった？」

「よく分かんなかった」

お酒の美味しさが完全に分かるまでには、まだまだ時間を要しそうだった。だけど不味いとも感じなくなっていて、ニコに聞いてみる。

「ニコは、飲まなかったね」

「さつきお父さんとお母さんと一緒に飲んでたからね」

この美味しいのかそうじゃないのかいまいち理解できない味を、一緒に感じてほしかったのにそんなことを言う。

何だか少し悔しくなって、彼の唇に顔を寄せた。

「コトハ？」

「さつきのワインね、こんな味」

自分が何を言っているのか、いまいち分かっていない気がする。

自分がどんな行動を取っているのか、まるで幕が一枚かかったような状態で、他人事のように分析していた。

ああ、わたし、今自分からニコにキスしようとしてるんだ、なんて。今までだったら絶対恥ずかしくて、居た堪れなかっただろうに今は全く気にならない。

ふわっとニコの唇に自分のそれを押し付ける。

ただどそれだけでは味が伝わらないということに気が付いて、眉を寄せた。どうすればいいんだろう。あ、そうか。

「口開けてー」

「コトハ、あの、本当に勘弁して。理性が焼ききれる」

「りせいは焼かれないよー」

酔ってる？ わたしは、酔ってはいないはずだ。

だって、一杯しか空けてない。いくらから見慣れないわたしだって、そんなに弱いわけではないはずなのに。なのに、ぐらぐらする。

目の前のニコがとてつもなく可愛いサンタさんに見えて、どうしてだか胸が騒いだ。

ドキドキする。体が熱い。息が上がって、自分の体じゃないみたい。

唇をほぼ引っ付けたまま、ニコをお願いしたのにニコは頑として口を開けようとはしなかった。

んーと迷って、ちろりと唇を舐めてみる。びくつと震えたニコを見て、イタズラ心が湧き上がってきた。

いつも余裕で、わたしばかり焦らせる彼が、今日ばかりはびくくりした顔でわたしを見つめている。なかなかいい眺め。

「コトハ、下に行こう。お父さんが起きてるかもしれない」

「いいよ、別に。わたしに彼氏ができたのが心配で心配で、仕方ないんだって。ニコが殴られたらどうしようって、今日わたし、そればかり考えてたんだよ。」

ニコが嫌いになっちゃって、わたしに会いに来てくれなくなったらどうしようって。わたしは、ニコの居場所知らないし、フィンランドにすぐ行けるくらい英語が堪能なわけじゃないし」

そもそも、フィンランドの公用語は英語じゃないだろうなんて今更気がついて、余計に気分が滅入った。

さっきまで気持ちよくなって、すごく明るい気分になってたのに。フィンランド語、それってどんな言葉？

「嫌いになるわけ、ないだろ……」

呟くような、絞り出すような言葉を聞いて、そうかと納得した。

まだ顔の距離は近くって、綺麗な瞳がキラキラ光ってこちらを見つめていた。あー、本当に綺麗だ。わたしの黒い目より、ずっと綺

麗。

羨ましくなって、もつと見たくて近づければ、ぐつと腰を引き寄せられてバランスを崩した。

慌てて体勢を立て直そうと、いつの間にか膝立ちになっていた足に力を入れる。だけど咄嗟のことでそれも十分にはできず、気付いたらニコに抱え込まれていた。

「煽ったの、コトハだからね！ 恐がらせないようにって、どれだけ頑張ってたか！！」

へ？ と聞き返す暇もなく、口に熱い熱が灯された。

さつきわたしがやったみたいなの、そんな幼い口付けじゃなくって、もつともつと全部を吸い取られてしまうようなキスだった。

こんなの知らないのに、どうしてか動揺はなくて、ただひたすらにニコの動きを頭の中で追っていた。

息苦しいのか、ときめきすぎて胸が痛いのか。

どちらにしろニコのせいであることは間違いない。酸素を求めて大きく口を開いたはずなのに、それを覆うようにニコに噛み付かれて吐息が漏れた。

「コトハ、甘い」

「だから言ったのに」

吐息で呟かれた言葉にそう返せば、ワインよりずっと甘いよ、と言われた。

ん？ でも、ワインが甘いからわたしの口の中が甘いってことだよね。なのにどうして、ワインより甘くなるの??

「ねえ、お願いだから、これ以上僕を翻弄しないで。もう、十分好きだから、もうこれ以上なんてないくらい好きだから。だから、コトハ」

ぐつと抱きしめられて、ニコの顔が首元にうずまった。

そのくすぐったさに身じろぎすれば、怒ったように首筋に噛み付かれる。喉の、皮が薄い部分。

日常で誰にも触られない、自分でさえもあまり触らないその部分

に、ニコの唇が、歯が、舌が、髪が当たる。

その意味を考えることなんてできずに、ただその感覚に酔った。お酒に酔ったわけじゃなくて、ニコに酔っていたのかと回らない頭でそんなことを考えていた。

「ニコ？」

「とりあえず、僕をからかった罰」

罰、で噛み付かれたの？ 笑いながらそう零し、少しだけ不機嫌そうにしているニコの頬に同じように噛み付いた。

一人でソリに乗り込み、それからその場についた。もう何なの、あの子。こっちの理性を試してんの？

「何か、ご両親に挨拶するより緊張した」

自分は日本人ではないから、もしかしたらすごく反対されるのかもしれない。

現におじいちゃんとおばあちゃんは周囲の反対を押し切るように、そしておばあちゃんにいたっては半ば家出する形で結婚したのだという。

確かにあの年齢差、国際差だとそういうこともあるかもしれない。時代はもつと昔だったし、国際結婚は稀だったのだろう。

だから『挨拶をする』というのは、とても重要な儀式だと思っていた。そこで全てが決まってしまう気さえした。コト八に、会えなくなってしまうんじゃないかとも思った。

だけど挨拶という儀式は意外に和やかに進み、ご飯もご馳走になった。お母さんのご協力があってこそその成功だろうと思う。

反対にお父さんはじつとこちらを見つめて、目の前の男が娘の彼氏として相応しいかどうか見定めているようだった。

大切な一人娘なら、当然のことだろう。

だけど重要だったのはその後で、むしろ今自分の中の記憶はそれ

だけしかなくなっていた。

彼女からキスされるといふ非常に珍しい事態が起きただけで、自分の頭の中の回路は役目を果たさなくなっていたのに、拳句唇を…

「ああああ！！ もう考えちゃ駄目なのにつ！」

びくつとルドルフが驚いた。

「ごめん、ちょっと動揺してる」

謝ってその温かい背を撫でれば、慰めるように鼻を擦り付けられる。

「とりあえず、自分がとことんのめりこんでることが分かったよ。

うん、それだけ」

本当は、それだけじゃないけれど。

「コトハ、絶対覚えてないんだろうなあ」

そんな意趣返しで、喉に緩く噛んで薄い歯型を、髪で隠れるうなじに鬱血痕を刻んでおいた。これくらいは許されるはずだ。

お父さんには見つからないように、だけど鋭いお母さんには気付かれるように。ギリギリのそこに、そつと所有印をつけて別れた。

これくらい、許してほしい。

「好きすぎて、そのうちどうにかなりそう」

もう寒くなり始めた夜空に、小さな声が一つ浮かんでゆらりと溶け込んだ。月の光さえ恨めしい、静かな夜にその声は妙に響いて、溶けたその余韻さえ掴まえておきたくなった。

その存在に酔う（後書き）

これくらいだったら、まだR15ではないと信じているのですが。正直どうなのか自分でも判断が付かないです。R13くらい??
ニコには毎度、理性を試すかのごとく何かが起こっている気がします。

ちなみに貴腐ワインの匂いや味は調べた上での想像です！ 想像ですからね！！ わたしはまだお酒が飲める年齢ではないので。あまり本気になさらないで下さい。

窓から手を（前書き）

最後まで更新したつもりでいました！
すみません。

窓から手を

何てこのない平日なのだ、と自分に言い聞かせようが目の前には父がいて、難しい顔をしていた。

学校から帰り、もうかれこれ数時間が経とうとしている。ちらりと時計に視線をやれば、案の定七時をとうに越えていた。

ため息を吐きたかったが、より一層父の機嫌を損ねそうなので止めておいた。何せ、親子喧嘩なんて生まれて初めてだ。

生まれてこの方、親に反抗しない子であったという自覚は、まあある。

反抗期というものに少しだけ入ったような記憶もあるが、そんなにひどいものではなく、むしろ何にでも反発することに疲れてすぐに止めた。親に反抗しても無駄だと悟るのが早かったのかもしれない。

……こんなことなら、あのときもっと反抗しておけばよかった。

そうすれば少なくとも、父から『どうして言うことを聞かないんだ！』なんて小学生のようなお叱りを受けることもなかったのかもしれないと思った。

遡ること数時間前。

わたしは学校から足早に帰り、服を着替えようとしていた。今日は十四日で、ニコが来るはずの日だ。今日はメールがないから、まだ着いていないのかもしれない。

そう自分に言い聞かせながら、帰路を急いでいた。もう前のように不安になることも少なくなったが、それでも気になって落ち着きもなく歩いている最中に、盛んに胸元を探った。

指輪の曲線を指で幾度もなぞって自分を落ち着かせて、それから

家に入ったのだ。

それから目に入ったのは、怖い顔をして早々に帰っている父だった。いつもはもっと遅いのに、どうしてか家にいた。……どうしてだ、と問うまでもない気がする。

父はニコが好きではないのだ。いや、嫌いと言ってもいいだろう。

「ことは、話がある」

「それ、今日じゃなきゃ駄目？」

そわそわと携帯を持って、あからさまに眉を寄せてみる。表立って父を批判することはしないが、それでも話が長引けばその分ニコと話す時間は減るのだ。

それはどうしても避けたいことだし、できればその難しい顔をして持ち出す『話』も聞きたくはない。嫌な予感と言うのは当たるものだから。

「そうだな、今日がいい」

「えっと、すごく、大事なこと？」

譲ろうとしない父に、つい『ニコが』と口に出してしまって、早々に後悔する。

もっと遠回しに断ればよかった。見る見るうちに眉を寄せ、不機嫌さを隠さなくなった父を見て思った。娘が男と会うのがそんなに嫌なのだろうか。

別に、疚しいことをしているわけでもないし、わたしにしても真剣に付き合ってるつもりなのだけれど。

一体何が不満なのだろう。

朝帰りなんてしたこともないし、遅くに家を出ることだってない。きちんと行くところは知らせているし、ニコだって絶対一人で返すようなことはしない。

母からの評価は上々なのに、どうして父は駄目なんだろう。ただの嫉妬にしたって、こんなに怒ることないと思う。

そんな不満たらたらな顔が父にも分かったら良かった。

「今日は彼氏と出かけなくていい」

「えっ?!」

思わず声が出て、眉が余計に寄せられた。

多分、鏡を見たらさぞかし不機嫌そうな顔をしているのだろう。行動を制限されるとは思っていなかったわたしは、隠しようもない不満を見せて口を開いた。

「どうしてそういうことを言われなきゃいけないの?」

両親に出したことの無い、強い口調だった。かろうじて抑えていたが、少しでも力を抜けば怒鳴りそうになっていた。

今まで、感じたことのない種類の怒りだった。理不尽さに体が震える。こんな怒り方ができるのか、と場違いにも冷静な方の自分は感じていた。

怒ったことがないとは言わない。だけど、声を荒らげて、何かに当たってしまうような怒り方はしたことがなかった。

普通に生活をしていて、そこまで激しい怒りを覚えたことなどなかった。真面目で少し融通の利かない父と、のんびりとした優しい母に育てられていれば、それも仕方のないことだと思っ

怒るときだって、理由を説明されていたし、殴られた記憶も数回しかない。

それなのに、今自分の心を占めるのはどうしようもない怒りで、その抑え方がわからなかった。

「お父さんに、そんなこと言われなきゃいけないのはどうして?」

「お前は、お父さんに言うことを聞いていけばいいんだ」

これまた今まで言われたことのない種類の怒り方だった。

明確な理由を示しもせず、具体的に悪かったことも指摘せず、ただそんなことを言うなんて。話にならなくて、父を無視して自分の部屋に入ろうとする。

しかし父はそんなこと許してくれず、腕を掴まれたまま居間に連れて行かれる。そこに母の姿はなく、父とわたしだけがいた。

母がいれば、こんなことにはならなかっただろうに。何でこんなときに限って買い物に行っているのか。

「とにかく、今日は外出禁止」

「でもニコが！」

「彼氏が来たら、お父さんが対応する」

取り付く島もない言い方だ。ついでに腕を掴まれて、そのまま自分の部屋に連れて行かれる。

もつと言えば、携帯や勉強道具の入ったカバンも没収。携帯電話がないとニコとの連絡は完全に途絶えてしまう。

せめて、ニコにこのことを言えればいいのだが、家の電話を使ううにも子機はキッチンと父と母の寝室のみだ。

「お父さん！！ 開けて！」

扉を叩くが、全くもって動かない。ここまで徹底する父に、あきれを通り越して感心した。

そこまでして、わたしをニコから引き剥がしたいの？ どうすれば父の不機嫌さは治るのだろう。

考えるのも面倒になって、茜色に染まった部屋の中で蹲った。抵抗するのも疲れる。だけどニコに会えないのはもっと嫌だ。

「もつ……」

こんなはずじゃなかった。

先月の醜態を謝って（覚えていないが、相当酔っていたらしい）、変なことをしていなかったか聞いて、それでいつもどおりに話せばいいと思っていた。

それだけだったのに、そのことが酷く難しくなっていた。

コンと軽い音がして、膝を抱えるのを止めた。

膝頭に押さえつけられるようにしていた額が少しだけ痛んだが、それが気にかかることもなく立ち上がる。小さな望みだったが、その音に期待せずにはいらなかった。

滲んだまま拭わなかった涙を無理やりふき取り、ゆっくりと立ち

上がった。

来てくれたのかもしれない、なんて自意識過剰だろうか。それを心で否定しつつ、カーテンも閉めずにいた窓へ近づく。

外はすっかり暗くて、今何時か分からなかったけれど、そんなことは関係なかった。

「コトハ」

聞き間違えるはずもない声で、慌てて窓を開く。ずっと暗闇でぼんやりしていたせいも、ニコの顔は想像以上にはっきりとしていた。暗闇になれた目が、ニコの表情をしっかりと認識させる。それがすごくありがたかった。

「ニコー」

情けない声だと思った。

震えて、裏返って、たぶん発音もきれいじゃない。それでも今出せる声で彼の名を呼んだ。

泣きそうなのどは音を少ししか出してくれず、おまけに息を吸うのさえ苦しかったけれど、名を呼ぶ以外に何をしていいか分からなかった。

「今回は大変だったね」

「う、めんね」

わたしが悪いのか、本当のところよく分からない。

分からなかったが、ニコが悪くないのは確かだった。いつも気を遣ってくれるし、優しい。わたしが嫌がることはしないし、いつもいつも勿体ないくらいの想いをくれる。

それが父に伝わらないのは、一体どうしてなんだろう。

「携帯、取り上げられちゃって……。窓から出ようとしたんだけど」
高さに目が繰らんで、どうにもできなかった。

正直にいうと、そこまで一生懸命に出て何か変わるのか疑問だった。これ以上父を怒らせるのも怖かった。

何もできなくなつて、何かをする意味を失つて、ただ膝を抱えて暗闇に沈むしかなかった。一瞬だけ、ニコは来ないかもしれないな

んて思った。

「んー。実はね、コト八からメールで今日は来ないでって書かれてたから、何かあったのかと思って」

「わたし、そんなメール送ってないよ。多分、お父さんだと思う」

「うん。だってコト八だったら、もう僕が移動始める時間だって分かってるでしょ？ 理由もなく、もう日本についてる僕を追い返すのってコト八らしくないあって」

差し出された腕にすがれば、慰めるように背を撫でられる。

苦しかった息は余計苦しくなって、痛かった頭は酸素を求めた。

嗚咽混じりの声は意味をなさないのであるうけど、それでも言わずにはいられなかったのだ。

「会いたかったの」

「うん、だから一応来てみたら、玄関にお父さんがいらっしやっつてね。コト八はいないって。どこにいたりとか、いつ帰るとか教えてくださらなかったから、一応コト八の部屋を見て帰ろうと思って」
よしよしと背を撫でられて、自分の部屋が玄関に面してなくなってよかったと、とつくづく思った。

まさかベランダのない娘の部屋に、男が上れるとは思わないだろう。父にニコの特殊な職業を話すつもりなんてなかったし、ニコも空飛ぶトナカイ云々は話していないに違いない。

つまり、玄関を守っている父にはニコが来たなんて分からないわけ……。

「電気ついてないけど、泣き声が響いてたから」

「外まで？」

すすり泣くまではいかない気がしたのだが。

「僕の耳は特別。世界中の子供たちの欲しいものが聞こえるようにね？」

冗談めかした言葉に、やっこのことで笑顔を返すことができた。ふにやりとした、多分涙にまみれた情けない笑顔だったのだろうけど、やっと笑うことができた。

「ニコ、ごめんね？ 面倒だったでしょ」

わたしだって、もし相手のお父さんがこんな感じだったら少なからず傷つくし、場合によったら付き合うのだって嫌になるかもしれない。

ニコも、そう思ってたらどうしよう。

「面倒？ どうして？」

「どうしてって」

実際に、いや会うこと自体にここまで反対されるって相当だと思う。少なくとも、わたしの周りの友人達のご両親はそんなことしない。

わたしの両親も、そんなことしないって思ってた。いや、考えたこともなかったけど。一年前のわたしは、こんなことが起こるなんて思っても見なかったから。

そっか、まだわたし、ニコと直接話して一年も経ってないんだ。

ほとんど会えないのに、どうしてこんなにニコのことが大切になっているんだろうかと今更ながら首を傾げた。分からないけど、大切だとは分かる。

ニコにされたことで嫌なことなんて一つもないし、いつもいつも嬉しいだけだ。嬉しくて、少し決まりが悪くて、でも不快なわけはなくて。

この一年で、たくさんを知った。どの一年より充実した一年だったと胸を張って言えるくらい、今年はいろんなことがあった。自分が成長したとも思った。

恋をするって、時間が早く流れるイメージだけどそんなことはなかった。とても長くて、もうずっとニコと毎月会っているように錯覚する。

ずっと、好きだったような気がする。

「コト八のお父さんが、どれだけコト八のことを大切にしているかってだけでしょ？ どこが面倒なの？」

「こっやって、ごく当たり前のように言ってくれるニコが好き。」

実の娘のわたしでさえ困る行動を、そんなふうに見てくれるニコがすごいと思う。

ニコはとても温かくて、優しいのだ。だからなのは分からないけど、同じように大切にしたいと思わせるのだ。

……大切にしてくれるから、じゃなくて。もっと根本的に。もっと、深いところでそう思う。

「今日は、帰るよ」

「えっ」

「だって、お父さんが来るなって言ってるのに、無理やりコト八に会ってるわけだし」

信用されるような行動したいんだけど、どうしてもコト八が泣いてるって知ったらね、とニコは小さく笑った。

まるで自分の行動が悪いと思っていないような、だけどころとだけ後ろめたい気持ちも見え隠れしている。

「本当は今日、ムービーデーだったから映画見ようかと思ったんだけど」

また来るよ。お父さんに娘を任せて大丈夫だって思われるように、頑張るから。

そんなことを、ごく自然に言ってくれるニコを見ると、反抗したかった気持ちも怒りもすべて風いでいくから不思議だ。

ニコには、わたしの心を操作するコツが分かっているらしい。ほんの少しの言葉で、こんなにもわたしを安心させてくれる。

じゃあ、わたしは……？ わたしは、ニコにそんな安心を与えてあげられるだろうか。

「じゃあね、コト八」

するつと頬を撫でる手が離れる。ニコの手が、わたしから離れる。どうしてか、その手を逃がしてはいけない気がして、身を乗り出してニコの手を掴もうとする。掴もうとして、窓の棧に手をかけようとしたのに、暗闇で見当を誤って体が前のめりに倒れた。

今まで一度としてしなかつた失敗を、よりのもよってニコの前で

やった。

ふつと体が浮く感覚がある。あつと思つ間もなく、視界が切り替わり地面が見えて背筋が冷えた。

「っ」

聞きなれない、多分ニコの国の言葉で何かを叫ばれた。

わたしにはそれが何を意味する言葉か全く分からなかったけれど、わたしの行動が彼を酷く動揺させたことは分かった。

気付けば、ニコがわたしの体を支えていて、わずかに浮き上がった体はしっかりと固定されている。ほつと息を吐いたのも束の間、次の瞬間には痛いくらいの力で肩を掴まれた。

「このっ、馬鹿!!」

びくつと大きな声に肩を震わせて、今まで見たこともないくらい怒っているニコの顔を見た。

いつもは穏やかに細められている目は大きくなっていて、それでいて少しだけ光っていた。口はぎゅつと引き結ばれ、両端が下がっているのを見ると、自然に肩が強張っていく。

「ごめん、びっくりさせた……」

呆然と、こちらの心臓が静まる前に言う。

自分もびっくりしていたが、夜目にもはつきりと分かるくらい血の気をなくしたニコの顔を見ていると、早く言わなければいけない気がした。

しかし言ったところでニコの顔色が戻ることはなく、より一層きつく口を引き結ぶだけだった。そんなにびっくりさせただろうかと、肩におかれた手を握る。

「ニコ？」

「うん、ごめん。大きな声出したね」

ぐつと力を入れられて肩が痛かったが、それでも努めて穏やかな声を出そうとしてくれているのが分かって何も言えなくなる。

元はといえわたしが悪いので、文句を言える立場にないこともよく分かっていた。

「二階だけど、怪我はするんだよ」

「うん」

静かに、本当に静かにいい聞かされた。

その声はとても穏やかで、口調だつてとても優しかったけれど、
だけでもとても怒っているように聞こえた。

今まで一度としてそんな話し方していなかったから、とてもよく
分かった。今、ニコがどれだけ頑張つてこうやって話しているか。

「打ち所が悪かったら」

くつと息がつまる音がする。辛そうに歪められた顔は一瞬で消え、
代わりに強いくらい引き寄せられた。

腰に窓の棧が当たつて少し痛かったけれど、それを言う気にはな
れなかった。ただ痛いくらいの抱擁は、ニコの不安を示しているよ
うで何だか不思議だつた。

落ちそうになつたことが、そんなに心配だつたんだろうか。気付
けばニコの体は小さく震えていて、その体を抱きしめ返すだけでは
どうにもならなかった。

「コトハの、馬鹿っ」

「うん」

小さい声だつた。

穏やかな声も、口調もかなぐり捨てたその声は、弱くて細くてど
うしようもないくらい震えていた。初めて見た、彼の弱さだつた。

「もう、本当に怖かつた。ルドルフいなくなつたら、どうするつもり
だつたの」

そういえば、と彼の足元を見ると、きちんとそりに乗ってい
て、ついでにトナカイさんとも目が合う。

優しい瞳は何を思つてこちらを見ているのか分からなかったが、
人間の心が読めるのかとても静かな目をしていた。

「不安、なんだ。とても」

耳元で囁かれた言葉は、いつもより幼かつた。

「会う時間も少ないし、電話する時間だつて限られてる。コトハの

周りには同じ年頃で、同じ言葉を話して、同じ景色を見て育ってきた人たちがいる。

きつと、その人たちだったらお父さんも反対しないんだろうなってぎゅっと抱きしめられて、今までにない不安を聞かされて、そうやってからようやくわたしは気付くんだ。ニコも不安なことがあるんだと。自分だけじゃないんだと。

不謹慎だけど、それが少しだけわたしに安心をもたらしただ。不安を持っていくニコからしたら、堪ったものじゃないんだらうけど、それでもちよつとだけ、嬉しかった。

「去年の今頃は、気になる女の子だった。話を、してみたいと思っただけだった。だけど、今は」

たった一年しか経ってないのに、今は。

「離したくなくなるくらい、コトハが好きなんだ。考えてもどうしようもないことで不安になって、コトハのせいじゃないことで心が揺れて、自分ひとりで悩んでる」

落ちかけた体を支えている、彼の体は熱かった。触ったらこちらが溶けてしまうような熱を孕んでいて、不快ではないけれどほんの少しだけ怖かった。

いつものニコじゃない。でも嫌ではない。だけど慣れないから尻込みして、彼の背中に回す手はどこまでもぎこちなくなってしまう。そのとき、扉の向こうで音がして、それから遠慮がちにコンコンとノックされる。

相手なんてもう分かっていて、返事をする気にもなれなかった。それでも、無視するわけにはいかないからそろそろニコから離れる。

ニコの手が、先ほどわたしがしたように、わたしを引きとめようとした。空を切る手を思わず掴んで、それから安心させるように微笑む。

ニコがわたしにしてくれたように、ちゃんと笑えてるかな？

いつも安心をくれるニコみたいに、できてるかな？

「大丈夫。わたし、この一年で少しだけ、強くなったから」

「え？」

「ニコの、おかげだから」

誰かを大切にしたいなんて、心の底から強く願うことはなかった。ただ漠然とした恋愛が『いいものなんだろうなあ』とあやふやな印象を抱いていた。

父と母が笑えばいいと、反抗など考えもしなかった。

一年前のわたしは、そうだったんだ。それなのに、今はもうそうじゃない。

ニコを大切にしたいと思う。誰にもあげたくない。どこにも行かせたくない。傍にいたい。

自分の中にそんな強い感情が生まれるなんて思わなかったけれど、その思いは自分の中に確かにあるんだ。

わたしは、変わってたんだ。

恋で、変わったんじゃない。

ニコで、変わったんだ。ニコに会ったその日から、少しずつ見えないくらいのスピードで、わたしは成長してたんだ。

今はそれが、大きくなってただけなんだ。一年間で育った想いは、自分が思うよりずっと大きくて自分の中に根を張っていた。

多分、お父さんが想像するよりずっと大きい。

「ニコ。今、決めたよ」

息を吸い込む。扉に手をかけて、一気に開け放った。目の前にはびっくりした顔のお父さんがいて、それからそのすぐ隣に笑顔のお母さんがいた。

「わたし、ニコと結婚するから!!」

一気に言い切って、それからニコに向かって笑った。吹っ切れたというか、勝手をやってしまったというか。

「じ、ことは!!」

「するつもり、だから!!」

言い切って、ニコに容赦なく飛びついた。ニコは完全に固まって

いて、わたしを抱きとめるので精一杯だったらしい。

強くなつたでしょう？　というように笑うと、苦く笑い返された。『まいったよ』なんて笑いながら、ニコはわたしの両親に頭を下げた。

さらさらと揺れる髪に一瞬目を奪われた。

言葉はない。ないけど、お父さんには伝わったらしく、足音も高く去って行った。

二人の間にどんな無言のうちの会話があつたのかは分からないが、お母さんはニコニコと笑っているし、ニコも笑顔になっていた。

「えっと、コトハ。本気??」

「本気じゃないように見えた?」

質問を質問で返されることは嫌いだつたけど、今日くらいはいいのではないだろうかと思ってしまう。ニコの笑顔を見ているとそう思ってしまった、笑うことが止められなかった。

心の中が驚くくらいすつきりとしていて、大声で叫んでしまいそうになる。一昨年のクリスマスで叫んだときの思いとは全く違うけれど、やることは結局同じなのかもしれない。

あの行動は今でもすごく恥ずかしいし、できるなら忘れてしまいたいけれど。それでももう一度選べと言われたら、わたしは叫んでしまうのだろう。

でなければニコに出会えないから。その次の年、彼がわたしに会いに来ることなんてなくなってしまうから。だから、いいのだろうと思つた。

ああしたことが、正解なんだ。

「わたし、サンタクローズのお嫁さんになりたいです。駄目、かな?」

精一杯の言葉に、彼はどうやって答えてくれるだろう。未だにトナカイの引くそりに乗っていて、空に浮いているのにお母さんは何も言わない。

今更その不思議さに首を傾げるが、それさえもどうでもよくなっ

ていて、ただニコの返事を待っていた。断られるなんて、思ってもいないけど。

自意識過剰だけど、それでも嫌だと言われるわけがないと信じていた。それくらい、わたしは彼を信じられるようになっていたんだ。一年、他の恋人達よりずっと少ない時間しか一緒にいないけど。「あー、もうっ。どうしてそんなに可愛いのに。攫って帰りたくなっちゃっ」

ぎゅぎゅと抱きしめられて、わたしは笑って彼の背中に手を回した。多分母の目も忘れていて、後ですごく恥ずかしくなるんだろうとは分かってるけど。

「離したくないっ。帰りたくないー。でも、仕事あるから帰らなきゃ」

「……そっか、クリスマスが一月後だもんね」

この季節、サンタさんは忙しさに決まっている。そうだ。今年はまだ、クリスマスに会えないのか。

初仕事は去年終わったし、今年は二年目になるわけだし。それは少し寂しかったが、彼が一人前になるのかと思うと何だか嬉しくなった。

クリスマスに会えないのは寂しいけれど、でもわたしは別にサンタさんであるニコが好きじゃなくって、ニコ本人が好きなのだから、あまり気にしないことにした。

クリスマスが終わったら、会えるかな。プレゼント渡しても大丈夫かな。

一カ月後だけど、考えれば考えるだけ楽しみになっていて、早く来ればいいのに、と思った。

「クリスマスに、来てもいい？ あ、もちろんご両親との間では邪魔しないから！」

「忙しい、よね？」

寂しいなんて口に出してないのに、ニコはそんなことを言って首を傾げた。

どこまでもわたしのことを考えてくれる彼は優しいなあと思いつながら、忙しい中無理をしなくてもいいのに、と思ってしまう。

「初めてコトハを見たのが、クリスマスだから。初めて話したのが、クリスマスだから。……だから、特別な日、なんだよ。僕にとって、どの日よりも大切なんだ。来ても、いい？」

その言葉に、返事なんて口に出せなくて。

ただわたしもだということ伝えてたくて抱きしめた手に力を入れた。早くクリスマスが来ればいい。一生のうちで、多分一番強く願った。

あと何年生きたって、何年楽しみにしたって、この瞬間の気持ちには負けると思った。

早く、時が経てばいいのに。

窓から手を（後書き）

中途半端にきつた拳句、二週間以上放置とか……。申し訳なさ過ぎて。更新したつもりでいました。

来月は25日に更新できればいいです。

聖なる夜に（前書き）

欲しいプレゼントって何???

聖なる夜に

寝る前に枕元へ靴下を一つ。目が覚めるとそこにはプレゼントが入っている。そんなことを夢見ていた時期は案外長かった気がする。それほど両親が頑張っていたのだろうと今更思いながら、はたと思い当たる。

じゃあ、ニコはどこにプレゼントを届けているんだろうって。それともあれは、本当にサンタさんからの贈り物だったんだろうか。「サンタさん、ね」

小さな独り言は温度の低い空気に溶けてしまう。暗い部屋でたった一人、誰にともしに呟いたつもりだったが、自分は確かに『彼』へ返事を求めていた。

「早く来ないかなあ」
気にならないふりは止めて、大人しく今思っていることを口に出した。

現在二十四日の十時。よい子は寝ている時間だろうか、いやまだ起きてても不思議じゃない。ということは、ニコの仕事はできないわけ。

しかも、どこまでの範囲をどれくらいの時間配り歩いているのかわからないから、いつ来るのかは全く分からない。
でも彼が来るというから、待ってる。

少し前だったら、来ないかもしれないなんて不安になってた。だけど今は不思議と彼を疑う気にもなれなかった。彼が来るというのなら、絶対に来る。不思議なくらい安心していて、自分の心が凩いでいるのが分かった。

一体何がきっかけなのだろうと悩む暇もなく、一ヶ月以上前に自分で起こしたことが原因だろうと察しがついた。

あそこまで言われれば、自意識過剰でも何でもなく、彼を信じるだろう。

今日は世の中が一段と浮き足立つ日。日本は特に宗教的なイメージが薄く、イベントとしての色が強いせいか、どこもかしこも皆楽しそうだった。

それでもここ数日の寒波のせいか、外は驚くほど寒く、彼には悪いが窓を開けて待つのを早々に断念していた。

部屋を冷やして彼を待つのも嫌だから、いつ彼が来てもいいように部屋を温めておく。

それに手や顔を冷やしていたら、彼から何と言われるか分かったものじゃない。いつも穏やかな彼が怒ると怖いというのは体験済みだし、何より泣きそうになっている彼を見るのは嫌だ。

だから大人しく暖かい部屋で彼を待つていた。せめて体を冷やした彼が入ってきて、ほっとするような場所になっていればいいと思う。

「雪、降りそうだし」

雪の降る機会が少ないこの地方では、クリスマスイブに雪が降るなんてとても珍しいし、何だかとても素敵だと思う。

と、言うより単純に雪が降るといのがとても嬉しい。去年までならそうだったのだが、どうもサンタクロースさんを恋人に持つと違うらしい。

なるべく暖かくなればいいと思ってしまふのだ。雪なんて持つての他。ニコが風邪を引かないように、ひたすら祈るだけだ。

ベッドの上で彼からもらった参考書を開きながらそんなことを考える。

去年もらった、結局ほとんど開いた形跡のないそれは、今では宝物になっている。肝心なところで抜けている彼がした、最大な失敗だと思った。

これから何度となく配るプレゼントの中で、彼の唯一の汚点になつてしまふのだろうかと思つて、表紙を撫でた。

きつとこれを選ぶとき、彼はとても迷ったんだろうな、なんて自惚れ以外の何ものでもない考えが浮かぶ。

本屋さんで何時間も歩き回って、中を開いて、あの明るい色の髪の毛を揺らしながら迷ったのだろう。

整った眉を寄せて、口を引き結んで、ああでもないこうでもないと言いなから、店員さんに眉を顰められつつ迷ったのだろう。

それを考えるとどうしようもなく幸せになっってしまう。

彼には悪いが、想像するだけで気持ちが悪いほどにやけてしまうのだ。重症だ。ニコが思うより、わたしはずっとニコのことが好きなんだから。

「だから早く来て、サンタさん」

枕元においた靴下は冗談半分、本気半分。

一体彼がどんな顔をするんだろうかと思いつながら、布団に下半身を入れた。いくら部屋を温めているとはいっても、この温度は少し辛い。

どうせあとに時間は絶対に来ないのだからとタカをくくり、枕に背を預けて参考書を捲り始めた。

えてしてこの手のものは睡魔を呼び起こすと長い経験で分かっているにも拘らず。そしてわたしがその魔力に限りなく無抵抗であると知っているにも拘らず。

意識がふわりと浮かんだとき、部屋は何故か暗くなっていた。

それなのに部屋は暖かいままで、まさかストーブをつけたまま寝てしまったのかと焦って飛び起きる。それと同時に髪の毛から離れた手が目の前を通り、次の瞬間勢いよくその方向を向いた。

「ニコー！」

「おはよう、コト八。気持ちよさそうに寝てたね」

どうやらいつの間にか眠っていたらしい。手の中にあつた参考書は枕元にきちんとおかれており、ストーブは一番緩い設定に切り替

わっていた。

日本式の電気器具も使いこなせるとは、ニコは本当に外国に住んでいるのだろうか。実は日本に住んでいるんじゃないかと疑ってしまいたくなる。

何より、仕事が終わったにも拘らず、わたしを起こさなかったなんて酷すぎる、と寝ていた自分は高い棚の上において彼の名を呼ぶ声に非難の色を乗せた。

「起こしてくれたらよかったのに。寝顔、見られたくない」

「可愛かったよ？」

そういう問題じゃないんだよ、と言いつ聞きかたせよと、ニコがそれを聞かないことはよく分かっていた。

のらりくらりとかわされて、結局次の機会も起こされないのだからと簡単に予想される。

いそいそとベッドから起き上がり、彼のほうを向くと、眠かった？ と髪を梳かれながら問われた。

違う、と寝ていたにも否定する気満々だったが、彼の緩やかな問いに嘘をつく気にもなれなくて、ただなすがままに頷いた。

髪の毛を梳かれると、余計素直になってしまう。

「参考書見返したら、眠くなっちゃって」

「……これ、ね。役に立たないものあげちゃったなあって思うよ」

未熟すぎて、今思い出しても恥ずかしい、と寒さのせいだけではないだろう頬を紅くさせた。雪のように、と例えたくなくなってしまふ彼の肌は赤がとても目立って、照れているのがよく分かる。

それが可愛くて、ついついそのヒンヤリと冷たい頬に手を伸ばした。

ついで去年同様白く染め上げられている髪を見る。太陽の光を映したような明るさはないが、白い髪は手の中でしんなりと馴染んだ。それでも冷たいことには変わりなくって、自分の手の体温が移ればいいのに、と思いつながら彼の髪を梳いた。

慣れないながら、彼がいつもわたしにしてくれているのを思い出

しつつ、ゆっくりと指の間でさらさらとした髪の毛の感触を楽しむ。
「サンタさんの衣装、今年は去年より様になってるね」

「そう？ サイズ合わせたり、中に入れる綿とか調整したんだ！
なるべく本物っぽくなるように。……いや、今年から本物なんだけ
どさ」

気まずそうに付け加えられたその言葉に、くすりと笑ってしまう。
本人は大真面目だけど、実際全然本物っぽくない。整っている顔
立ちはどう見てもイケメンさんだし、若いし、蒼い瞳は確かにイメ
ージどおりだけどどこか甘い。

恰幅はよくなって、どちらかといえれば背が高くてスタイルがいい。
赤い服を着たつて、サンタというよりは期間限定のバイトさんだ。
本物というには少し若すぎ、かっこよすぎ。つて、これは惚れた
弱みだからそう思っちゃうのかな。

「確かに、綿入れても恰幅はよくなさそう」

「あ、コトハ！ 今笑ってるでしょ。僕としては深刻な問題なんだ
からね！」

ちよつと機嫌を損ねたような声を出す彼に、ごめんごめんと謝っ
て労うようにまた頭を撫でた。

暖かい部屋のせいかわたしの手のせい、ひんやりと冷たかつ
た髪の毛は少し温かくなっていた。

染めても痛んだ様子のないそれはとても気持ちよくなって、ついつ
い細くて指どおりのよいそれを撫で続けてしまふ。多分、わたしの
より気持ちいい。

「おじいちゃんみたいに上手くなれないんだって」

「でもおじい様も最初から上手かったわけじゃないんでしょ？」

慰めるつもりで聞いてみて、頷かれる。ならばそんなに悲観する
ほどでもないじゃないか。

そのうち上手くなるんだろうし、恰幅だつてよくなるのかな
あ。ちよつと想像できないけど。そのうち髪も白くなって、髭だつ
て付け髭つけなくてよくなって、赤い衣装がよく似合うようになって

て。『ホーホーホー』って笑っても違和感なくって。

そう思うと、何だか可愛らしく思えてまた笑った。笑っちゃいけないんだろうけど、すごく見たいなって思った。

今の姿からは全然と言っているほど想像できないけど、だけどその姿を近くで見れたらいいと思う。

「ニコが様になっていくの、見たいなあ」

「何言ってるの」

赤い服を着たニコが急に真剣な顔をした。びっくりして目を丸くするこちらとは裏腹に、彼は酷く真剣な目をしていて。わたしが笑って考えていたことに対して、何を考えたのか。

「サンタさんのお嫁さんになりたいんでしょ？ なら、僕がそれっぽくなるまで見守って！ それで、僕の体型に合うような赤いサンタクロースの服作って。」

おばあちゃんがおじいちゃんに作るみたいに、毎年少しずつ直して、そうやって傍にいて。髪が白くなって、髭が立派に生えて、恰幅がよくなって。

素敵じゃなくなるかもしれないけど、そうやって年を取る僕の傍にずっといて。それで毎年、遅く帰ってくる僕を待っていて「

一気にそう言うてから、彼は赤い顔を隠すようにこちらを抱きしめた。こちらと同じような顔をしているに違いないので、ありがたく彼の背に手を回す。

彼の肩に顎を乗せ、まだ少し冷たさの残る頬に頭を寄せた。ふわっと吐かれた息は温かくて、何だかそれだけで幸せになれる気がした。

これがあれば生きていける、なんて甘い考えが浮かんだ。

「ニコがそうなる前に、わたしが恰幅よくなっちゃうかもよ？」

「いいよ」

「ニコより早く、髪の毛白くなっちゃうかも」

「そんなの関係ない」

「裁縫なんてできないけど」

「文明の利器をたくさん使おうか」

「ずっと見てたいなあ」

「うん」

短い言葉を、幾度も幾度も繰り返した。意味のない問答を何度も繰り返して、互いに意味の見出せない言葉を吐き出す。

ただ幸せだと思いつながら、相手の顔を見ずに話を続けた。照れているのか、泣きそうなのか。分からないくらい声が震えた。

幸せだからか。だからこんなに、胸が一杯で何も考えられなくなってしまうのか。だから目の前の彼が、こんなに愛しく思えるのか。もうどうにでもなれと思うくらい、何もかもが輝いて見えた。

「毎年、こんなふうに寝ちゃってるかもね」

「部屋を暖かくして？」

「だって寒いよりいいでしょ？」

「部屋に入ったとき、暖かくてほっとしたよ。とても幸せだなあって思った」

ぎゅっと手に力を入れられたと感じた。距離が一層近くなって、彼の体温を感じれる。わたしの体温も、伝わっているんだろうか。伝わってあげたいのに。

そうしたらもっと、ほっとしてくれるかもしれないのに。

「コトハ。サンタさんからのプレゼント、何がいい？」

「サンタさんがくれるの？」

「恋人特典で、何でも聞くよ」

欲しいものなんて、改めて聞かれると何もなくて。でも『何もいらない』なんてこと、少し勿体無くて口に出せなかった。

プレゼントする彼の仕事を奪いたくない。だから何か欲しいものはないかと頭を働かせて、それからふと思いつくことがあった。

わたしがさつきまでずっと考えてたこと、何でも聞くというなら。

「暖かい、クリスマスイブが欲しい」

「え？」

「雪の降らないクリスマスイブの夜が欲しい」

ホワイトクリスマスなんて、いらぬ。雪の降る夜なんていらぬ。彼が寒い思いをする夜は必要ない。

ただプレゼントが配りやすい、暖かい夜がいい。雪で足を滑らせないように、プレゼントをおきやすいように。

「ホワイトクリスマスじゃなくて？」

「うん、サンタさんが風邪を引かない夜がいいな」

そう言っただけで、何故だか彼から返事がなくなった。ただきゅつと肩口に顔を埋められて、痛いくらいの力で引き寄せられた。

乱暴な手で押さえつけられ、何もできなくなってしまう。

「それ、コトハの得になんないよ」

「そんなことないよ」

「だって、僕が嬉しいだけだもん」

僕、サンタクロースなんだからね。コトハが喜ぶことがしたいんだからね。僕の喜ぶことしたって、意味ないんだからね。

繰り返される言葉が濡れているように感じて、埋められた頭を撫でた。痛いくらいに何もかもが満たされていて、こんなに一杯一杯で自分は大丈夫なのかと考えた。

零れて、落ちて、どこかに行ってるんじゃないかと思ってしまふ。勿体無いな、と思いつつ、それでも溢れている状態をどうにもできない。

「他には、ないの？」

「他？ ー、サンタさん衣装の作り方本とか？」

「もー」

呆れたような声で、それでも嬉しそうに言われた。

「靴下！」

「え？」

「靴下の中見て！！ クリスマスプレゼントじゃないけど、コトハが欲しいものじゃないかもしれないけど、僕からの贈り物」

首を巡らせば、枕元の靴下は少しだけ膨らんでいた。こちらに聞いたけど、実は彼なりに考えていてくれたらしい。

さすがサンタさんと言ったところか。彼が選んでくれたものに失敗などただの一度もない（参考書だって、今ではお気に入りの代物であるし）ので、安心して手を伸ばすことができる。

いつももらってばかりだけど、今日はわたしなりに用意したのもあるし、それに彼はわたしが笑うと喜ぶと知っているので前のように負担には思わない。

彼に抱きしめられたまま、もたもたと靴下に手を伸ばしているとわたしより取りやすい位置にいた彼が焦れて先に手を伸ばした。

すとん、と抱きしめられた腕が離れ、彼が靴下から小さな箱を一つ出す。それからわたしの顔を見ることなく跪き、ベッドに腰掛けるわたしを見上げた。

暗闇の中でも分かるくらい、彼の瞳は鮮やかで綺麗だ。

わたしが恋した人は、わたしを大切だと言ってくれた人は、こんなに澄んだ瞳を持っていたのかと改めて気付かされる。

「コトハ。一生、どんなことから君を守ります。どんな困難も、どんな悲しみも、君に降りかからないように一生努力し続けます。

ずっと、何があっても、君から離れることはない。今と同じ気持ちで、それ以上で、君を愛することを誓います。

だから、結婚してください」

いつものわたしだったら、笑い飛ばしていたかもしれない。いや、日本人がしたら絶対に爆笑するところだろう。

それなのに、ニコが言う何にも言葉は出てこなくて、びっくりして、改めて言われるとは思わなくてただただ目を見開くことしかできなかった。

靴下から出てきた箱を開けられても、中に指輪が入ってても、何も言えなかった。

嬉しいとか、幸せとか、そんなものを感じる余裕もないくらい何故だか呆然とした。真剣な瞳に返事をしなくてはと思うのに、どうしても何も言うことができなかった。

暖かくなる胸が、確かに嬉しいと証明してるのに。

「コト八」

優しく呼ばれて、息をしようと口を開く。わたしに必要なのはただ一言、たった一言肯定の言葉を出せばいい。

そうすれば彼は笑うだろうし、わたしも笑えるようになる。それなのに何も出てこずに、ただ焦った。早く、言わなきゃ。

「コト八。泣かなくていいから」

彼に言われて、目をしばたく。それと同時に頬が濡れているのを感じて、息を吸う代わりに嗚咽が漏れた。

自分でも予想しなかった涙で、何故泣いているのかさえ定かではなくなる。これが悲しい涙でないことは相手も分かっているのか、眉を顰められながらも涙を拭う手は優しかった。

ああ、返事をしたい。

わたし、この人の手を取りたい。

それこそ、彼が髭が生えて、恰幅がよくなって、髪の毛が真っ白になるくらいまで一緒にいたい。

一年に一回、太ったねなんて言いながら採寸して、赤い服に手を入れたい。寒い外から帰ってきた彼を抱きしめて、『おかえりなさい』って言いたい。

ずっと、傍にいたい。

一ヶ月に一回なんかじゃ、少ない。

泣いてばかりのわたしが、困らせてばかりのわたしが、こんなこと言っても説得力ないけど。でも、強くなって彼と一緒に歩きたい。ずっとずっと、隣にいたい。太陽の光を集める髪が白くなるまで。わたしの黒髪が白くなるまで。

「ニコと、一緒に生きたい。ずっと、隣にいたい。だから、お受けしますっ」

涙で濡れた声で答えるのが嫌で、息を止めた。泣くな、泣くなと言いつつ聞きながら、深呼吸を繰り返した。

その結果出た言葉は、やはり涙で濡れていて情けなかった。へ口へ口の声で、みっともなく、全然説得力がなかった。それでも二

コはにつこりと笑って、わたしを引き寄せてくれる。

赤い衣装が涙で濡れて、色を変えていくのをぼんやりと見つめた。聖なる夜は、皆が幸せになれるときなのかもしれない。だけど、今日はわたしが一番だ。他の誰が幸せだと言っても、わたしに勝る人なんてこの世にいない。

絶対に、わたしが一番だ。そう思って、彼の胸に頬を寄せた。

「指輪、嵌めていい？」

「ん」

短い返事を返すと、彼は跪いていた体勢を止めて、ベッドの隣に腰掛けた。それをじっと見つめていると、左手を取られて、迷わず薬指に嵌められた。

冷たい金属の感触がするすると指をすべり、寸分の狂いもなく薬指に嵌って止まった。きついわけではないのに、落ちる気はしない。落ち着かないその感覚に、手を握ったり開いたりを繰り返した。

この感触は少し気恥ずかしくて、何だか慣れない。

これに慣れる日が来るのだろうか。

「うん、よく似合うね」

その一言と共に、指輪へキスが一つ落とされる。それから顔を上げて、今度はこちらの頬にキスを一つずつ。左右に軽く落とされた。くすぐったくて身をよじっても、彼に逃がす気はないらしく難なく押さえつけられて目頭や額に唇を押し付けられた。

まるで遠慮のないそのやり方に、彼が今まで自分を押さえていたのだと知る。

可愛らしいと感じる間もなく、自分の体がふわりと浮き、何故かベッドに倒された。きよとんと彼の顔を見上げれば、少しだけ難しい顔をされる。

どうしたのだろうかとかと頬に手を伸ばせば、反対に掴まって手の平に唇を押し付けられた。手の平にほんのりと湿った感覚が広がる。

途端、どうしてか顔が火照ってきて、彼の手から自らの手首を抜こうとした。

「二、ニコ？」

「ん？」

「な、に？」

親指の付け根を緩く噛む彼に問いかければ、伏せ目がちでわたしの手の平に口付けていた彼と目が合う。その目はいつもと違って、酷く扇情的だと思った。

背筋からわき腹から腰から、体の奥から震えを感じてしまう。

「コトハは、僕のものだよな」

緩く笑われた彼は、赤い色のサンタ服が全く似合わない。その熱い瞳と、手が、サンタさんなわけがないと思ってしまう。

それでも彼はニコだと言う他なくて、黙っていると今度は手首をきつく吸われた。

「この前言ったやつ教えてあげる。クリスマスプディングの中に銀の指輪が入ってた人は、一年以内に結婚するんだよ。でも一年なんて長いから、クリスマスプディングに入れるの止めちゃった」

くすくすと笑いながら、ニコは袖を捲り上げて肘の内側にも唇を寄せた。手首より彼の唇の感触がはつきりと伝わって、なんだかどきりとしてしまう。

柔らかくて、熱くて、変な感覚。

「ねえ、コトハ。すごく今更だけど、僕も一応男だからね。安心しただら、食べられちゃうかもよ？」

そんなことを言われて、初めて気がついた。彼は好きな人以前に、男の人なんだと。

当然なんだけど、今まで深く考えてなかったことに今更気がついた。そっか、結婚するってキスよりもっと深く繋がることなんだ。想像できないけど。

「好きな子にこういうことって普通にしたいと思うし、今までだって結構我慢してたつもりなんだけど」

「そっなの？」

「そっだよ。だってコトハ、びっくりしたら固まっちゃうでしょ？」

苦く笑われて、否定できない自分が悔しい。想像もせずに結婚するなんて言ってしまった自分が情けないような恥ずかしいような。それでも撤回する気は全くと言っていいほどないんだけど。けど、もう少し色んなことを考えてもいいだろうに、と黙ってしまっているのも事実で。

またニコとわたしの違いを知った。

「えっと、それで……ニコは」

「今日はしないよ？ え、してよかったの？」

「ちがっ」

「だろっね。だから今日は、君に危機感を植え付けようと思って。無邪気に素肌晒してたら危ないよって」

ちくり、と痛みを覚えて二の腕に目をやる。

暗闇でよく見えないが、噛まれたか何かしたのでだろう。じんわりとした痛みとも言えないような感覚が広がった。

不快じゃないはずんだけど、でも他に言いようがなくて首を傾げる。

「危機感、抱かないと思うよ」

「どうして？」

「ニコは、危険じゃないから」

ニコはそうだ。絶対に危険じゃないと思う。たとえばわたしが泣けば、彼は絶対に止めるし無理やり何かをすることなんてありえない。

そんなこと、やったあとに彼が後悔するだけだ。きっととても悲しい顔をするに決まっている。

「でも、衝動的に襲っちゃうかもよ。だって、この前コトハが酔っちゃったときに、キスマークつけたもん」

「ええっ!？」

知らない事実を口に出されて、思わず痛みの走った二の腕に手を当てた。ど、どこにつけたんだろう。

「うなじ」

ぱつと二の腕を掴んでいた手を離し、両手で首を持った。何てと
ころにつけてくれたんだ。

わたしはそれに気付かず普通に髪を上げたし、多分授業中はくく
っていた。まさか誰かにばれてたりしたんだらうか。

「コト八が泣いて抵抗したら正気に戻るかもしれないけど、口でイ
ヤだつて言つても止まらないよ、多分」

ニコがちょっとだけ悲しそうに目を伏せた。それから肩まで上が
っていた服の裾を直し、ぎゅっと抱きしめてくる。

その暖かさはやっぱり安心できるもので、どう考えてもわたしに
害を及ぼすものではないと思つてしまふ。

「どうしても我慢できなくなつたら」

「うん」

何と言つていいか分からず、ただ言葉を紡ぐ。多分、深くものを
考えないわたしは、彼を苦しめるような言葉しか言わないだろう。

これから言う言葉も、彼の救いになりはしないだろう。だけど、
言いたいことはわたしにもある。

「ニコの好きにしてい……むぐ」

「ストップ！ 絶対言つちや駄目！！ 僕帰れなくなるから！」

わたしの言葉は最後まで彼の耳に届かなかつた。両手で思いつき
り口を塞がれて、彼の指の隙間から変な音が漏れる。

わたしの言葉に被さるように出された彼の声は焦つていて、落ち
着いた様子など欠片もなかった。暗がりでもはつきりと分かるくら
いの赤さで、わたしはベッドで横になつたまま彼の赤い頬に手を伸
ばした。

触れた頬は、いつもよりずっと熱がこもっていて、わたしのもの
よりずっと熱い気がした。わたしだつて、今十分熱いはずなのに。

「あのね、男は野獣だと思つてもいいくらいだよ！ 特に僕なんて、
羊の群れを目の前にした狼も同然なんだつて！ 自分でも引いちや
うくらいだから……！」

そんなことを言つて、彼は隣においてあつたらしいサンタの帽子

を頭から被った。ぐつとつばの部分を下げて、彼の赤い顔を見えなくする。

それは勿体無いようにも思えて、そつとそこに手を伸ばす。口を塞いでいたはずの手はいつの間になくなっていて、ちよつとだけ寂しく思った。

「別に、嫌がらないよ？ いや、怖くは思うけど」

「知ってるよ。知ってるから、絶対に嫌なの。コトハが嫌がらないって分かってて、それに付けこむような真似したくないの。……キスマーク残しという台詞じゃないのはよく分かってるけど」

ベッドから起き上がり、冷たい床に降りて膝を抱えるニコに近づく。ニコはわたしの気配を察したのか、サンタ帽をより一層下げて耳元まですっぽりと覆い隠した。

ここからでは彼の表情は一切見えない。何とか彼の顔をこちらに向けたくて、わたしは勉強机の上においてあった包みを手に取った。サンタさんへの、プレゼント。

「ニコ。クリスマスのプレゼント」

「プロポーズ受け入れられたのが、一番のプレゼントだよ」

顔を隠したまま、そんな可愛いことを言う。わたしよりよほど可愛いじゃないか、なんて思いながら包みをゆつくりと剥いだ。

元々抜き身をすぐにあげるつもりだったのだ。簡素な袋にしか入っていないそれを持ち、サンタ帽を両手で持っている彼に近寄った。

ふわつとそれを広げて、彼の肩にかけた。それからその布を無理やり引き寄せて、帽子から出た頬に唇を押し付ける。

肌はちよつとだけ冷たくて、でも中に温かみがこもっている頬は気持ちいいなと感じた。

「肩にかけても、膝にかけても暖かいからね」

わたしの方が野獣じゃないか、と自分に言いながら、急に恥ずかしくなつて離れようとした。

それなのに何故かベッドに帰れなくて、無理やり方向転換させられた瞬間ニコの赤い顔が目の前にあった。『反則』と呟いて、ニコ

はこちらを見つめる。

頬の手は冷たいのに優しくくて、やっぱり幸せで笑ってしまふ。全然怖くない。ニコが相手だったら、何にも怖くない。

そう思って、自分から背伸びをして目を閉じた。

聖なる夜に（後書き）

中途半端なところできつた自覚はありますが、これ以上続けたらニコが可哀想なので。健全に終わったのかどうかは読者の皆様方の想像力にお任せいたします。

個人的にニコが狼なのはご承知のとおりだと思っているのですが。

今回は物語の時間とほぼ同じ時間にUPできたよ！ もう当分やりたくないです、こんなギリギリスケジュール。

甘さは我が家の作品で随一を行くのではないかと！（本編で）

一応本編はこれで終わりということになりますが、あと二本は絶対を書くので、しばらく連載中にしときます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7701u/>

サンタクロースの恋人

2011年12月25日01時47分発行